

美方郡村岡町所在

筒井遺跡
庵の谷遺跡
大寺山古墳群
小田池遺跡

-一般県道村岡竹野線道路改良工事に伴う発掘調査報告書 -

2004年3月

兵庫県教育委員会

美方郡村岡町所在

筒井遺跡
庵の谷遺跡
大寺山古墳群
小田池遺跡

-一般県道村岡竹野線道路改良工事に伴う発掘調査報告書-

2004年3月

兵庫県教育委員会



1. 調査地遠景（南南西から）



2. 調査地遠景（南西から）



1. 調査地遠景（南東から）



2. 調査地遠景（北北西から）



1. 全景（南から）



2. 墓群全景（上空から）



1. 遠景（北東から）



2. 遠景（南から）



3. 全景（南東から）



4. 全景（南東から）



5. 1号墳全景（上空から）



6. 2号墳全景（上空から）



1. 遺跡遠景（東から）



2. 遺跡全景（北西から）



1. SH04・05 (東から)



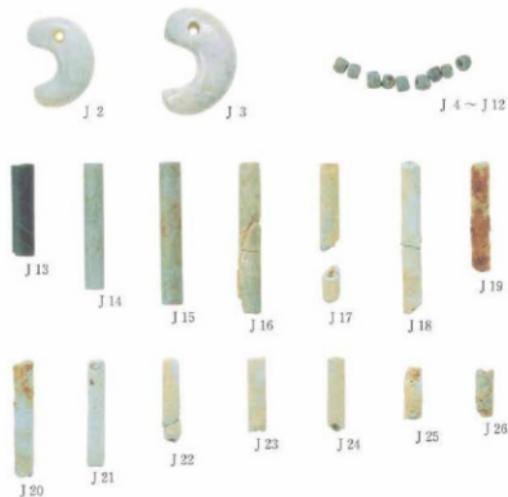
2. SH05 (南から)



1. 小田池窯（東から）



2. 小田池窯（東から）



1. 玉 頬



2. 須恵器・青磁

例　　言

1. 本書は兵庫県美方郡村岡町に所在する筒井遺跡、庵の谷遺跡、大寺山古墳群、小田池遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は一般県道村岡竹野線道路改良工事に伴い、浜坂土木事務所村岡出張所からの依頼に基づいて行った。
3. 分布調査は平成3年度（遺跡調査番号910014：以下、「調査番号」と略す）と、平成4年度（調査番号910163）に実施し、確認調査を平成3年度（調査番号910047・048・102）と、平成4年度（調査番号920197・198）に実施した。全面調査は、庵の谷遺跡（調査番号920196）、大寺山古墳群（調査番号920285）、筒井遺跡（調査番号920195）が平成4年度、小田池遺跡が平成5年度（調査番号930019）に実施した。
4. 調査で使用した座標は国土座標第V系を使用した。また、水準は東京湾平均海水準(T.P.)を使用した。
5. 現地での写真撮影は各調査担当者が行った。航空写真撮影は筒井遺跡、庵の谷遺跡、大寺山古墳群は写測エンジニアリング株式会社、小田池遺跡は株式会社バスコに、遺物写真はイーストマン株式会社に委託して行った。
6. 整理作業は、平成14年・15年度に兵庫県但馬県民局からの依頼に基づいて行った。
7. 遺物番号の前の記号は、Sが石器、Jが玉類、Tが鉄器を表し、それぞれに独立して番号をふった。
8. 本書の執筆は目次に示したとおり、各担当者が行った。編集は嘱託職員大前篤子の協力を得て、中村が行った。
9. 本書にかかる遺物・図面は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　魚住分館（明石市魚住町清水字立合池ノ下630-1）で保管している。また、写真については同事務所（神戸市兵庫区荒田町2-1-5）で保管している。
10. 発掘調査・整埋作業にあたって、下記の方々・機関のご協力・ご指導を得ました。記して感謝致します。

（順不同、敬称略） 中村典男、吉井秀夫、村岡町教育委員会



遺跡の位置

本文目次

例　言

第1章　はじめに	1 (中村)
第1節　調査に至る経緯と経過	
第2節　整理作業の経過	
第2章　位置と環境	3 (中村)
第3章　筒井遺跡	
第1節　概要	6 (藤田)
第2節　層序	6 (藤田)
第3節　遺構	6 (藤田)
第4節　遺物	8 (藤田)
第5節　小結	10 (藤田)
第4章　庵の谷遺跡	
第1節　概要	12 (藤田)
第2節　層序	12 (藤田)
第3節　遺構	12 (藤田)
第4節　遺物	18 (藤田)
第5節　小結	20 (藤田)
第5章　大寺山古墳群	
第1節　概要	25 (藤田)
第2節　1号墳	25 (藤田)
第3節　2号墳	27 (藤田)
第4節　小結	28 (藤田)
第6章　小田池遺跡	
第1節　概要	29 (中村)
第2節　層序	29 (中村)
第3節　遺構	29 (中村)
第4節　遺物	32 (中村)
第5節　小結	34 (中村)
第7章　まとめ	38 (中村)

挿図目次

第1図 分布調査表採遺物	2
第2図 周辺の遺跡	5
第3図 木棺の長さと幅	21
第4図 木棺の主軸方向	21
第5図 木棺の構造からみた 墳墓群の模式図	21
第6図 大寺山古墳群出土遺物	28
第7図 窯地区割り図	32
第8図 タツケ平遺跡の遺構・遺物	35
第9図 小田池遺跡出土初期須恵器の類例	36

表目次

第1表 調査一覧表	1
第2表 周辺の遺跡	4
第3表 土器一覧表	39
第4表 玉一覧表	43
第5表 石器一覧表	44
第6表 鉄器一覧表	44

図版目次

遺跡全体

図版1 分布調査成果図
図版2 発掘調査位置図

図版3 確認トレンチ配置図

筒井遺跡

図版4 調査区位置図
図版5 土層断面図
図版6 繩文時代の遺構

図版7 萬葉時代の遺構
図版8 中世の遺構

庵の谷遺跡

図版9 調査区位置図
図版10 遺構配置図(1)
図版11 遺構配置図(2)
図版12 第1墳墓群(SX01・02)
図版13 第2墳墓群(SX03~05)
図版14 第3墳墓群(SX06・07)

図版15 第3墳墓群(SX08~11)
図版16 第3墳墓群(SX14)
図版17 第4墳墓群(SX12・13)
図版18 溝・獨立柱建物跡

大寺山古墳群

図版19 調査区位置図
図版20 地形測量図

図版21 墳丘断面図
図版22 1号墳石棺(1)

図版23 1号墳石棺(2)
図版24 1号墳石棺内遺物出土状況
図版25 2号墳石棺(1)

図版26 2号墳石棺(2)
図版27 2号墳石棺(3)

小田池遺跡

図版28 調査区位置図
図版29 遺構配置図
図版30 土層断面図(1)
図版31 土層断面図(2)
図版32 SH01・02

図版33 SH04
図版34 SH05
図版35 小田池窯 窯体実測図
図版36 小田池窯 全体図(1)
図版37 小田池窯 全体図(2)

遺物実測図

図版38 筒井遺跡 出土土器
図版39 筒井遺跡 出土石器(1)
図版40 筒井遺跡 出土石器(2)
図版41 塚の谷遺跡 出土土器・玉
図版42 塚の谷遺跡 出土土器

図版43 大寺山古墳群 出土玉類・鉄器(1)
図版44 大寺山古墳群 出土鉄器(2)
図版45 小田池遺跡 出土土器(1)
図版46 小田池遺跡 出土土器(2)
図版47 小田池遺跡 出土土器(3)

カラー写真図版目次

遺跡全景

カラー写真図版 1 1. 調査地遠景(南南西から) カラー写真図版 2 1. 調査地遠景(南東から)
2. 調査地遠景(南西から) 2. 調査地遠景(北北西から)

庵の谷遺跡

カラー写真図版 3 1. 全景(南から) 2. 墳墓群全景(上空から)

大寺山古墳群

カラー写真図版 4 1. 遠景(北東から) 4. 全景(南東から)
2. 遠景(南から) 5. 1号墳全景(上空から)
3. 全景(南東から) 6. 2号墳全景(上空から)

小田池遺跡

カラー写真図版 5 1. 遺跡遠景(東から) カラー写真図版 7 1. 小田池窯(東から)
2. 遺跡全景(北西から) 2. 小田池窯(東から)
カラー写真図版 6 1. SH04・05(東から)
2. SH05(南から)

出土遺物

カラー写真図版 8 1. 玉類

2. 須恵器・青磁

写真図版目次

筒井遺跡

写真図版 1	遺跡遠景	写真図版 5	C 区
写真図版 2	全 景	写真図版 6	C 区
写真図版 3	B区SK01	写真図版 7	C 区
写真図版 4	B 区		

庵の谷遺跡

写真図版 8	墳墓群	写真図版20	SX03・04・05・06断面
写真図版 9	第 2 墳墓群	写真図版21	第 3 墳墓群SX08
写真図版10	第 2 墳墓群	写真図版22	SX07・08断面
写真図版11	第 3 墳墓群	写真図版23	第 3 墳墓群SX09
写真図版12	第 4 墳墓群	写真図版24	SX10・11
写真図版13	第 4 墳墓群周辺調査状況	写真図版25	第 3 墳墓群SX14
写真図版14	第 1 墳墓群SX01	写真図版26	第 4 墳墓群SX12
写真図版15	第 1 墳墓群SX02	写真図版27	第 4 墳墓群SX13
写真図版16	第 2 墳墓群SX03	写真図版28	第 4 墳墓群SX15
写真図版17	第 2 墳墓群SX04・05	写真図版29	第 4 墳墓群SX16
写真図版18	第 3 墳墓群SX06	写真図版30	SD01～03
写真図版19	第 3 墳墓群SX07	写真図版31	SB01

大寺山古墳群

写真図版32	1号墳	写真図版35	2号墳石棺
写真図版33	1号墳石棺	写真図版36	2号墳石棺
写真図版34	2号墳	写真図版37	2号墳石棺

小田池遺跡

写真図版38	住居址 (SH01・02)	写真図版42	小田池窯 検出全景
写真図版39	住居址 (SH04)	写真図版43	小田池窯 完掘全景
写真図版40	住居址 (SH05)	写真図版44	小田池窯 窯体断面
写真図版41	住居址 (SH05)	写真図版45	小田池窯 窯壁除去後全景

出土遺物

写真図版46 筒井遺跡
写真図版47 筒井遺跡
写真図版48 筒井遺跡
写真図版49 筒井遺跡
写真図版50 喬の谷遺跡
写真図版51 喬の谷遺跡
写真図版52 喬の谷遺跡
写真図版53 喬の谷遺跡
写真図版54 大寺山古墳群

写真図版55 大寺山古墳群
写真図版56 小田池遺跡
写真図版57 小田池遺跡
写真図版58 小田池遺跡
写真図版59 小田池遺跡
写真図版60 小田池遺跡
写真図版61 小田池遺跡
写真図版62 小田池遺跡



124



125



S15



S16

分布調查表採遺物

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯と経過

兵庫県では、平成6年度に美方郡村岡町和池において、第45回全国植樹祭が開催されることとなった。全国植樹祭は、天皇・皇后両陛下によるお手植えの植樹を始め、全国各界の代表者の記念植樹等により、国民の森林に対する愛情を培うと共に、国土保全、森林資源の確保、環境緑化の推進などに寄与することを目的に全国各都道府県の持ち回りで開催してきているものである。

兵庫県においては、第5回の神戸市垂水区「小東山」で開催した経緯があるが、「さわやか県土づくり」「兵庫県のイメージアップ」とともに、県民の緑地思想の高揚と地域の森林・林業の活性化を図るために、2巡目の第1回（第45回）を誘致することとなった。

そこで、植樹祭の会場とそのアクセス道路、及び迂回路を整備する必要があるため、平成3年度に兵庫県農林水産部及び兵庫県浜坂土木事務所から、当該部分の分布調査の依頼を受けた。この時点では、正式な開発部分が決定していなかったため、分布調査を行うにあたっては開発候補とされている部分以外にもやや広範囲に調査を行った（調査番号910014）。その結果、全国植樹祭No1からNo18までの計18カ所で埋蔵文化財包蔵地の可能性が明らかとなった（図版1）。

これを受け、農林水産部よりNo17地点とNo18地点の確認調査の依頼があり、調査を実施した（調査
第1表 調査一覧表

調査調査番号	調査依頼	事業名	所在地	遺跡の名称	調査権利	調査面積	担当者	期間	結果
910014	農林水産部	全国植樹祭会場造成工事	和池・宿	—	分布調査	—	村上賀治・平瀬昭光・ 妻田淳子・中村 弘	平成3年4月15日～17日	2地点で埋蔵文化財包蔵地の可能性あり
910014	浜坂土木事務所	(一)萩山福岡間道路改良事業	森脇・和池・黒田・福岡・飯ほか	—	分布調査	—	村上賀治・平瀬昭光・ 妻田淳子・中村 弘	平成3年4月15日～17日	10地点で埋蔵文化財包蔵地の可能性あり
910047- 910048	農林水産部	全国植樹祭会場造成工事	和池十・福永 野尻	全国植樹祭No1- 17-18地点	確認調査	378m ²	妻田淳子・中村 弘	平成3年7月23日～8月8日	埋蔵文化財包蔵地は確認されず
910102	浜坂土木事務所	(一)萩山福岡間道路改良事業	森脇字小瀬道1・ 5番地	全国植樹祭No5 地点	確認調査	124m ²	村上賀治・高井治巳	平成3年10月22日～24日	電の弱道跡
910163	浜坂土木事務所	(一)萩山福岡間道路改良事業	森脇・板石寺	全国植樹祭No1- 12-13-18地点	分布調査	1,900m ²	村上賀治・西口圭介	平成4年3月24日～25日	荒井遺跡(No1地点) 大谷山古墳群(No12地点) 小谷山遺跡(No13地点)
920197	浜坂土木事務所	(一)萩山福岡間道路改良事業	黒田字なめた 363	大寺山古墳群	確認調査	215m ²	藤田 淳・高井治巳	平成4年6月24日～8月4日	埋蔵文化財包蔵地が確認される
920198	浜坂土木事務所	(一)萩山福岡間道路改良事業	森脇小田地	小折池遺跡	確認調査	77m ²	藤田 淳・高井治巳	平成4年6月24日～8月5日	埋蔵文化財包蔵地が確認される
920196	浜坂土木事務所	(一)萩山福岡間道路改良事業	森脇字小瀬道1・ 5番地	庵の谷遺跡	全面調査	968m ²	藤田 淳・高井治巳	平成4年7月28日～9月3日	生糸の墳墓地
920195	浜坂土木事務所	(一)萩山福岡間道路改良事業	福岡字筒井1328 -1-1330-1-1331 -1	筒井遺跡	全面調査	753m ²	藤田 淳・高井治巳	平成4年8月31日～10月30日	調文～半世
920286	浜坂土木事務所	(一)萩山福岡間道路改良事業	黒田字なめた 363	大寺山古墳群	全面調査	588m ²	藤田 淳・高井治巳	平成4年11月2日～12月21日	古墳2基
920319	浜坂土木事務所	(一)萩山福岡間道路改良事業	村岡町板仕野	—	分布調査	6,800m ²	平田博幸	平成4年11月17日	埋蔵文化財包蔵地は確認されず
930019	浜坂土木事務所	(一)萩山福岡間道路改良事業	森脇小田地	小折池遺跡	全面調査	682m ²	吉澤雅仁・中村 弘	平成5年5月6日～6月30日	古墳時代集落・古 代窯1基

番号910047・910048)。調査の結果、当該地は埋蔵文化財包蔵地ではないことが明らかとなった。

さらに、浜坂土木事務所よりNo 5地点の確認調査の依頼があり、調査を実施した(調査番号910102)。調査の結果、埋蔵文化財の包蔵が明らかとなり、平成4年には遺跡名を「庵の谷遺跡」として全面調査を実施した(調査番号920196)。

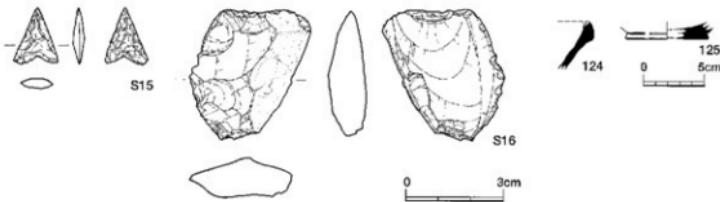
また、No 1地点、No12地点、No13地点、No19地点については再度分布調査を実施し(調査番号910163)、No 1地点は埋蔵文化財の包蔵が明らかとなったため、平成4年には遺跡名を「筒井遺跡」として全面調査を実施した(調査番号920195)。No12地点については平成4年に確認調査を実施し(調査番号920197)、埋蔵文化財の包蔵が明らかとなったため、引き続き同年に全面調査を行った(調査番号920285)。当地点は周知の遺跡であることから、遺跡名はその名称を採用して「大寺山古墳群」とし、調査した範囲内で検出された古墳について順に大寺山1号墳・2号墳とした。

No13地点については平成4年に確認調査を実施し(調査番号920198)、埋蔵文化財の包蔵が明らかとなったため、平成5年には「小田地遺跡」として全面調査を行った(調査番号930019)。その後、整理時には遺跡名を字名から採用することとし、「小田池遺跡」と改めた。

なお、分布調査時に採集した遺物について、以下に報告する。石器のS15は図版1のNo19地点、S16はNo19地点、土器の124はNo 2地点、125はNo 3地点、126はNo 2地点で採集した。

S15は安山岩製の打製凹基式石鏃、S16は楔形石器で、サヌカイト製と思われる。

土器には須恵器と青磁がある。124は須恵器コネ鉢であるが、小片のため、径は明らかにできない。端部はやや上方へつまみ上げている。125は須恵器碗の底部である。低く突出する底部で、内面は凹はない。外面には回転糸切りの痕跡が認められる。126(カラー写真図版8)は竈泉窯系の青磁碗で、外面にはしのぎが不明瞭な連弁文が認められる。



第1図 分布調査表採遺物

第2節 整理作業の経過

整理作業は平成14年度と15年度の2年間にわたって行った。初年度は水洗・ネーミング・接合・補強・実測を行い、次年度はトレース・レイアウト・印刷・保存処理を行った。

水洗・ネーミングは魚住分館(明石市魚住町清水所在)で行い、その他の作業は荒田事務所(神戸市兵庫区)で行った。

金属器については保存処理を行った。処理にあたっては事前にレントゲン写真を撮影し、水酸化リチウムで脱塩処理をした後、錆取りを行った。強化にはアクリル系合成樹脂であるパラロイドNAD-10を使用した。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

今回調査をおこなった遺跡は兵庫県美方郡村岡町に位置する。美方郡は兵庫県の北西の端にあり、北は日本海に臨み、東は城崎郡、西は鳥取県、南は養父郡に接する。都制施行により七美郡と二方郡が合併して成立した。現在は温泉町、浜坂町、美方町、村岡町からなる。村岡町は美方郡の南端にあたり、東は城崎郡高町、南は養父郡関宮町、八鹿町、西は美方郡美方町、温泉町、北は浜坂町、城崎郡香住町に接している。町域の87%が山林で、周囲には1,000m級の山々がそびえ、大きな峠を介して他の地域と通じており、まとまりのある土地柄となっている。平坦地は中央を北流する矢田川とその支流の湯舟川、熊波川、山田川の流域に限られている。

今回調査を行った遺跡は村岡町の森脇、福岡、黒田に位置する。瀬川山の山麓、湯舟川の最上流左岸にあたり、南は八井谷畔を経て関宮町に接する。調査地周辺は湯舟川を挟むように東西両側から山が迫っているが、森脇、福岡、黒田の集落の周囲は比較的平地が開けており、およそ東西500m、南北1kmにわたって盆地状の地形となっている。遺跡はこの平地の西側にあり、兎和野高原から南東へと延びる尾根上と、その眼下に広がる沖積地に立地している。

第2節 歴史的環境

当地には地元の考古学者、山根武が精力的に活動をされており、その成果は私設の兔塚資料館をへて、現在は村岡町立まほろば館として公開されている。氏の業績により、大規模な調査が少ないにもかかわらず、多くの歴史が明らかとなっている。

矢田川上流の妙見山西部、瀬川山北東部の山麓や台地には縄文時代の遺跡が多数確認されている。その中で各時期の土器が発見されている福岡のタツケ平遺跡（37～39）は特に著名である。押型文土器をはじめ、前期から後期の土器や多数の石器類も発見されている。また、兎和野原遺跡出土の薄手土器は兎和野原式土器と呼ばれ、アナグラ属の貝の背を押した圧痕があり、山岳部での縄文前期土器片として注目すべきものである。ほかに、曾畠式に類似した土器が出土した小伝次遺跡（22）や、中期では高井の蛇雨遺跡（5）、後期では村岡の福西遺跡、福岡の田原遺跡などがある。また、円形の块状耳飾とともに押型文の平底土器を出土する粗陶遺跡があり、西方文化との交流も考えられている。

弥生時代になると遺跡数は減少し、主なものとして、福岡タツケ平遺跡（37～39）、田原遺跡があるほか、三島台で貼り付け突窓の壺が出土している。

古墳時代になると、兔塚地区を中心に古墳が築造されるようになる。森脇の崩の谷1・2号墳（26・27）、福岡の八幡山古墳群（31～33）、兎の塚古墳のほか、寺河内には金銅装頭椎大刀や馬具が出土した文堂古墳（11）がある。高井の三の谷1・2号墳（6・7）では横穴に線刻が認められ、大野古墳では馬具・大刀などが出土した。さらに、長者ヶ平2号墳では蓮華文の壁画が見つかっている。

一方、集落遺跡としては、今回調査を行った小田池遺跡（24）のほかに、タツケ平遺跡（37～39）があり、方形の堅穴住居が2棟検出されている。

律令制下では、七美郡に属し、「和名抄」に見える「兎東郷」「七美郷」「射添郷」に比定されている。

このうち調査地周辺は兎東郷に属していた。特に前田遺跡からは青磁・墨書き土器などの遺物が出土しており、官衙であったと考えられる。また、山陰道が当地を通っており、射添駅が設置されていた。場所は確定されていないが、今の射添地区である和田あるいは川会付近と考えられているが明らかでない。

中世には長講堂領兎東莊、七美莊があった。但馬国大田文によると前者が52町1反余り、後者が33町であった。山城としては、高堂城跡、粗岡城跡、中村城跡（長坂城跡）、丸味城跡、中山城跡などがある。中山城は福岡にあり、鎌倉期には菟東氏、南北朝期には足利一族の上野氏、文明年間には富田美濃守、太田垣時久らの居城であったが、後に山名氏の一族豊道が一時居城、まもなく八木氏の支城となり、天正5年に秀吉軍に下った。また、発掘調査されたものとして、福西砦がある。室町時代から戦国期のもので、郭が南北80m、三条の堀切により4つに区画されている。中心の郭は南北40m、東西10mを測り、郭内はさらに土塁で3つに区切られていた。南よりの区画からは礎石が検出されている。出土遺物には青磁碗、備前焼大甕のほか鉄製品がある。

近世にはいると、山名豊国は福岡に陣屋を構えたが、3代矩豊のときに黒野（今の村岡）に移り、城下町が形成された。以降、町域のほとんどは江戸期を通じて旗本山名氏の支配に属した。

<参考文献>

村岡町 1980年『村岡町誌』通史編 上巻

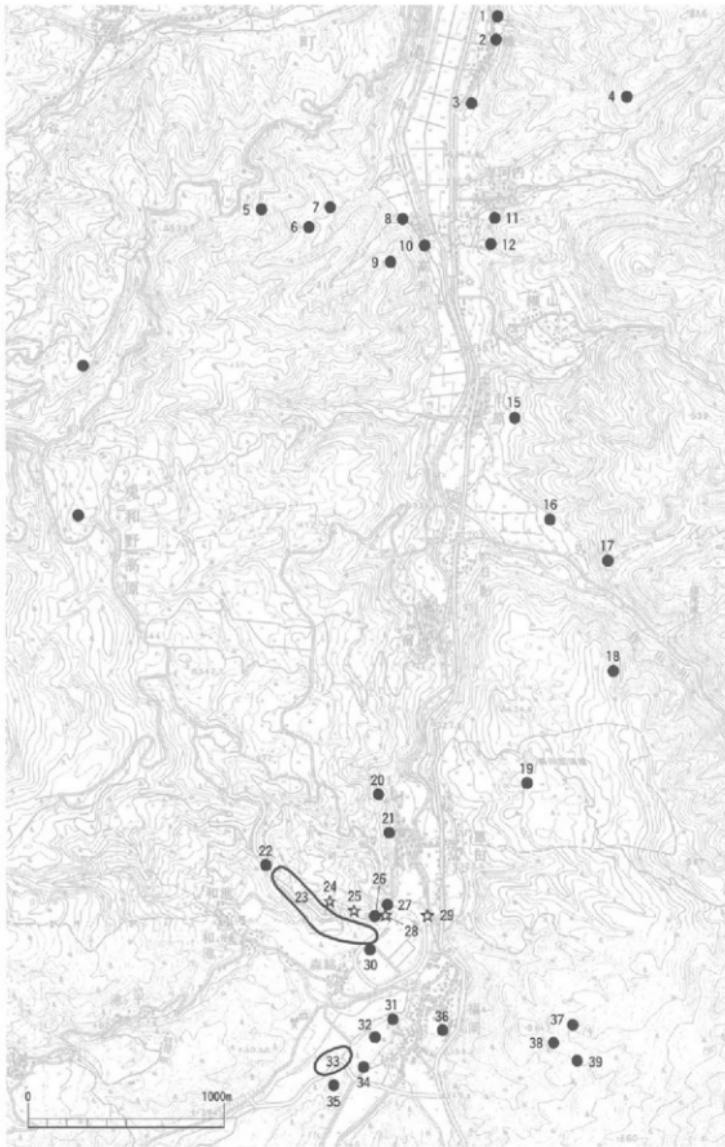
谷本 進 1985年「漆記号を施した須恵器について」『但馬考古学』第2集

但馬考古学研究会 1990年『但馬を掘る』

第2図 周辺の遺跡

番号	遺跡の名称	種類	時代
1	谷口古墳	古墳	古墳
2	(名称なし)	古墳	古墳
3	秋岡古墳	古墳	古墳
4	榎原古墳	古墳	古墳
5	蛇雨遺跡	散布地	不明
6	三之谷2号墳	古墳	古墳
7	三之谷1号墳	古墳	古墳
8	高井古墳	古墳	古墳
9	鷹ヶ岡古墳	古墳	古墳
10	家ノ上遺跡	散布地	不明
11	文堂古墳	古墳	古墳
12	塔ヶ丘遺跡	寺院跡	不明
13	上ノ仲古墳	古墳	古墳
14	(散布地)		
15	牛屋古墳	古墳	古墳
16	北畠遺跡	散布地	不明
17	作谷古墳	古墳	古墳
18	谷作遺跡	散布地	不明
19	笠波遺跡	散布地	不明
20	中尾遺跡	散布地	不明
21	尾ノ上古墳	古墳	古墳

番号	遺跡の名称	種類	時代
22	小伝次遺跡	散布地	縄文
23	大寺山3~10号墳	古墳	古墳
24	小田池遺跡	古墳	古墳・奈良
25	大寺山1・2号墳	古墳	古墳
26	庵ノ谷2号墳	古墳	古墳
27	庵ノ谷1号墳	古墳	古墳
28	庵ノ谷遺跡	古墳	弥生
29	筒井遺跡	古墳	縄文～中世
30	前田遺跡	古墳	古代
31	八幡山1号墳	古墳	古墳
32	八幡山2号墳	古墳	古墳
33	八幡山4~7号墳	古墳	古墳
34	兎の屋古墳	古墳	古墳
35	八幡山3号墳	古墳	古墳
36	八斗台古墳	古墳	古墳
37	三鳴遺跡	散布地	不明
38	タツケ平遺跡第1地点	散布地	縄文・古墳
39	タツケ平遺跡第2地点	散布地	縄文・古墳
	タツケ平遺跡第3地点	集落跡	縄文・古墳



第2図 周辺の遺跡 (☆は今回調査した遺跡)

第3章 筒井遺跡

第1節 概要

筒井遺跡は、美方郡村岡町福岡字筒井に所在する。湯舟川左岸の幅狭い段丘上に立地し、現河床との比高差は13m前後である。遺跡周辺は現在棚田に開墾されており、調査区は水田4筆にまたがる。集落へ通じる狭険な道や畦を境として、3つの調査区に区分した。湯舟川に近い方から、A区、B区、C区である。調査面積は3地区合わせて753m²である。

A区では遺構、遺物ともほとんど発見されなかつたが、B区とC区では2面の遺構面があり、散漫ながら縄文時代、弥生時代後期、中世の遺構が発見された。

縄文時代では、C区で住居跡状遺構2基と土坑3基を検出した（図版6）。

弥生時代では、B区で弥生時代後期の土坑2基と溝1条が検出され、小規模な焼土も存在した（図版7）。

中世では、C区で掘立柱建物が1棟検出され、B区の溝1条もおそらくこれに近い時期のものと思われる（図版8）。

出土遺物はごく少量で、遺構に伴うものもわずかである。

第2節 層序

B区の西壁と東壁、C区の東壁の土層断面図を示す（図版5）。調査を行った深度まででは、黄褐色系のシルト質土が基盤層となっており、その上に漸移層を挟んで、いわゆるクロボクが30～60cmの厚さで堆積している。

C区の土層堆積状況は、ほぼ水平であるが、基盤層は南から北に向かってわずかに傾斜しており、クロボク（7層）の上面では低くなった北側に、4層～6層が堆積している。B区でも同様に、南から北へ向かっての傾斜がある。

縄文時代の遺構は、C区のクロボク直下の漸移層（8層）上面で検出した。

弥生時代の遺構は、B区でのみ認められ、焼土の存在や上器の出土状況を手掛かりにクロボクの最下部近くで検出した。本来はより上位に遺構面があるのかもしれないが、クロボクの握り下げ中に行った幾度かの精査でも遺構面を認めることはできなかった。

中世の遺構は、クロボクの上面（B区）、あるいはクロボクの上に堆積した暗褐色土層（C区6層）の上面で検出した。遺構は埋土の色調の違いにより明瞭に判別できた。

第3節 遺構

縄文時代の住居跡状遺構2基、土坑3基、弥生時代後期の土坑2基、溝1条、中世の掘立柱建物1棟、溝1条が検出された。

① 綱文時代の遺構（図版6）

C区のクロボク直下の漸移層（8層）上面で検出したもので、C区中央付近で散漫に分布するピットと土坑からなる。ピットは円形状に並んでいるところが、3mほどの間をおいて2ヶ所あり、住居跡状の遺構と考えた（SH01・SH02）。ピットは径20cm以下の小さなものであるが、まっすぐに掘り込まれたものと、斜めに掘り込まれたものがある（写真図版7）。その西側には土坑状の遺構が3つ並んでいるが、北側の2基（SK01・SK02）から石器が出土している。

SH01

10基ほどのピットが長径3.5m、短径2.9mほどの楕円形状に並んでいる。ピットの間隔は一定しておらず、狭いところは50cmほど、広いところは2m以上開いている。中央は確認調査時の手掘りの跡があり、土坑等の有無は不明である。

遺物は出土していない。

SH02

10基ほどのピットが径3.3mほどの円形状に並んでいる。ピットの間隔は一定しておらず、狭いところは50cmほど、広いところは2mほど開いている。円の中にも東寄りに小ピットや浅い窪みがあるが、炉跡のようなものは存在しない。

遺物は出土していない。

SK01

長径1.2m、短径0.7m、深さ17cmの小さな楕円形土坑である。遺物は石器（S8）が出土したのみである。

SK02

径約2.5m、深さ30cmのやや不整な円形土坑である。土坑の底は平坦で、壁は比較的急に立ち上がり、部分的に小さくオーバーハングしているところがある。埋土は3層に分かれるが、黒色～暗灰色の砂質土である。埋土の堆積状況は、より上層からの掘削を示す。

遺物は石器（S13）が出土したのみである。

② 弥生時代の遺構（図版7）

B区のクロボク下部で検出した。B区は水田2筆分の調査区であるが、土坑1基（SK03）を除いて、南西隅の1段高いところで検出されている。東側は後世に削平されてしまったようである。南西隅側の遺構（SK04、SD01）はごく浅いものであるが、土器が出土し、焼土も認められる。SK03はこれらの遺構と10m程離れており、遺物も出土していないため、同時期の遺構とは断定できない。

SK03

長径4.1m、短径3m、深さ60cmの不整形な土坑である。底部は多少の凹凸はあるが広く平坦である。埋土は、最下層にクロボク起源の黒色土（10層）が全体に堆積している。その上には地山起源の黄灰色シルト質土を大きくブロック状に含む8・9層が盛り上がるよう堆積する。ところによっては、8層は10層に食い込むような状況を呈する。そして、8層上面の窪みを埋めるように黒色～褐色の1～7層が堆積しており、部分的に焼土（6層）が認められる。この窪みからは漆が数点出土している。土層の堆積状況は、クロボクと地山土が逆転して堆積した状況を示しており、風倒木痕のようなものである可

能性が考えられる。しかし、焼土が存在していることから、何らかの人为的な作用も受けているのであろう。

自然縛が数個出土しただけで、遺物は出土していない。

S K04

長さ4m以上、幅1.9m、深さ7cmのごく浅い不整形な土坑である。東辺から幅20cm弱の浅い溝が延びる。

遺物は土坑の底から小型の脚付き鉢（1）1個体がまとまって出土した。

S D01

S K04の南にあり、掠乱でわからなくなっているが、S K04に取り付く溝かもしれない。東側は削平により失われている。最大幅20cm、深さは5cmほどの小さな溝であるが、溝の上面と北側から土器が出土した（2・3）。また、溝の中央あたりには焼土が薄く認められた。同様な焼土は溝の北側約60cmのところにもあり、溝の北側にはピット状の小穴も数在している。堅穴住居跡の周溝とも考えられるが、これと対応するような柱穴は認められない。

③ 中世の遺構（図版8）

C区北端では、クロボクの上に薄く堆積した暗褐色砂混じりシルト層（6層）の上面から掘り込まれたピットが集中し、掘立柱建物跡1棟を認めることができる（S B01）。ピットは7mほど離れたB区にはまったく広がっていない。また、B区南寄りのクロボク上面に溝1条がある（S D02）。弥生時代の遺構と同様に、一段低い東側では削平されて残っていない。

S B01

東西1間、南北2間分を確認した。柱の掘立柱建物で、方向はN22°Wを向く。柱間は東西が2.2m、南北が2.8mである。柱の深さは深いものでは40cm以上掘り込まれている。柱穴には底に石を置いたものがある。

遺物は南西隅の柱穴上部から土師器の皿（4）が出土している。

S D02

幅40cm、深さ40cmあり、一直線状に延びる溝である。方向はS B01の前辺に対して約10°北に振れる。埋土は褐色の砂質シルトで、底には部分的に砂礫が堆積している。遺物は出土していないが、層位的にみて中世の遺構とした。

第4節 遺 物

土器と石器がある。縄文時代の土坑からは石器が、弥生時代の溝とその周辺からは弥生土器と砥石が、掘立柱建物跡からは土師器が出土した。その他、クロボクを中心に縄文土器や弥生土器、土師器と石器がわずかであるが出土した。

① 縄文時代

S K01出土遺物

S 8は頁岩製の剥片である。比較的大型の剥片で、腹面側に粗い剥離面が認められるが、刃部を形成するような剥離ではないため、剥片としておく。

S K02出土遺物

S 13は凹石である。今回出土した凹石の中で最も大きい。窪みは両面に形成されているが、表側は中央に1つの窪みがあり裏側はごく浅い窪みが散らばる。

② 弥生時代

S K04出土遺物

1は小型の脚付き鉢である。椀状の体部から口縁部はまっすぐ上方に伸び、端部は丸くおさめる。外面の調整はハケの後へラミガキを施す。ヘラミガキは、口縁部は横方向に、体部と脚部は縱方向に丁寧に行われている。内面はヘラケズリの後へラミガキを施す。やはり、口縁部は横方向である。

S D01出土遺物

2は口縁部外面に13条の擬凹線を巡らせたものである。壺の口縁部と思われるが小片であるため、器台や高杯の可能性もある。3は甕である。口縁部を「く」の字に屈曲させ、心もち上下に拡張させた内傾する壺面には2条の浅い擬凹線が巡る。体部は卵形に膨らみ、中程より少し上に最大径をもつ。体部の調整は、外面は縱方向のハケで内面はヘラケズリである。ハケは1cm当たり6条と目が粗い。体部外面にはススが付着している。

S 14は砥石である。表裏と両側面の4面が砥面となっている。砥面はすべて平坦である。

③ 中世

S B01出土遺物

4は土師器の皿である。手づくねで、ゆがみがあり、器壁は厚みがある。径7.7cm、器高1.7cm。

④ 包含層出土遺物

縄文土器、弥生土器、土師器、石器が出土した。遺物のほとんどはクロボク中から出土している。

縄文土器

6は先が薄くなった薄い板状の施文具で刺突して、直線的な文様を連続させたものである。施文は2段にわたって行われている。7は外面に条痕を施したものである。8は内外面に条痕を施した後、外面に板状施文具による刺突文様がある。施文は鋭い山形となるように角度を変えながら連続して行われているようである。胎土に雲母を多く含む。

弥生土器

9～11、13は甕である。9、10は口縁部を屈曲させ、端部を上方につまみあげる。口縁部外面には2条の浅い擬凹線を施す。体部外面の調整はハケ、内面はヘラケズリである。9のハケメは1cm当たり5条と粗い。11は受け口状の口縁部をもち、端部をナデによって上方につまみ上げる。内面の調整はヘラケズリである。3点とも器壁にはススが付着している。13は径の小さな底部破片である。外面は1cm当たり16条の目の細かいハケメが、内面は粗いヘラケズリが施されている。

12は鉢である。体部は斜め上方に立ち上がり、口縁部は薄く外反する。体部内面はヘラケズリの後横

方向のナデを施し、体部外面は縱方向のナデを施す。

土師器

S 5 は直である。体部からやや屈曲して口縁部にいたる。

石 器

S 1 と S 2 は石鎚である。S 1 は流紋岩製と思われる凹基式石鎚で、風化が進んで白色化し非常に脆くなっている。側縁は心もち内彎し、抉りは浅い。調整剥離は全面には及ばず、両面とも中央に素材面を残す。先端や基部が破損しているが、長さ 2 cm 強、重量は 1 g 程度の小型品である。S 2 は安山岩製の尖基式石鎚で、長さが 4 cm を越え、重量も 10 g 近くある。比較的大きな剥離面で構成されており、薄く均整のとれた形態に仕上げられている。

S 3 と S 4 は石匙である。S 3 は灰白色をした珪質頁岩製の横型石匙で、自然面打面をもつ縱長剥片を素材とする。一側縁に平凹剥離を連続させて、直線的でやや厚みのある刃部を作り出し、打面側の両側縁に小さな抉りを入れて摘みとする。調整剥離は背面側を行われている。S 4 はサスカイト製の横型石匙で、三角形状に整えた身に小さな摘みを作り出す。刃部の調整剥離は背面側からのみ行われ、緩やかに外彎する薄刃の刃部をつくるが、他は両面から行われている。

S 5 は扁平片刃石斧である。部分的に磨き残された所があるが、全面を研磨して角の立った長方形に仕上げられている。刃部は片刃であるが、裏面からも研磨を行い、鏡く磨き出している。

S 6 と S 7 は削器である。ともに安山岩製で階段状の粗い刃部をもつ。

S 9 は安山岩製の横長剥片である。薄く剥離されているが、腹面側は不規則な剥離を示す。背面には石核底面をもつ。

S 10～12 は円石である。比較的整った楕円形の模が利用されている。S 10 は両面にそれぞれ 1 つ、S 11 は 2 つ、S 12 は片面に 1 つの窪みをもつ。S 10 の窪みは両面とも浅く不明瞭なものであるが、S 11 と S 12 ははっきりとした窪みをもつ。磨石や蔽石として兼用された痕跡は認められない。

これらの石器は大部分が縄文時代のものと考えられるが、凸基式石鎚と扁平片刃石斧は弥生時代のものであろう。

第 5 節 小 結

筒井遺跡で発見された遺構は、縄文時代、弥生時代、中世と 3 時期に分かれるが、いずれも小範囲にとどまり、広範囲に広がるものではない。また、遺物量もごくわずかである。

縄文時代の遺構では小さなピットのうち円形に並んでいると思われるものがあり、住居跡状の遺構と考えた。ところで、但馬地域における縄文時代の住居跡の調査例としては、美方郡美方町の上ノ山遺跡が著名である（美方町教育委員会1989）。ここでは、早期後葉の住居跡が 4 棟発見され、その重要性から移築保存されている。住居跡の平面形は円形もしくは楕円形で、径は 3～5 m 程度、床面は全体が皿状に浅く盛むか、片側が深んで緩やかな傾斜をもっている。柱穴は径 10～25 cm、深さ 15～20 cm ほどのものが、20 穴ほど床面の回りを巡っており、床面には中央から少し離れてそれぞれ脚跡と考えられる焼上がある。住居跡内からは少量ながら土器や石器が出土しており、床面に接して石皿が出上しているものもある。また、住居跡近くには貯蔵穴と考えられる土坑も 1 基ある。また、日高郡日高町の神鍋高原遺跡では縄文時代前期の堅穴住居跡 1 棟が発見されている（榎本・瀬戸谷1982）。

筒井遺跡で発見された住居跡状の遺構は神鍋高原遺跡のような堅穴住居跡とは明らかに異なる。上ノ山遺跡の住居跡とは平面形や規模において似通った点があるものの、床面の状況や炉跡、遺物の有無など、住居跡を裏付ける積極的な根拠を欠いている。しかし、SK02のように人為的に擾乱されたと考えられる土坑が近接して存在することから、この付近にのみ散在する小さなピットも人為的なものととらえ、その配列から住居跡の想定することも、まったく見当はずれとは言えまい。その時期については、共伴する土器が皆無でクロボクから出土した土器もわずかであるため、判断がしがたい。あえて、言えば前期以前であろうか。

弥生時代の遺構は浅い土坑や溝で遺物量も少ないが、完形に復元される土器が出土しており、焼土も存在することから、居住の痕跡を示すものと考えられる。遺跡の立地からすると、規模の大きな集落の存在は不可能であり、削平された東側や調査区外の西側に遺構が広がっていたとしても、せいぜい2～3棟の住居で構成されるような小規模な集落であったであろう。時期については発（3）の特徴から弥生時代後期と考えられる。

中世の遺構については掘立柱建物跡1棟と溝だけで広がりを見せない。険隘な山間地に見られる中世の敷村を構成する一戸の例として理解されるであろう。

参考文献

- 美方町教育委員会 1989年 『上ノ山遺跡』
樋本誠一・瀬戸谷皓 1982年 『日本の古代遺跡2 兵庫北部』

第4章 庵の谷遺跡

第1節 概要

庵の谷遺跡は、美方郡村岡町森脇字小国道に所在する。湯舟川の流れる谷へ向かって東へ延びる尾根上に立地している。調査地はその尾根の先端に近い鞍部にあたり、現在は平坦に開墾されて2筆の水田となっている。調査面積は968m²である。

遺跡に隣接する周知の遺跡としては庵の谷2号墳がよく知られている。これは鞍部の先にある尾根の頂部に造営された5世紀の古墳で、前方後円墳であった可能性が指摘されている。庵の谷遺跡のある水田とは急な崖面で接しており、水田に開墾する際に、古墳周辺はかなり削平されたことがうかがえる。庵の谷古墳の墳形を推測する手がかりが得られることも期待して、古墳の間際まで調査範囲としたが、耕土下ですぐに地山に達し、遺構は残存していないかった。

発掘調査の結果、弥生時代後期の墳墓群と掘立柱建物跡が発見された（図版11）。上述のように、遺構はすべて調査区の南側に偏って分布しており、北側約2/3にはまったく存在しない。残存度も、北側の遺構ほど浅くなっている。

墳墓群は木棺墓15基と土壙墓1基の16基あり、区画溝を伴うものもあって4群に分かれ。墳墓に直接伴う遺物は少なく、土器が供獻されたものが3基、菅玉が副葬されたと考えられるものが1基である。

掘立柱建物跡は1棟あり、北辺から西辺にかけてL字状の溝で区画される。

第2節 層序

調査区の大半では耕土直下で黄褐色の地山に達するが、南端に近いSD03の南西側では地山の上に漸移層を挟んでクロボクが堆積している。遺構の埋土はすべてクロボクを基本としていることから、クロボクが見られないSD03の北東側にも、削平前にはクロボクが堆積していたはずである。

第3節 遺構

弥生時代後期の木棺墓15基と土壙墓1基、溝4条、および、掘立柱建物1棟と溝1条が検出された。（図版11）。墳墓群は4群に分かれ、中心的な位置を占めると考えられる第3墳墓群は区画溝を伴い、四隅突出型墳丘墓との関連が考えられる。

① 第1墳墓群

最も北側にある一群で2基の木棺墓（SX01・SX02）からなる。木棺は削平により底部の10cmほどがかろうじて残存していたに過ぎない。したがって、墓壙の検出面で棺体も検出している。SX01とSX02はほぼ平行して並んでいる。遺物はどちらからも出土していない。

なお、SX01の北側にも小さな梢円形の窪みが認められたが、墓壙とは判断できなかった（図版10）。

SX01（図版12）

組み合わせ式箱形木棺墓である。主軸はN52°Wを向く。

墓壙は隅丸長方形で、長さ2.5m、幅90cm、残存する深さは10cmである。

木棺は墓壙のほぼ中央にあり、小口板と側板の組み合わせは「H」字形となる。側板の痕跡は、墓壙を一段掘り下げた段階で、線状に黒色土が延びるのが観察された。棺体の長さは1.8m、幅は東側で56cm、西側63cmとなり、西側が少し幅広い。東側にのみ棺体の幅いっぱいに幅4cm、深さ5cmの小口穴がある。

SX02 (図版12)

組み合わせ式箱形木棺墓である。主軸はN62°Wを向く。

墓壙は隅丸長方形で、長さ2m、幅1m、残存する深さは7cmである。

木棺は墓壙のほぼ中央にあるが長軸方向では少し西に寄る。棺体の長さは1.57m、幅は東側が38cm、西側は30cmあり、SX01よりも20cm以上狭い。西側の棺底には棺体の幅いっぱいに幅4cm、深さ4cmの小口穴がある。幅の広い側は東側、小口穴は西側で、SX01とはちょうど逆になるが、小口穴が幅の狭いほうだけにあることは共通する。

(2) 第2墳墓群

第1墳墓群の南にあり、第3墳墓群の区両溝（SD02）が埋まつた後に造営されたものである。小型の2基を含む3基の木棺墓（SX03～05）からなる。SX03はほぼ南北に主軸を置き、小型のSX04もこれと同様な向きに並んでいるが、もう1基のSX05はこれら二つとは直交する東西方向に主軸を置く。SX04とSX05は墓壙の一部が切り合っており、SX04の方が新しい。なお、SX03の主軸方向は第3群のSX07、08ともほぼ方向を同じくする。

第1墳墓群に比べ、削平の程度は少なくなっているものの、いずれも墓壙の検出面で棺体も検出できた。墓壙と棺内の埋土は、黄褐色土の混合の程度や粒度が異なっている。

いずれの木棺墓からも遺物は出土していない。

SX03 (図版13)

組み合わせ式箱形木棺墓である。主軸はN13°Wを向く。

墓壙はやや不整形な円形で、長さ2.5m、幅1.2m、残存する深さは48cmである。

木棺は墓壙の中央より東に寄った位置にあり、長方形の棺体を確認したが、棺の底からは小口穴が検出された。棺体は長さ2.1mあるが、小口穴の内側では1.78mである。幅は南側58cm、北側54cmとなり、南側が少し幅広い。小口穴は両側にあり、南側は棺体の幅より狭く、北側は棺体の幅いっぱいに掘り込まれている。南側は幅16cm、深さ7cm、北側は幅14cm、深さ3cmあり、深さの割に幅広い。

SX04 (図版13)

小型の組み合わせ式箱形木棺墓である。主軸はN4°Eを向く。

墓壙は隅丸気味の不整形な長方形で、長さ1.1m、幅54cm、残存する深さは13cmと浅い。

木棺は墓壙の中央にあるが、長軸方向では東に寄っている。棺体の長さは83cm、幅は両側とも29cmで等しい。南側の棺底には棺体の幅いっぱいの小口穴がある。穴の幅は7cm、深さ8cmである。

SX05 (図版13)

小型の組み合わせ式箱形木棺墓である。主軸はN63°Eを向く。

墓壙は隅丸長方形で、長さ1.4m、幅66cm、残存する深さは18cmである。

木棺は墓壙の中央にあるが、長軸方向では少し西に寄っている。棺体の長さは90cm、幅は東側32cm、西側26cmで、東側が6cm広い。小口穴は西側にのみあり、幅8cm、深さ3cmとごく浅い。小口穴は棺体の幅より少し内側でおさまる。

③ 第3墳墓群

第2墳墓群の真南にあり、南北と西側の三方を弓状に彎曲する溝で区画されている（SD02～04）。東側は開墾に伴って削り取られているため、溝の有無は不明である。

溝の彎曲状況をもう少し詳しくみると、SD02では、北辺は直線気味で南辺が大きく屈曲する。SD03とSD04では、中央部は直線的な溝であるのに、端部付近で曲がりが急になる。その傾向は特に南西隅側で顕著である。

溝の規模は、北側のSD02は中央部で幅1.6m、深さ15cm、南側のSD04は中央部で幅1.25m、深さ20cm、西側のSD03は中央部で幅1.8m、深さ60cmである。SD03では1基の溝内埋葬を確認した（SX14）。また、その南北でも主体部の存在を示すようなクロボクと地山の黄褐色土が混ざり合ったような堆積状況が認められたが、平面では墓壙あるいは木棺を確認できなかった。SD03は断面を示したD-D'～F-F'までの間は深さが50cm以上あるが、南北ともこのあたりから急に浅くなる。SD02とSD04はクロボクを主とする単層の堆積で、SD03に比べ浅いのは削平による。

これらの溝に伴う遺物はほとんど無いが、SD03では長さ30cmを超えるような大型の礫が数点出土している。溝の東壁に沿うように斜めに傾いているものもあるが、貼石とするには数が少ない（写真図版13・30）。

彎曲する溝に3方を囲まれているため、墳丘は「四隅突出型墳丘墓」を思わせる形態をとる。規模は、南北14.8m、東西8m以上、高さ60cm以上である。本来の墳丘は削平により失われており、現状では盛り上がりを認めることはできない。

主体部は墳丘の中央と考えられる位置と溝内にある。墳丘の中央には木棺墓5基と土壙墓1基の計6基があり（SX06～11）、木棺墓2基（SX10、SX11）と土壙墓（SX10）は小型である。削平で失われた東側に主体部が存在しないとすれば、大小が同数ということになる。両者は混在するのではなく、中央に近いところに通常の大きさのものが、小型はそれより南西側に分かれて配置されている。主軸の方向はほぼ南北方向に揃うが、SX06だけは東西方向となる。主体部は削平を受けており、木棺墓では、黄褐色土の混ざり具合や粒度の違いにより、墓壙の検出面で棺体も検出できた。また、西側のSD03内には中央付近で1基の木棺墓を確認した（SX14）。

SX06（図版14）

組み合わせ式箱形木棺墓である。第2墳墓群でこれだけが東西方向に主軸を置き、N77°Eを向く墓壙は長方形で、長さ2.45m、幅1.15m、残存する深さは25cmである。

木棺は墓壙の中央で長方形の棺体を確認したが、棺底には両側に小口穴がある。東側の小口穴は棺体の端にあるが、西側の小口穴は端より少し内側にある。したがって、側板と小口板の組み合わせは、西側だけが「H」字形となる。棺体は長さ1.9mであるが、小口穴の内側では1.64mとなる。幅は東側61cm、西側56cmとなり、東側が5cmほど幅広い。小口穴は両側にあり、棺体の幅いっぱいに掘り込まれてい

る。東側の小口穴は幅7cm、深さ10cm、西側は幅8cm、深さ15cmである。

遺物は出土していない。

SX07 (図版14)

組み合わせ式箱形木棺墓である。主軸はN19°Wを向く。

墓壙は隅丸長方形で、長さ2.68m、幅1.8m、残存する深さは24cmである。

木棺は墓壙の中央より東寄りにある。墓壙の上面では長方形の棺体を確認したが、棺内を少し掘り下げた段階で小口板の痕跡を確認した。棺底には両側に小口穴がある。棺体の長さは1.96mあるが、小口穴の内側では1.64mである。幅は両側とも60cmで等しい。小口穴は北側では棺の幅と同じであるが、南側では棺幅の内側で収まる。東側の小口穴は幅18cm、深さ8cm、西側は幅20cm、深さ11cmである。

遺物は墓壙埋土から弥生土器（24）が出土した。小片が出土しているだけであるので、供獻土器とは考えにくい。

SX08 (図版15)

組み合わせ式箱形木棺墓である。主軸はN10°Wを向く。

墓壙は隅丸長方形で、長さ2.57m、幅1.45m、残存する深さは40cmである。

木棺は墓壙の中央より少し東寄りにある。小口板と側板の組み合わせは「H」字形となり、棺底には小口穴が掘り込まれている。棺体の長さは2.18mであるが、小口穴の内側では1.7mである。幅は両側とも63cmとなり等しい。小口穴は両側にあり、棺体の幅より内側に掘り込まれている。南側は幅7cm、深さ14cm、北側は幅14cm、深さ9cmである。

墓壙東辺では、棺の側板に沿って螺が並んでいる。

遺物は墓壙埋土から弥生土器（25）と土製品（26）が出土した。小片が出土しているだけであるので、供獻土器とは考えにくい。

SX09 (図版15)

やや重な精円形の土壙で、主軸はN13°Wを向く。長さ1m、幅80cm、深さは56cmである。

長さと幅が同程度のSX10、SX11と比べ、深さが3倍以上あり、大型のS X06～08よりも深い。埋土はクロボクを主としており、木棺墓のような黄褐色土の混合は明瞭でなく、棺体を確認することはできなかつた。埋葬施設以外の遺構である可能性もあるが、位置関係から土壙墓の可能性が高いと考えている。

遺物は出土していない。

SX10 (図版15)

小型の組み合わせ式箱形木棺墓である。主軸はN12°Wを向く。

墓壙は隅丸長方形で、長さ1.18m、幅79cm、残存する深さは20cmである。

木棺は墓壙の中央にあるが、長軸方向では北に寄る。検出面における棺体は長方形であるが、棺底には浅い小口穴がある。棺体の長さは85cm、小口穴の内側では70cmである。幅は両側とも30cmである。小口穴は棺体の幅いっぱいに掘り込まれ、南側が幅5cm、深さ2cm、北側が幅8cm、深さ2cmである。

遺物は出土していない。

SX11 (図版15)

小型の組み合わせ式箱形木棺墓である。主軸はN4°Eを向く。

墓壙は隅丸長方形で、長さ98cm、幅66cm、残存する深さは8cmとごく浅い。

木棺は墓壙の中央よりわずかに東寄りにある。棺体の長さは78m、幅は両側とも28cmである。小口穴は認められない。

遺物は棺内埋土から管玉1点（J1）が出土した。

SX14 (国版16)

組み合わせ式箱形木棺墓である。主軸はN 2° Wを向く。

墓壙は隅丸の長方形で、長さ2.76m以上、幅約1.2m、深さは64cmである。

木棺は墓壙のほぼ中央にあり、両側に小口穴をもつ。棺体は、クロボクを主とする2層の厚い堆積の直下、検出面からの35cm深さにあることが断面でわかるが、実際には棺底近くに達してようやく検出できた。棺体の長さは1.75mあるが、小口穴の内側では1.62mとなる。幅は北側が多少掘りすぎているが約65cm、南側57cmとなり、北側が幅広い。高さは26cmである。小口穴は、北側は棺の幅いっぱいに掘り込まれるが、南側は内側で収まる。南側は幅4cm、深さ8cm、北側は幅6cm、深さ4cmである。第2墳墓群や第3墳墓群の棺に比べ、小口板は薄いものが使用されているようである。

遺物は墓壙最上部から弥生土器（18～23）が出土した。これらの遺物はSD03の中に木棺墓が存在することを確認する前に出土したものである。このため、溝埋土からの出土遺物として取り上げ、正確な位置や、出土状況は記録していない。遺物の残存状況から、墓壙上にまとめて供献されていたと推測される。破片の一部は周辺のクロボクからも散らばって出土しており、多少の攪乱を受けていると思われる。

④ 第4墳墓群

第3墳墓群の西側に位置する。4基の木棺墓からなる（SX12・13・15・16）が、西側の調査区外にも広がる可能性がある。うち1基（SX13）は周囲を浅い溝が巡る（SD05）。この溝の南辺はそのまま西へも延びているが、他の木棺墓を区画した状況は認められなかった。SD05とSD03の前後関係については、明確な判断を下せなかった。したがって、SD05に区画されたSX13との前後関係も不明である。

なお、4基の木棺墓のうち、3基はほぼ南北方向に主軸を置くが、小型の1基（SX15）のみ東西南向となる。

第4墳墓群の周辺には地山上にクロボクの堆積が認められた。本來、木棺墓はこのクロボク層を切り込んでいるはずであるが、検出が困難であったため、すべて、地山上面までクロボクを掘り下げて主体部を検出している。

SX12 (国版16)

組み合わせ式箱形木棺墓で、南側は調査区外に延びる。主軸はN12° Wを向く。

墓壙は隅丸長方形で、長さ2m以上、幅1.17m、残存する深さは38cmである。

木棺は墓壙のほぼ中央にあり、棺体の長さは1.5m以上、幅は北側で58cm、計測可能な南端で58cmとなる。北側には棺体の内側に収まる深さ3cm、幅の13cmの小口穴がある。

遺物は出土していない。

SX13 (国版16)

区画溝（SD05）によって区画された中にある。溝の東辺はSD03と重なり、その前後関係は判断できなかったため、現状では「コ」字状に囲まれている。仮に、SD05が長方形の区画で、その中央にSX13

が位置していたとすれば、区画の規模はおよそ南北4m、東西約2mとなる。

S05は、幅34cm、深さ18cmあり、浅く幅の狭い溝である。埋土はクロボクの单層である。

SX13は組み合わせ式箱形木棺墓で、主軸はN3°Wを向く。区画の西辺からは10°ほど西に振っている。

墓壙は隅丸長方形で、長さ2.1m、幅74cm以上、残存する深さは64cmである。

木棺は断面では35cmの高さのあることがわかるが、墓壙と棺の埋土が良く似ていたため、実際に検出できたのは棺底の暗褐色土（8層）上面である。棺体の大きさは長さ1.75m、幅は35cmを少し越える程度であろう。小口穴は認められない。

遺物は墓壙上部から弥生土器（14～17）が出上している。15と17は破片の多くが周辺のクロボクからも出土した。

SX15（図版17）

小型の組み合わせ式箱形木棺墓で、墓壙の東端は調査区外となる。主軸はN85°Wを向く。

墓壙は楕円形で、長さ1.25m以上、幅40cm、検出面からの深さは35cmであるが、調査区西壁の断面では67cmまで確認できる。この断面をみると墓壙の上面は幅広いが、次第に狭まり下半は木棺がちょうど収まるだけの幅しかなくなっている。

木棺は墓壙の中央にあり、南辺は墓壙の壁にはほとんど接している。検出面では側板の痕跡が確認でき、調査区西壁の横断面では蓋板と底板と考えられる痕跡も認められた。棺底にはごく浅く小口穴が掘り込まれている。棺体の長さは約1.1mあるが、小口穴の内側では98cmとなる。幅は西側40cm、東側35cm、内法ではさらに5cmほど狭くなる。東西では西側が少し幅広い。

遺物は木棺上面の東寄りに甕1点（27）が供獻されていた。その場に遺存していたのは底部を中心とする破片で、上部破片の一部は周辺のクロボクから出土した。棺幅の広い方が頭位側とすれば、土器は足側に置かれたことになる。

SX16（図版17）

組み合わせ式箱形木棺墓で、墓壙の西辺は調査区外となる。主軸はN21°Eを向く。

墓壙は隅丸長方形で、棺の部分だけが浅く2段に掘り塗められている。長さ2.3m、幅1m以上、検出面からの深さは67cmであるが、調査区の断面では約1mの深さを確認できる。棺底には小口穴が掘り込まれている。

木棺は墓壙の中央付近にあり、棺体の長さは2m、小口穴の内側では1.75mである。幅は両側とも42cmで等しい。小口穴は棺幅に等しく、南側は幅17cm、深さ12cm、北側は幅7cm、深さ5cmである。

棺内下半の埋土は削り抜き式の木棺を思わせるよう字状の堆積を示す。しかし、墓壙は断面が方形に掘り塗められており、小口穴も存在することから組み合わせ式の木棺とした。

遺物は出土していない。

⑤ 挖立柱建物跡

SB01（図版18）

第2墳墓群の木棺墓および第3墳墓群の北側区画溝（SD02）と重なって検出された。建物と墳墓との前後関係をみると、北西隅の柱穴はSX05の底で、中央の柱穴は溝の底および肩にかかって検出した。

これらの遺構の上面あるいは掘削中には柱穴の痕跡は確認できなかった。したがって、墳墓群が造営される以前に存在した建物と考えられるが、埋土が類似していることから、その逆である可能性も否定できない。

SB01は北辺から西辺にかけて、L字状の溝（SD01）で区画されている。この溝は、当初、前述の第2墳墓群の木棺墓を区画する溝ではないかと考えたが、第2墳墓群の中心主体であるSX03の主軸方向と溝の向きが合致しないのに対して、SB01とは良く揃っていることから、建物に伴う溝と考えたほうが自然である。溝の幅は75cm、深さは15cm程度である。

SB01は主軸をN 2°Wに置き、桁行き 2間（3.8m）、梁行き 1間（2.5m）の小規模な建物である。西辺の延長線上にもう一つの柱穴があるので、もう一間南へ延びることは十分考えられる。桁行き 3間の建物とすれば、6.3mの規模となる。ただし、これと対になる柱穴はSX07と重なったためか検出できなかった。桁行きの柱間も 2間では1.9mであったものが、3間目は2.7mと幅広くなる。柱穴は径30~40cmあり、最も深いものでも35cmであった。

遺物はSD01と柱穴から弥生土器（28~31）が出土している。

第4節 遺 物

遺構から出土した遺物には、弥生土器と土製品、管玉がある。墳墓群ではSX14に集中し、SX13~SX15では墓壇上あるいは棺上への供獻土器が見られる。これ以外の主体部では、SX07とSX08から少量の土器が出土しているが、小片の出土であり供獻土器とは考えにくい。管玉はSX11から1点の出土がみられただけで、他の棺内埋土の水洗によっても片無であった。また、掘立柱建物の柱穴および区画溝からも弥生土器が出土している。

包含層出土の遺物には弥生土器以外に、繩文土器と須恵器、石器が出土している。実際のところ繩文土器の多くと石器は墳墓の主体部から出土しているが、混入が明らかであるため、包含層出土遺物として記述する。石器のほとんどは、手振りによる検出が困難な微細なチップで、棺内埋土の水洗選別によって得られたものである。100点ほどを数えるが、図や写真は提示していない。

① 墳墓群

SX07出土遺物

墓壇埋土から弥生土器（甕）が出土した。

24は壺である。口縁部は屈曲して直線的に延び、端部はわずかに上下に広がる。外面には明瞭な3条の擬凹線を施す。体部外面はハケメ、内面はヘラケズリで調整する。

SX08出土遺物

墓壇埋土から弥生土器（甕）と土製品が出土した。

25は口縁部外面に明瞭な2条の擬凹線を巡らせた壺である。口縁部はほぼ直立する。26は径1.5cmほどの棒状をした土製品で一端が欠損する。

SX11出土遺物

棺内から管玉1点が出土した。

J1は灰白色の良質な緑色凝灰岩と思われる石材を使用した管玉である。長さに比して径が太い。

SX13出土遺物

墓壇埋土最上部から弥生土器（壺）が出土した。15と17は破片が周辺のクロボクからも出土している。

14～17は壺であるが、16は小片であり、他の器種となる可能性もある。14は直立する口縁部端面に6条の浅い振凹線を施すもので、端面は上方への薄く延びる。体部外側の調整は幅の狭い工具によるハケ、内面はヘラケズリである。15、17はいわゆるナデ壺で、15の口縁部は大きく外に開いて受け口状となる。17は卵形の体部から口縁部が短く外反し、さらに斜め上方へつまみあげる。底部は小さく尖底味となる。体部外側の調整は1cmあたり6条の粗いハケで、内面はヘラケズリであるが、上部はさらに幅の狭い工具を使用している。外面にはススが付着しており、器壁の剥落がある。

SX14出土遺物

墓壇上面に供獻された弥生土器（壺、甕、器台）である。破片の一部は遺構検出時に周辺のクロボクからも出土している。

19と20は同一個体と考えられる。脚付きの壺で、算盤玉状の体部から口縁部が直立する。外面の全体と口縁部の内面は丁寧にヘラミガキ調整されており、口縁部と脚部ではヘラミガキの前に縱方向のハケメが観察される。ヘラミガキは脚柱部は縱方向、他は横方向である。脚の靴部内面はヘラケズリで端部付近はハケ調整されている。体部中程には粘土の接合痕が残る。

18・21・22は壺である。18は複合口縁をもつ山陰系の壺で、ひずみのある丸い体部から斜め上方に口縁部が長く延びる。内面はそのまま延びるが、外側は段をもつ。口縁部外側の振凹線は、上半は波状、下半は水平に巡らされている。体部の調整は外側が1cmあたり7条の粗いハケで、内面がヘラケズリである。底部は丸底に近い。体部外側には擦痕が残る。21・22はいわゆるナデ壺で、長胴の体部から口縁部が短く外反し、さらに斜め上方へつまみあげる。21は外側が1cmあたり7条の粗いハケで、内面がヘラケズリ、底部は小さく丸底に近い。体部外側にはススが付着している。なお、18と21は濃い橙色をしており、淡い肌色をした他の上器とは胎土の色調が異なっている。

23は器台あるいは高壙である。口縁部は上下に拡張し、外側に波状線を施す。

SX15出土遺物

棺上面に供獻された弥生土器（壺）1点である。破片の一部は遺構検出時に周辺のクロボクからも出土している。

27は丸い体部から口縁部が外反して延びる壺である。しもぶくれで歪な土器であり、上半と下半の接点が無いため、凶上で復元した。外側の調整は口縁部から底部まで1cmあたり5条の粗いハケで調整されるが、体部内面は上半がヘラケズリで下半～底部が粗いハケである。

② 挖立柱建物と区画溝

SB01出土遺物

弥生土器（壺）が出土した。

31は短い口縁部のつく壺である。口縁部はやや外反して立ち上がる。破片が小さいため頗りは多少異なっているかもしれない。外側の調整はハケメ、体部内面はヘラケズリである。

SD01出土遺物

弥生土器（壺、器台、甕）が出土した。

28は小型の器台で、口径が小さく厚みのあるつくりである。口縁部は直立し下方へ垂下し、外面には5条以上の擬凹線を施す。脚部外面と体部内面にはヘラミガキを施す。29は小片であるため、器種の判断がむずかしいが、二重口縁をもつ壺の口縁部と考えられるものである。外面にははっきりとした10条の擬凹線を施し、内面はヘラミガキする。外面には初窓がある（写真図版52）。30は壺である。口縁部は「く」字に屈曲して大きく広がり、端部を上方につまみ上げる。外面には2条の擬凹線を施す。体部外面はハケメ、内面はヘラケズリで調整する。

③ 包含層出土遺物

縄文土器、弥生土器、須恵器が出土した。さらに、実測は行っていないが、棺内埋土の水洗により微細なチップが多数出土している。

縄文土器

32～46は押型文土器である。32～36は格円形押型文で、格円の長径は小さなものが多い。32～34のように格円が長軸方向に接して連続するものと、35、36のように格円が長軸方向に離れて、一見千鳥状に配されるものがある。格円の大きさは前者のほうが小さい。35は口縁部破片で、内外面とも施文されており、口唇部には斜めの刻みがある。36は複合鋸歯文も施文されている。37～44は山形文である。37～41は細かな山形文で、37は角度もゆるい。38と39は両面に施文され、38は口唇部から内面にかけて斜めの刻みがある。42は角度が急な山形文である。44は複雑な山形文を不規則に施文する。43は大きな山形文である。45は口縁部破片で、端部直下に角度の緩い山形文を横位に施し、その下には大きな山形文を縱位に施文する。46は複合鋸歯文である。これらの押型文土器はおおむね黄鳥式に相当すると考えられる。

弥生土器

47～49は器台あるいは高杯などの脚部である。47と48は脚部の破片で、49は脚柱部である。47は段をもつ。段には3条の擬凹線を2単位巡らせ、間に三重の同心円文を一列に配する。脚部外面の調整はヘラミガキで、内面はヘラケズリである。

須恵器

50は杯である。残存する範囲では外面にヘラケズリは行っていない。

51は高杯である。低脚で裾部は横に広がり、杯部も外に開く。

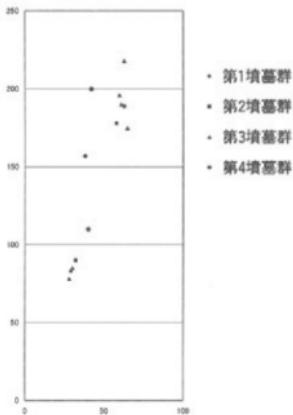
これらの須恵器はおおむね7世紀代のものと考えられる。調査区の南西には横穴式石室をもつ庵の谷1号墳が隣接しており、その関連が想定される。

第5節 小 結

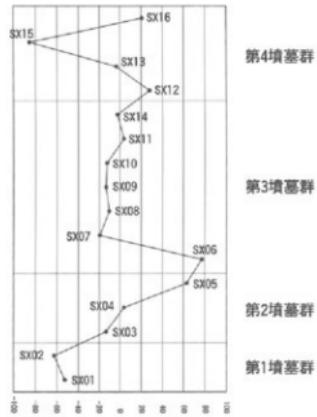
今回の調査で検出された遺構は、弥生時代後期の墳墓16基と掘立柱建物跡1棟である。

墳墓には組み合わせ式の箱式木棺墓15基と土壙墓1基があり、位置関係などから4つのグループに分かれる。第1墳墓群には2基、第2墳墓群には3基、第3墳墓群には7基、第4墳墓群には4基が帰属するが、削平が著しい第1墳墓群と調査区外に広がる第4墳墓群はさらに増える可能性がある。

以下では、これらの遺構および出土遺物について検討を行い、庵の谷遺跡の調査のまとめとしたい。



第3図 木棺の長さと幅（単位：cm）



第5図 木棺の構造からみた墳墓群の模式図

	大きさ (cm)	最大幅 (cm)	最小幅 (cm)	幅の差 (cm)	小口穴	棺材の 組合せ	方位
第1墳墓群	SX01 189	63	56	7	西側	H和	-52
	SX02 157	58	30	28	東・西側	H和	-42
第2墳墓群	SX03 183	79	76	3	西側	H和	-4
	SX04 90	32	26	6	西側	H和	63
第3墳墓群	SX05 190	60	50	10	西側	H和	77
	SX06 170	50	40	10	西側	H和	-18
第4墳墓群	SX07 178	63	53	10	西側	H和	-15
	SX08 116	—	—	—	—	—	-13
第3墳墓群	SX09 176	50	30	20	西側	H和	-2
	SX10 176	58	38	20	西側	H和	4
第4墳墓群	SX11 176	58	38	20	西側	H和	4
	SX12 175	62	57	5	西側	H和	-2
第4墳墓群	SX13 176	58	50	8	—	H和	29
	SX14 176	58	50	8	—	H和	29
第4墳墓群	SX15 116	46	35	11	西側	和	-45
	SX16 208	62	42	20	西側	和	71

第1表 木棺一覧表

① 木棺墓の検討

ここでは、まず、個々の木棺墓の構造や大きさ、方向などを検討する。

木棺の構造については、小口板と側板の組み合わせ方と小口穴の有無の2点について見てゆきたい。小口板と側板の組み合わせ方では、小口板を挟み込んだ側板が外に飛び出し「H形」になるものと、側板が飛び出さず「箱形」になるものに2分できるが、一方の小口側だけが飛び出す「折衷形」も確認されている。3者の典型を挙げるならば、「H形」はSX01、「箱形」はSX03、「折衷形」はSX06である。

小口穴は「両側にある」、「片側にある」、「穴無し」の3つに分類される。

それぞれの数量を比較すると、小口板と側板の組み合わせ方では「H形」2例、「折衷形」1例、「箱形」10例となり、「箱形」が大半を占める。小口穴の有無では、「両側にある」7例、「片側にある」4例、「穴無し」2例となり、「両側にある」が半数を越えるのに対して、「穴無し」はごく少数である。この二つを合わせると、庵の谷遺跡では、平面形が「箱形」で、小口穴を「両側」あるいは「片側」に設ける木棺墓が一般的であったと言える。

次に木棺の長さと幅をみると、190cm×60cmを中心とする大型のグループと、80cm×35cmを中心とする小型のグループに大別されるが、特に突出した規模のものはない。SX02は大型のグループから少し小さい方に外れ、SX15は小型のグループから大きい方に少し外れる。この2基は幅に関しても40cm前後で、小型のグループよりは少し幅広い値である。SX16は長さがちょうど2mであるが、幅は42cmと狭く、細長い棺である。これらの数値は棺体の外法であり、板の厚さを除いた内法は、厚さ3cmの板であれば6cm、5cmの板であれば10cm、さらに小さくなる。

ところで、棺の大小は、特殊な埋葬方法を想定しなければ、身長の差を表す。大型の棺は成人用、小型の棺は小児用とみなすことができるが、両者の中間的な大きさのものは少ない。その理由として、身長が1mに達しないような小児の死亡率が高かったということが考えられるかもしれない。

棺の方向については、南北軸に対する主軸の角度を、「+（右回り）」と「-（左回り）」で表す。 $-20^\circ \sim +25^\circ$ の間に取まるものが11例、 $-50^\circ \sim -85^\circ$ が3例、 $+60^\circ \sim +80^\circ$ が2例となり、南北方向を基本とすることが明らかである。

棺両端の幅の差は一般に頭位を知る手掛かりとされる。両端の幅が判明する14基のうち、幅に差が認められる7基では、北（1）、南（1）、東（2）、西（1）、北西（1）、南東（1）となり、主軸方向にみられたような齊一性は無い。

以上をまとめると、庵の谷遺跡の木棺墓は、全体として見た場合、平面形が「箱形」で、小口穴を「両側」あるいは「片側」に設ける。棺の大小が明瞭である。主軸は南北方向を基本とするが、頭位方向に齊一性は認めがたい。というように特徴づけられる。

② 墳墓群の検討

では、こうした属性を墳墓群でみた場合どうであろうか。それには主とならない属性をもった木棺の分布状況をみるのが早道である。平面形が「H形」となるのは、第1墳墓群と第2墳墓群に各1例、「折衷形」は第2墳墓群に1例存在する。小口穴については「穴無し」が第3墳墓群と第4墳墓群に1例ずつ、「片側にある」は第1墳墓群と第2墳墓群に2例ずつ存在する。木棺の大きさでは、小型が第3墳墓群に2例、第3墳墓群には土壙墓を含めて3例、第4墳墓群に1例ある。第1墳墓群では崩落で失われた可能性があり、SX01の北側にある浅い窪みが小型木棺の痕跡であったならば、すべての墳墓群に

存在したことになる。木棺の方向では、南北方向から外れるものが、第1墳墓群の2例と第2墳墓群～第4墳墓群にそれぞれ1例となる。

このように見ると、特定の墳墓群に抱つては異なった属性をもつ木棺墓が集中するような事実は認めたい。それぞれの墳墓群は基本的に等質であると言つていい。それは、副葬品と呼べるもののが第3墳墓群のSX11から出土した小型管玉1点だけであるという点でも同様である。また、但馬・丹後地域の弥生墳墓における埋葬儀礼として一般的な土器供獻については、SX13～SX15で確実なものが認められる。しかし、第4墳墓群の周辺を除けば、供獻土器が置かれるべき棺の周辺や墓壇上は剖平が著しく、SX13～15以外の木棺墓では、本来は供獻土器があったとしても残っていない。

以上の検討から、庵の谷遺跡の木棺墓群は、それぞれ大人と子どもを含むグループの墓、すなわち、家族墓であると考えることができる。それぞれの家族は、木棺墓の内容に関しては特に傑出するものではなく、等質な関係であったと言える。ただし、ここで注意しなければならないのは、第3墳墓群が区画溝を有するという点である。この区画溝は弓形をしており、これによって囲まれた区画は山陰地方を中心に分布する四隅突出型墳丘墓のように見える。そこで、次にはこの点について検討を加える。

③ 四隅突出型墳丘墓に関して

四隅突出型墳丘墓は、方形の弥生墳丘墓で四隅が放射状に突出するという特徴を有する。東森は1989年までの調査例をもとに、①四隅の意識と段階的発達、②地山削り出しの整形と盛土、③斜面への貼石と列石、④玉類以外は僅少な副葬品、⑤土器供獻、⑥主体部は箱式棺、石蓋土塚（中国山地）、箱形木棺（出雲海岸部）という6つの特徴をもって、定義している（東森1989）。その分布は山陰地方を中心とし、広島県の中国山地内、北は福井県～富山県まで及んでいるが、その間に有る但馬、丹後地域では、現在のところ未発見である。兵庫県内では、播磨中部の加西市周邊寺山で確認されているのが唯一である。

庵の谷遺跡第3墳墓群の平面形は確かに隅が突出している。墳丘についても、墓壇の上面ですでに木棺の輪郭が見えていたSX06～08が、本米、SX14やSX16と同程度の深度があったとすれば、現状より50cmほど盛り上がりをもつと考えられる。しかし、貼石や列石が認められない点、また、四隅の先端がそのまま外部となつながら、方形周溝墓における陸橋のような形となっている点が大きな違いである。四隅突出型墳丘墓では、四隅の先端は明確に外部と区画され、周溝がある場合は突出部の外側を巡るのが通例であるが、松江市友田遺跡の四隅突出型墳丘墓（弥生時代後期前葉）のように、一隅では貼石と周溝が途切れ、墓域の区画がなくなっている例もある（東森前掲、松江市教育委員会1983）。また、貼石や列石は北陸地方のものには認められない。したがって、庵の谷遺跡の第3墳墓群は四隅突出型墳丘墓そのものではないにしても、その影響下のもとに造営された墳丘墓であると考えたい。その一方で溝の途切れ方を見ると、方形周溝墓の陸橋部を思わせるものがあり、溝内埋葬も方形周溝墓でしばしば確認される。両者の折衷的な墳墓という方が妥当かもしれない。

いずれにしても、墓域が明確に区画されるという点で、第3墳墓群に埋葬されたグループは、集団の中心的な役割を果たしていた一族であったと考えられるが、他の属性では特に傑出したものは認められず、階層差の存在を示すようなものではないと考えられる。

④ 遺物と時期について

確実に墳墓群に伴う遺物としては、SX13～SX15の供獻土器がある。SX15を除いて出土位置が明確で

無いが、但馬・丹後地域で一般的な墓壙内破砕土器供獻ではない。SX15は棺上の供獻土器、SX13とSX14は墓壙上の供獻土器とみなしうる。SX13、SX14出土土器には、上方に拡張した口縁部の外面をヨコナデする壺や山陰系の複合口縁に形態化した擬円線を施した壺があり、底部は小さく丸みが強くなっている。その形態の特徴から、庄内併行期のものであろう。墓壙内破砕土器供獻は但馬・丹後地域の弥生時代後期を特徴づける埋葬儀礼であるが、後期後半以降は調理容器の墓壙内破砕供獻はほとんど失われ、供獻容器による墓壙上の供獻儀礼のみが残ることが指摘されている（肥後1994年）。SX13～SX15の供獻土器も、墓壙上への供獻という意味では、そうした流れの中に位置づけられようが、出土土器の大半は壺であり、供獻容器が数少ない点で異なっている。

⑤ 墳墓群と掘立柱建物跡

墳墓群と掘立柱建物跡の前後関係は、発掘時の所見では掘立柱建物跡が古く、墳墓群が新しい。掘立柱建物跡やL形の区画溝から出土した遺物は小片で、時期の判断が難しいため、ここでは、発掘時の所見を重視しておきたいが、今後、当地域での土器の様相が明らかになれば、再検討が必要である。

ところで、第3墳墓群のSX07、SX08出土の土器は、SX13、SX14出土の土器より古く、弥生時代後期中葉頃の特徴を示す。SX13、SX14出土土器は庄内併行期と考えられることから、両者の時期は少し間があきすぎるよう感じられる。SX07、SX08出土の土器は墓壙内埋土から出土した小片であり、混入の可能性がある。墳墓群の造営以前に、掘立柱建物を含む居住域あるいは何らかの特別な区域が存在していたことによって混入が生じたのかもしれない。

⑥ 繩文時代の遺物

早期の押型文土器には格円形文と山形文、複合縞文があり、格円形文の長径が小さく、山形文が横方向にのみ展開することから、押型文土器の中でも古相を示すと見られる。遺構が発見されず土器量も少ないが、墳墓群の埋土から水洗選別によって見いだされた微細なチップに注目したい。チップにはサヌカイトや安山岩を主に頁岩や黒曜石も含まれる。墳墓群の埋土はクロボクを掘り返したものであり、繩文時代の遺構あるいは遺物包含層を破壊して造営されたものである。微細なチップは石器製作に伴う石屑であり、作業を行ったその場に放置される。おそらく、削平を受ける前には、繩文時代早期の居住地があり、住居跡なども存在していたのではないか。

但馬の山間高地には、日高町神鍋遺跡や、関宮町山の宮遺跡、杉ヶ沢遺跡、別宮家野遺跡など早期の遺跡が多数存在する。村岡町内でも相岡遺跡やタツケ平遺跡などで早期の土器が採集されており、庵の谷遺跡もそうした山間高地に点在する繩文早期の遺跡の一例に加えられるであろう。

〈引用・参考文献〉

- 東森市良 1989年 『考古学ライブライマーク4 四隅突出型墳丘墓』
松江市教育委員会 1983年 『松江園都市計画事業乃木木地区調整事業区域内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』
石野博信 1979年 『繩文時代の兵庫』
肥後弘幸 1994年 「墓壙内破砕土器供獻」上『みずほ』12
肥後弘幸 1994年 「墓壙内破砕土器供獻」下『みずほ』13

第5章 大寺山古墳群

第1節 概 要

大寺山古墳群は美方郡村岡町黒田字なめたに所在する。古墳群は西から東へ細長く延びる2つの尾根に立地する10墓の古墳で構成される(図版2)。このうち確認調査で発見された1・2号墳は北側の尾根の先端付近に立地する。高所に位置するのが1号墳、下方にあるのが2号墳である。1号墳は明確な墳丘をもたず、主体部は石棺1基である。棺内から玉類と鉢器が出土した。2号墳の墳丘は半円形に造成した平坦面で、主体部は石棺1基である。墓室内から鉄器が出土したが、棺内の副葬品は無い。1・2号墳からは土器がまったく出土していないため、時期を判断する決め手に欠ける。

第2節 1号墳

① 立 地

北西から南東に向かって細長く延びる尾根がやや急に高度を下げた後、鞍部を経て幅3~4mほどの狭い高まりに至る。1号墳はこの頂部ではなく、そこから5mほど下がった標高377m弱のところに立地する。

② 墳 丘

明確な墳丘を造成した痕跡は認められない。しかしながら、調査後の地形を見ると、主体部のあるあたりの等高線がそれより下方と比べて緩やかとなっている。2号墳のように明確な削平ではないにせよ、何らかの整地が行われた可能性はある。石棺の蓋石は表土直下で表れており、そうした痕跡も地盤の流出によって失われてしまったのかもしれない。

③ 主体部(図版22・23)

箱式石棺1基である。主軸方向はN45°Wで尾根に平行している。墓壙は一辺が1.4~1.6m四方の隅丸方形で、深さは65cm。棺材の高さを調整するために、石の大きさに合わせて一段深く掘り下げた二段墓壙となっているが、棺材の形状や大きさに規格性がないため、2段目は深さや形状が不規則となっている。また、1段目も地山に礫が多く含まれていて均一に掘削できなかつたためか、場所によっては階段状となっている。

石棺は内法で長さ1m、幅は頭位側で31cm、足位側で29cm、高さ30cmである。石棺は両小口に各1石、側石は北東側に1石、南西側に2石を使用しており、1段で棺を構成している。南西側の側石は頭位側に別の1石を立てて、二重にしている。側石は上庄によって内側に傾いている。また、四隅のうち三隅には小さな石を立てて隙間を塞ぎ、頭位側の小口石の外側には小さな石を数個置いている。小口石は側石に挟み込まれているが、頭位側右隣は逆になっている。また、足位側は側石の飛び出た部分だけが挿んでいる状態である。蓋石は2石を並べ、隙間を小さめの石で塞いでいる。頭位側には大きな石を用いており、棺身の横に大きく飛び出す。しかし、石棺に隙間が多いことから、棺内は上面まで流入土で埋まっていた。

棺内は、深さを調整するために、棺底から褐色土を敷きならしている（6層）。この土は棺内への流入土よりもしまりがある。頭位側に置かれた石枕は、この敷きならしの土に埋め込むように、2石をV字形に組み合わせて設置している。

棺内には人骨は遺存していないかったが、玉類と鉄製品が副葬されていた。下は勾玉2点と管玉14点、白玉9点である。鉄製品は短剣2本、刀子1本、針状鉄製品2点である。このうち白玉と針状鉄製品は棺内埋土の水洗によって得られた。すべて被葬者の上半身に集中して副葬されており、足側からは何も出土しなかった。

勾玉と管玉の出土状況は石枕の近くに人半の玉が集中し、これと少し離れて散らばるものが2、3ある。高さをみると棺底あたりにまとまっているが、数点はこれより少し高い位置にあり、1点のみ少し深い位置にあるものがある。被葬者の首あたりに置かれたものと思われるが、身に着けた状況ではない。

鉄剣は把が石枕に接している。被葬者の両肩に把を構え、切っ先を下に向けて左右に各1本を置いている。刀子は右腕側の鉄剣の中央あたりに置く。高さは左腕側の鉄剣が玉類の集中する高さとは同じで、右側はこれより少し高い。

④ 出土遺物

玉類

勾玉2点と管玉14点、白玉9点がある。

J2とJ3はわずかに緑がかった乳白色の翡翠製勾玉である。丁寧に磨かれており光沢を放つ。C字形で全体に丸みが強いが、内面は平坦気味で、特に頂部でその傾向が強い。穿孔は2つとも片側から行かれている。

J4～J12は白玉である。緑がかった色調の石材で、管玉と類似しているように見えるが、風化して脆くなつたものはない。すべて中央に棱をもち、いわゆる「算盤玉形」を呈する。大きさは、径0.3～0.4cm、長さ0.2～0.35cm、孔径は0.2cm弱である。側面には斜め方向の研磨痕が観察できる（写真図版54）。この研磨痕は棱を境に少し方向を異にする。

J13～J26は管玉である。J13は碧玉あるいは良質の緑色凝灰岩製で、片側の端面は凸状に丸みをもち、表面には長軸方向の研磨痕が残る。他は薄緑色をした軟質の石材で、風化が進んだものは非常に脆くなっている。取り上げる際に破損したが多く、長さは最長のもので3.5cm、径は0.4～0.5cmである。穿孔はすべて両側から行われており、端面での径は0.1～0.2cmである。

鉄器

針状鉄製品2点、刀子1点、短剣2点がある。

T1とT2は針状鉄製品である。径は等しく0.15cmあり、同一のものである可能性がある。T1は頭部を欠損するが、先端は細く尖る。残存長は2.1cmである。ほぼ全体に木質が残存している。T2は両端を欠損する。残存長3.2cmで、上部全周に木質が残存しており、木質を含めた径は0.35cmである。細竹のようなものに差し込んでいたものと思われる。なお、T1は現在行方がわからなくなっている。

T3は刀子である。全長10.6cm、刃部は長さ7.6cm、幅1.5cm、厚さ0.3cm、茎部は長さ3.0cm、幅1.3cm、厚さ0.2cmである。身の切っ先側に断片的ながら布が付着している。1cm四方あたりの織り密度は11本×10本である。付着の状況から布を巻いて副葬したと考えられる。

T4とT5は短剣である。T4は全長37.5cmあり、刃部は長さ26.9cm、闊幅3.0cm、厚さ0.6cm、茎部は長さ10.5cm、目釘穴の位置での幅1.5cm、厚さ0.2cmである。目釘穴は茎尻寄りに1つあり、径

は0.4cmである。刃部は間から切っ先にかけてわずかに幅狭くなり、丸みをもって切っ先にいたる。茎部は間から浅く切り込み、茎尻にかけてやや幅を狭めて、茎端は丸みをもつ。刃部には木質が認められ、茎部にも木質と思われるものが残存している。T5は全長31.7cmあり、刃部は長さ25.4cm、中央部での幅と厚さは2.8cmと0.6cm、茎部は長さ6.3cm、茎尻側の目釘穴の位置での幅1.8cm、厚さ0.2cmである。また、目釘穴は3.0cmの間隔を置いて2つあり、径は0.3cmである。刃部はX線写真で観察したところ、関節が少し幅広いように思われたが、明確ではない。間から少し離れたところから中央にかけてはわずかに幅狭くなり、中央から切っ先にかけてはやや急に幅を狭める。切っ先は主頭となる。茎部は間から浅く切り込み、茎尻にかけて次第に幅を狭めて、茎端は直線をなす。刃部には木質が認められ、関節にも有機質状のものが片面に認めらる。また、関節には柄縁の器具かと思われる突起があるが、X線写真でもどのような構造となっているのか判明しなかった。

第3節 2号墳

① 立地

1号墳からそのまま下がった尾根の先端に立地する。標高は371.5mである。この尾根は2号墳より少し下がったあたりから、急傾斜となり、深い谷へと落ち込んで行く。

② 墳丘

尾根の斜面を削平して半月形の平坦面をつくり墳丘とする。削平は平坦面から50cmほどの高さから行われており、平坦面の大きさは長さ4m、幅8mである。

③ 主体部（図版25～27）

箱式石棺1基である。長軸方向はN50°Eで尾根に直交している。墓壙は長さ2.9m、幅1.9mの隅丸長方形であるが、東側が少し張り出しているため、平面形は不整形なものとなっている。石棺が納まる分だけを長方形に深く掘り下げた二段墓壙で、深さは1段目が山側から測って35cm、2段目はさらに30cmほど掘り下げている。また、足位側の小口石の高さを調整するために浅い小口穴を掘り込んでいる。

石棺は内法で長さ1.8m、幅は頭位側で50cm、足位側で40cm、高さは30cmである。石棺は両小口に各1石、側石は両側とも各3石で棺身を構成するが、1号墳とは異なり、大きさの揃った長方形に加工された板石が使用されている。側石の間に小さな板石を置いて隙間を塞いでいる。小口石は側石に嵌み込まれているが、足位側左側は逆になっている。蓋石はまず中央に2石を置き、それと少し重ねて両側に各1石、計4石を並べ、中央の隙間を小さめの石で塞いでいる。蓋石の石材は棺身と同じく山から切り出した板状材であるが、平面形は不整形である。頭位側から2つ目の石は真ん中で割れて棺内に落ち込んでいた。

棺内は、深さを調整するために、棺底から黄褐色土を敷きならしている（5層）。2段目の墓壙は中央が少し深くなっているために、敷き土は中央が厚く、両端が薄くなっている。この土は棺内への流入土よりもしまりがある。頭位側に置かれた石枕は、この敷きならしの土の上に、2石をV字形に組み合わせて設置している。石枕は一個の石を分割したものである。棺内への流入土（3層）は、比較的少なかった。

棺内には頭蓋骨の一部が遺存していたが、副葬品は皆無であった。頭蓋骨の鑑定は行っていないが、縫合が明瞭に認められることから、被葬者は比較的若年であったと思われる。なお、蓋石の上部からは鉄製の動鍵先 1 点と鉄器の小片が 2 点出土した。

④ 出土遺物

鉄器

T6 は U 字形の動鍵先である。長さ 8 cm、幅 10 cm の小型品で、内側は木製の身を装着するため、V 字形に開く。開き具合は均等ではなく、先端側では片面がより大きく開いている。先端部付近には有機質状ものが遺存している。

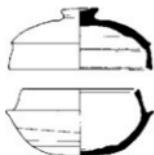
第 4 節 小 結

大寺山古墳群は西から東に向かって延びる二つの尾根に立地する 10 基の古墳で構成される。今回の調査では、このうち北側の尾根にある 2 基の古墳を調査した。2 号墳の墳丘は但馬地域の同様な立地に多くの古墳と同じく、階段状に地山を削平することで造成されており、墳丘が明確でなかった 1 号墳もおそらく同様であったと考えられる。主体部はそれぞれ石棺が 1 基で、山から切り出された板状の石材が使用されていた。2 号墳は棺の大きさから成人用の棺で、整形された石を使用して丁寧につくられている。これに比べ、1 号墳の石棺は 1 m と小型で、つくりも粗雑である。にもかかわらず、2 号墳には副葬品がほとんどなく、1 号墳は玉類と鉄製品が副葬されていた。副葬品の有無と石棺のつくりとは対応していない。1 号墳は内法で 1 m の長さしかないことから、庵の谷遺跡での検討を授用できるのであれば子供用の棺となる（P.22 参照）。しかし、1 基のみの埋葬であることや、玉類や刀剣などの副葬品があることから、若年であっても集団の中で認知された立場にあった人物と考えられる。あるいは、足を折り曲げるなど特殊な埋葬姿勢がとられたのかもしれない。

2 基の古墳の時期については、土器がまったく出土していないため明言することはできないが、2 号墳の墳形、主体部が 1 基の石棺であること、緑色凝灰岩様の艶い石材が使用された管玉の陪葬などから、古墳時代中期前半あたりを考えておきたい。

なお、参考に、これまで紹介されている大寺山古墳群出土遺物を掲載しておく（考古学研究会 1958）。先の時代推定より、やや時期が下るものであるが、第 6 図 大寺山古墳群一連の古墳群として大きな難題をきたすものではないと考えられる。

出土須恵器



<参考文献>

- 兵庫県教育委員会 1999 年 『向山古墳群 市条寺古墳群 一乗寺経塚 矢別遺跡』
兵庫県教育委員会 2002 年 『梅田古墳群 I』
兵庫県教育委員会 2003 年 『梅田古墳群 II』
中村 弘 1995 年 『但馬における横穴式埋葬施設の導入』『古代但馬と日本海』
榎本誠一・瀬戸谷暗 1982 年 『日本の古代遺跡 2 兵庫北部』
考古学研究会 1958 年 『考古学の基本技術』

第6章 小田池遺跡

第1節 概 要

小田池遺跡は、美方郡村岡町福岡に位置し、字名は小田池である。これまで、周知の遺跡として「小伝次遺跡」があったが、今回新たに発見された遺跡は周知された遺跡と場所が異なっているため、名称については字名を採用し、「小田池遺跡」とした。

調査区周辺は、西北西から東南東にむけて延びる尾根の先端付近に位置し、調査区の西側に接するところでは、尾根鞍部の平坦面がある。調査区の標高は約400mで、眼下の平坦地とは約60mの比高差がある（図版2）。

発掘調査の結果、古墳時代中期の集落跡と奈良時代の窯跡が検出された（図版29）。古墳時代中期の集落からは整穴住居4棟が検出され、住居埋土および谷を埋める包含層から土師器と須恵器が出土した。多くの土師器に比べ、須恵器は3片のみ出土しており、いずれも確認できるものは初期須恵器である。

奈良時代の窯は1基のみ検出された。窯本体と灰原を調査し、坏類と壺のみが出土している。

第2節 層 序

山地を形成する黄褐色の地山と、それを覆う黒ボクが基本である（図版31）が、調査区中央には地山の谷地形が東西方向に認められ、その埋土はほぼ水平に堆積し、層数は多くなっている。

調査区の最も高所である南端には、地山の直上に赤黒色シルト（第3層）が堆積しており、調査区の高所側の南半分を覆っている。この層は、谷地形の埋土も覆っている。谷の北側では、地山の直上には、地山に由来するにぶい黄褐色シルト質細砂（第22層）が堆積しており、さらにその上に黒ボク系の黒色シルト（第21層）が堆積している。

さて、地山の谷地形の埋土であるが、全体には黒ボク系の赤黒色、暗赤褐色を呈するシルト層からなっており、部分的に地山由来の黄褐色系の層が堆積している。また、谷理土の下半部には、粘板岩のクサレ疊を含んだ層（およそ第7層～第17層）が堆積しており、上半部とは大きく異なる特徴である。これら、埋土の一部はSH05内にも堆積しており、また、多量の土器を含む層（第16層）もSH05埋土上に堆積していることから、SH05が谷地形に築かれ、その後、SII05が埋没し、やがて大量の土器を含む層が堆積したことがわかる。

第3節 遺 構

古墳時代中期の整穴住居4棟、奈良時代の須恵器窯1基が検出された（図版29）。

① 整穴住居（SH）

調査区中央付近に西から東方向に延びる谷地形があり、その谷を埋めた埋土上にSH04・05が、その南側の尾根上にSH01・02が検出された（図版29）。いずれも、平面形は方形を呈す。

SH01 (図版32)

調査区の南端で検出された方形の竪穴住居である。調査区内では最高所にあたり、地山を削り込んで築造されている。住居のはば半分のみが検出された。SH02の南側に接するように位置する。規模は北辺で4.05m、深さは最大27cmを測る。方位はN-26°-Eである。

柱穴は1箇所のみ検出された。直径35cm、深さ40cmを測る。周壁溝は深さ5cm、幅13cm、断面形はU字形を呈する。埋土は黒色シルト質粘細砂である。

出土遺物は土師器(52~55)がある。

SH02 (図版32)

調査区の南端で検出された方形の竪穴住居である。調査区内では最高所にあたり、地山を削り込んで築造されている。平面全体が検出されたが、削頂のためか周壁溝のみが確認できた。柱穴は検出されなかつた。あるいは大壁造りの建物かもしれないが、規模が南北2.6m、東西2.3mと小さく、小規模で特殊な建物であった可能性が高い。方位はN-10°-Eである。ほぼ各辺を東西南北に向けている。

周壁溝は深さ40cm、幅25cm、断面形はV字形に近く、幅の割に深い。埋土は暗灰黄色細砂~粗砂である。南西隅付近には20cm角程度の自然石が落ち込んでいた。

出土遺物は特になし。

SH04 (図版33)

調査区のはば中央で検出された方形の竪穴住居である。谷筋に築造されており、住居としては立地条件が悪い。周壁溝は南辺と西辺のはば全体と、北辺の一部が検出された。規模は東西6.1m、南北4.5mを測り、東西に長細い。方位はN-7°-Eである。ほぼ各辺を東西南北に向けている。住居内からは、中央付近から土坑が検出されたのみで、柱穴は検出されなかつた。

周壁溝は深さ13cm、幅25cm、断面形はU字形を呈し、やや浅い。埋土は赤黒色シルトである。土坑は歪な円形を呈しており、断面形は台形状を呈する。埋土は暗褐色シルトである。

出土遺物は土師器(56・57)と、須恵器(58)がある。

SH05 (図版34)

調査区の西よりで検出された方形の竪穴住居である。SH04と同じ谷筋に立地している。北西の隅以外はほぼ全面が検出された。規模は東西3.8m、南北3.75m、深さ65cmを測る。方位はN-8°-Eである。ほぼ各辺を東西南北に向けている。埋土は全体に黒ボクの影響を受け、黒色系であるが、最上層だけは地山のくされ跡を含み、黄褐色を呈している。住居全体を覆っていた層と同じで、土器が多く包含していた。

住居内からは4本の柱穴と炉、ピット、竈、土坑が検出された。

柱穴の直径は平均23cm、深さ20cmである。柱間は東西方向の北側が1.7m、南側が1.75m、南北方向の東側が1.5m、西側が1.3mを測り、若干東西方向が長い。炉はほぼ中央で検出された。東西に長細く床面が焼けており、橙色を呈している。炉を挟んで南北には浅いピットが2箇所で検出された。南側は直径30cm、深さ5cm、北側は直径20cm、深さ5cmを測る。東辺の中央にも焼けて橙色を呈する部分があり、周壁溝はそこで途切れている。竈道は確認できなかつたが、位置から竈と考えた。土坑は竈と反対側の西側周壁溝付近で検出された。直径62cm、深さ28cmを測る円形の土坑の東側が約10cm突出したような形である。埋土は赤黒色シルトである。

出土遺物は土師器(59~64)がある。

② 窯（小田池窯跡）

調査区の北東側で検出された。標高396mの尾根斜面に立地し、尾根鞍部から4mほど下がっただけの高所に立地する（図版29）。

窯体は半地下式の登窯で、煙道と地上の上半部が遺存していない。窯体の下方（東側）には灰原が広がっている。窯体に向かって左側（南側）には土坑（SK02）が検出された。反対の右側（北側）は樹木により攪乱されていたため、土坑が存在していたかどうかは明らかでない。

窯体は現存で全長4.8mを測り、小規模である。遺物の取り上げについては、第7図のように地区割りをして取り上げている。

焼成部は煙道から燃焼部に向かってやや胴が張っているものの、ほぼ直線的に開いている。最大幅は燃焼部付近で1.15m、最小幅は攪乱付近で0.7m、最大高は燃焼部付近で28cm、最小高は攪乱付近で25cmを測る。床面の傾斜は約29°で、焼成部付近では水平に近くなっている。横断面は、底が煙道付近を除いて平らに近く、左右両壁は中央部で約70°の角度で内傾しているため、全体に台形を呈している。壁の傾斜角度から復原すると、燃焼部内部の高さは中央付近で推定60cm程度であったと考えられる。窯壁はすき入りの粘土を使っており、最大約15cmの厚さが確認できた。床面は1面のみ確認された。出土遺物は小片が多く、ほとんどが焼成部付近に転落した状況で出土しており、本来の場所を留めているものはなかった。

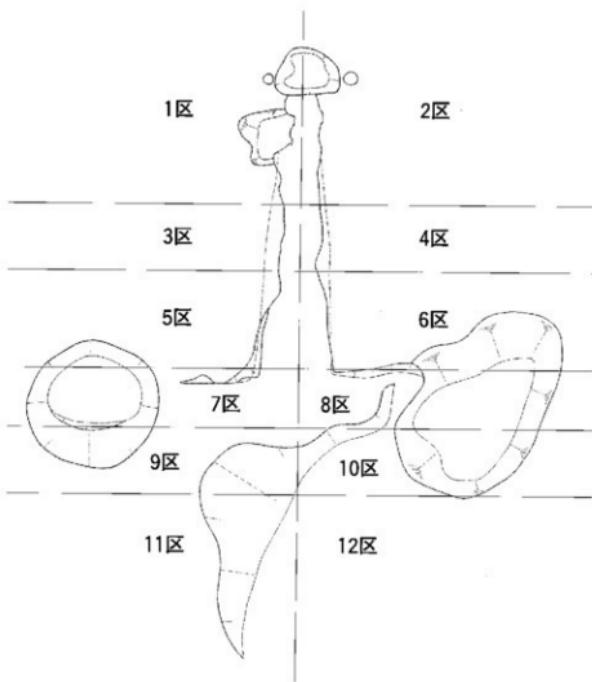
燃焼部は焼成部から続く地山を直角に聞くようにして削り込まれており、左右両側へほぼ直線的に延びている。削り込まれた高さは現状で最大約30cmを測る。床面は熱を受け、歪な台形状に赤化または青化に変色した部分があり、範囲は焼成部側がもっとも幅が広く2.3m、反対側の幅が1.6m、奥行きは56cmを測る。この変色した部分は先述の直角に聞くように削り込まれた部分の壁にも及んでおり、左右とも約30°～40°の角度で内傾している。この被熱した部分には燃焼部の覆いがかけられていたと考えられる。壁に残された傾斜の角度から、その高さは推定60cm程度であったと考えられる。床面は1面のみ確認された。

煙道は削平のため遺存していないが、煙道が存在していたと推定される部分から、平面形が円形をとする土坑（SK01）が検出された。直径1.0m、深さ10cmを測り、埋土は窯全体を覆う層と同じ明褐色極細砂細砂質シルトである。土坑の左右両側には直径20cm、深さ10cmのピットが検出された。埋土は褐色細砂～極細砂である。この土坑とピットが窯とどう関係するかは明らかではないが、土坑は煙道が存在したと推定できる部分に重複していることから、土坑については何らかの理由で煙道を破壊する際にできたものと考えられる。ピットとの関係については明らかでない。

灰原は窯の下方（東側）で確認された。幅4m×長さ4.4mの範囲にのみ遺存しており、厚さも最大で20cmと薄く、包含する炭、土器の量も少ない。3層に分かれている。

土坑（SK02）は焼成部の南側（左側）で検出された。平面形は円形で、長径2.2m、短径2.1m、深さ20cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルト質極細砂である。上層は土器を包含するが、流れ込みと考えられ、下層からは土器は出土せず、炭、窯壁片がまじって出土している。

遺物の出土状況についてであるが、遺物は灰原の遺存状況が悪く、かつ、短期間の操業であったと考えられるため、出土量は少ない。その中で、燃焼部付近の7区・8区からの出土が比較的多い。接合した資料には、2区と12区から出土した107、2区と7区から出土した111・117のように、窯体内と燃焼部、または窯体内と灰原から出土したものや、7区と12区から出土した120のように、焼成部と灰原から



第7図 窟地区割り図

出土したものがあった。

第4節 遺 物

土器類のみの出土である。住居跡およびその周囲の包含層からは土師器と少量の須恵器が、窯からは須恵器のみが出土した。

① SH01出土遺物

土師器（甕、壺、高坏）のみが出土した。

52は甕である。直線的に開く口縁部をもち、端部付近では若干外方へつまみ出している。調整は口縁部が横ナデで、体部外面は幅の狭い板ナデ、内面は横～斜め方向のヘラケズリが認められる。53は壺である。上方へ屈曲する口縁部をもつ。調整は外面が縱方向のハケ目、内面は斜め方向のヘラケズリが認められる。54・55は高坏である。54は体部から口縁部にかけてにぶい段をもちながら直線的に延びており、端部付近で若干外翫する。調整は外面が縱方向のハケ目で、脚部との接合付近では斜め方向のヘラ

ミガキが認められる。内面は磨滅のため不明である。脚部との接合は、中空で筒状の脚部を挿入し、周囲に粘土を付加することにより行っている。杯部外面底に棒状の刺突痕は認められない。55は中空で筒状の脚柱部から大きく彎曲し、直線的に延びる脚部をもつ。調整は脚柱部内面のみ確認でき、横方向のケズリが認められる。

② SH04出土遺物

土師器（壺、高坏）と須恵器（埴？）が出土した。

土師器

56は壺である。やや長細い体部から短く屈曲する口縁部をもつ。調整は体部外表面がハケ目、内面は横、または斜め方向のヘラケズリである。57は高坏の杯部である。緩やかに内彎する杯部をもつ。外表面中央には接合による鉗い段が認められる。調整は脚部と杯部の接合部、及び口縁部付近は縱方向のハケ目である。脚柱部は中空で筒状を呈しており、杯部の外表面に若干遺存している。

須恵器

埴と思われる破片58がある。体部の上半のみが遺存しており、全体の形状は明らかでない。内面には口縁部との接合の際の指ナデの痕跡が認められる。

③ SH05出土遺物

土師器（壺、壺、高坏）のみが出土した。

59～62は壺である。球形の体部に直線的に延びる口縁部をもつが、59・60は端部を肥厚させているのに対し、61・62は丸くおさめる。調整は体部外表面が斜めまたは横方向のハケ目、内面は横方向のヘラケズリであるが、61については体部中央が縱方向のヘラケズリである。63・64は二重口縁壺である。63は斜め上方に延びる口縁をもち、接合部分の外側に突帯を貼り付けている。口縁部端部は平らである。調整は横方向のナデが認められる。64は外側に水平に屈曲する口縁部をもち、その上に2段目の口縁部を接合している。調整は外表面が縱方向のハケ目、内面が横方向のハケ目である。

65～68は高坏である。いずれも全体の形状がわかるものはない。65・66は杯部と脚部の接合部のみ遺存する。調整は外表面が縱方向のハケ目であり、65の内面には放射状の暗文が施される。脚部は65が中空の脚柱部に円盤を充填して杯部の底としているのに対し、66には認められず、杯部外表面に棒状の刺突痕が認められる。67・68は脚柱部である。67は中実で、68は円盤を充填し、杯部の底としている。

④ 包含層出土遺物

土師器（壺、壺、鉢、高坏）と須恵器（杯、埴？）が出土した。

土師器

69～80は壺である。口縁部が直線的に延びるもの（69～71・76～79）と鈍く屈曲するもの（72～75）がある。また、72・75・77は端部を肥厚させる。調整は磨滅のため明らかでないものが多いが、確認できるものでは、口縁部の外表面がたて方向のハケ目、内面が横、または斜め方向のハケ目である。また、74については、斜め方向のタタキの痕跡が認められる。体部の外表面は縱方向のハケ目、内面は横または斜め方向のヘラケズリである。体部の形状がわかるのは69と80のみで、69はほぼ球形、80は底部が尖り気味である。また、80の底部には1カ所の穿孔がある。

81～83は壺である。81は直口壺で、直線的に延びる口縁部をもち、端部付近で小さく外反させる。82は二重口縁壺である。上下の口縁の接合は明らかでないが、外面に突帯を貼り付けている。端部は平らである。83は口縁部が外反したのち上方に彎曲させる。端部は平らである。

84は小型の鉢である。球形の体部から短く外反する口縁部をもつ。調整は体部外面が斜め、または縱方向の板ナデである。

85～100は高杯である。杯部の底部と口縁部の境が屈曲するもの（85）と、屈曲せず、緩やかに彎曲するもの（86・89）がある。また、脚柱部は基本的には直径5mm～8mm程度の孔が中心を縱方向に貫通し、細い筒状となっているが、85・86・92については脚柱部内の空間が大きく筒状であり、棒状の孔は認められない。また、89・91・92・94については細い筒状であっても棒状の孔は認められない。調整は、脚柱部外面は縱方向のケズリ、内面は絞り痕、または、横方向のヘラケズリ、脚部縫の内面は横方向のハケメが認められる。杯部と脚部の接合部付近には縱方向のハケが認められる。また、92には、杯部と脚部の接合のため、脚部の上面とその裏側の内面にはヘラ状工具の刺突痕が認められる。

須恵器

101は蓋杯の身である。底部を欠くため、あるいは高杯となるかもしれない。扁平な体部に水平に伸びる受部、大きく内傾する立ち上がりをもつ。受部の下には丁寧な波状文を巡らす。調整は回転ナデで、底部は手持ちヘラケズリである。色調は灰色から黒色で、特に黒色部分は黒光りしている。102は甌と考えられるが、破片のため明らかでない。体部から口縁部にかけての破片と考えられ、中程にシャープな突帯を巡らす。黒灰色で、黒光りしている。

⑤ 窯出土遺物

須恵器（杯A、杯B蓋、杯B、壺）が出土した。

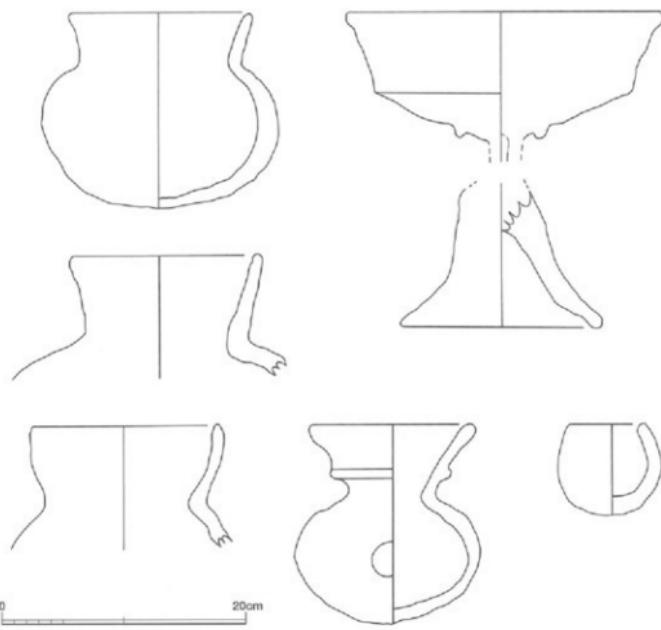
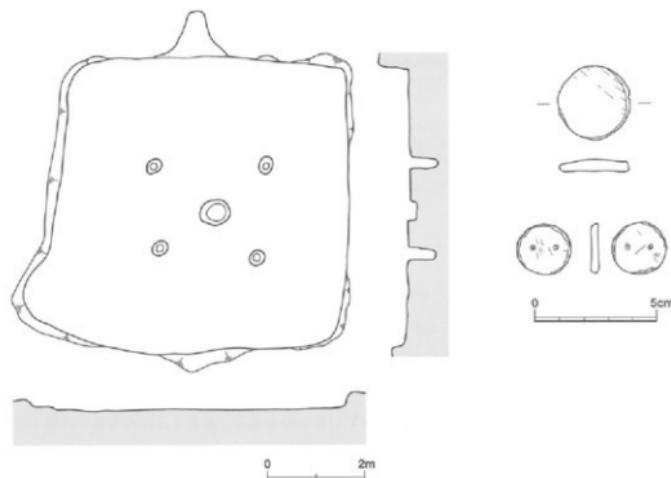
103～115は杯Aである。平らな底部から緩やかに彎曲し、斜め外方に延びる体部をもつ。回転ナデ調整で、底部はヘラ切り未調整である。116～120は杯B蓋である。緩やかに彎曲する盛蓋で、端部は下方へ屈曲させる。調整は回転ナデ調整で、天井部は回転ヘラケズリを施す。116は摘みで、扁平である。121・122は杯Bである。平らな底部から上外方へ彎曲し、体部は外傾して直線的に伸びる。高台は彎曲部に近いところに貼り付けられ、低く、外方へ傾いている。123は壺の底部である。直線的に開く体部をもち、外傾する高台は太く、底部の端に貼り付けられている。

第5節 小結

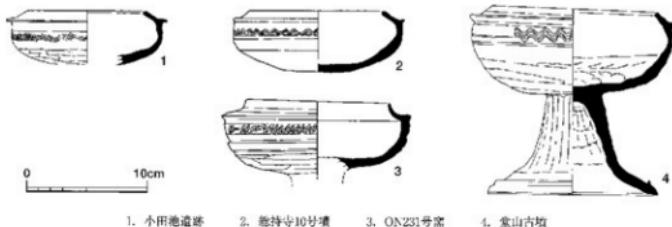
① 古墳時代

遺構

堅穴住居が検出された。湯舟川とその支流によって形成された眼下の低地と比較すると、かなり高所に立地している。周辺には古墳時代の集落が確認された例があまりないが、湯舟川の対岸にあたるタツケ平遺跡でもこのような立地を示している。タツケ平遺跡では2基の堅穴住居が検出された。01号住居址（第8図）は、一辺6.8mの隅丸方形の堅穴住居で、床の中央に一辺50cm、深さ30cmの方形の炉があり、それを開んで2m間隔の柱穴が4箇所検出された。床面は地山を踏み固め、隅には床面より高さ10cmの張り出し部をもち、出入口と思われる。出土遺物に石製有孔円盤、橢形土師器があることから、



第8図 タツケ平遺跡の遺構・遺物



第9図 小田池遺跡出土初期須恵器の類型

古墳時代中期に営まれた集落であることが明らかで、小田池遺跡とはほぼ同時期にあたる。なぜ、このような高所に営まれたのか明らかではないが、当地域においては小田池遺跡だけが特殊な例ではないようである。

また、小田池遺跡の堅穴住居には谷部に塗かれているものもある。大きくくほんだ地山は黒ボクを基本とした埋土によって埋められているが、それでも谷の痕跡はこされており、立地条件はよいものではなかったであろう。遺跡周辺の地形に目をやると、遺跡の西側には平坦な地形があり、また、谷部を埋める埋土上層からも土師器が多数流れ込んだ状態で出土していることから、この平坦地が小田池遺跡の中心地である可能性が高く、そうすると谷部の住居はその周辺の様相であると考えることができる。

堅穴住居の形態は、小型のSH02が南北2.6m、東西2.3m、大型のSH04が東西6.1m、南北4.5mと大きく差がある。屋内施設も、SH05では炉とカマドの両方をもつものや、柱穴が検出されなかったSH02・04があり、多様である。柱穴が検出されなかったSH02・04については、壁で建物を支える構造（大壁造り）であった可能性も考えられる。

遺物

住居跡や包含層から土師器と須恵器が出土した。遺跡の立地から考えて、遺跡の存続期間は長期にわたるものではないと思われ、出土場所が異なるものの、出土した遺物には時期差はあまりないものと考えられる。層位的にはSH04内出土土器と、それを覆う埋土上層では上下関係にあるが、先述したように、上層に包含された土器が平地のある西側からの流れ込みであれば、堆積時の時間差ではあっても、大きな時期差を含んでいるものではないと考えられる。このことから、土師器と須恵器についても同時期であるといえる。

さて、小田池遺跡で出土した須恵器は、初期須恵器の特徴をよく備えている。すなわち、黒光りするほどの堅密な焼成、シャープな稜線は、破片ではあっても、初期須恵器であることがわかる。特に101は全体の形状がわかるもので、全体が羽釜形を呈し、底部外面には手持ちのヘラケズリが施されるなど、TK73型式の特徴をもつ。さらに、101の特徴として受部直下に巡らされた波状文があるが、このような特徴は、「尾張型須恵器」と呼ばれ、尾張地域の特性として指摘されているものである（岩崎1987）。確かに、尾張地域には波状文を巡らせた蓋杯の例が多い割合で認められるが、近年、近畿地方でも少數ではあるが確認されている。例を挙げると、大阪府大東市堂山古墳（三木1994）、堺市陶邑ON231号室跡（西口1994）、茨木市尼持寺10号墳（奥1996）などがある。このうち、須恵器の大供給地である陶邑古窯址群内の一基からも出土していることから、小田池出土の須恵器についても当地から供給されたと

するほうがより妥当であろう。もっとも、小田池遺跡が位置する但馬地方は日本海に面しており、かつ町内には古墳時代終末期の長者ヶ平2号墳の蓮華文壁画のような波來的要素が他にも確認できることから、韓半島から直接搬入された陶質土器である可能性も考慮する必要がある。

土師器については、甕、高坏の2器種が大半で、それ以外に壺が認められる。壺は、口縁部の形態によって、①やや内彎するもの、②直線的に外傾して延びるもの、③口縁部中程で上方へ屈曲し、鈍い稜をもつものの、3種があり、さらに口縁部端部の形態によって、(a)内側へ肥厚させるもの、(b)丸くおさめるもの、(c)面をもつものの、(d)やや外方へ広がるもの、の4種に分かれる。縁部を肥厚させているものは、口縁部が内彎するもののみである。調整は内面が横方向のヘラケズリ、外面が斜めまたは上方向のハケメであるが、61については頭部付近の横方向のヘラケズリが認められず、粘土紐の接合痕が明瞭に確認できる。また、横方向のヘラケズリが認められるものは、その範囲が体部と頭部の屈曲部までは及んでいない。

高坏は、杯部の形態によって、①底部と体部の境に段、または段が認められるもの、②ゆるやかに彎曲するものの2種に分かれる。また、脚部は、(a)中実のもの、(b)中空であるが、中心に棒状工具による細長い貫通した孔が認められるもの、(c)筒状を呈し、杯部の底部に押しつけて接合したため、杯部が膀胱状に膨らんでいるもの、がある。

壺には、二重口縁、口縁部が上方へ屈曲し、そこに突帯を貼り付けたもの、小型で口縁部が短いものがある。

これらの特徴は布留式に統くものであり、初期須恵器に併行するものとして問題はない。

② 奈良時代

造 構

窯跡のみが検出された。小規模で、大型の壺は窯に入れるることは不可能であり、小型の器種のみを消費地の需要に合わせて焼成したのである。供給先としては、眼下に臨むことができる前田遺跡が挙げられる。当遺跡で必要となった器種のみを遺跡のすぐ裏の丘陵で焼成したものと考えられる。

遺 物

杯類と壺が出土している。杯類は杯Aが多く、杯Bは少ないが、全体数が少ないので、本来の傾向を示しているかどうかは明らかでない。杯Aは焼け歪みなどを考慮すると、ほぼ同じような形態であり、口径の平均が13.3cm、底径の平均が8.6cm、器高の平均が3.9cmである。杯B蓋は天井部を回転ヘラケズリするなど、杯Bと共に丁寧なつくりである。

これらの時期は、杯B蓋に高さがある盛蓋であること、杯Bの高台の位置や短く外方へ踏ん張った形態を考慮すると、平城IIに比定できよう。

<参考文献>

- 兵庫県立但馬文教府 1979年『原始・古代の但馬』
岩崎直也 1987年 「尾張型須恵器の提唱」『信濃』第39巻第4号 信濃史学会
三木 弘 1994年 「堂山古墳群」大阪府文化財調査報告書第45編 大阪府教育委員会
西口陽一 1994年 「野々井西遺跡・ON231号窯跡」
大阪府教育委員会・財団法人大阪府埋蔵文化財協会
奥 和之 1996年 「總持寺古墳群出土の初期須恵器」『韓式系土器研究』VI 韓式系土器研究会

第7章　まとめ

① 繩文時代

筒井遺跡で、ピットが円形に並んだ住居跡状の遺構が検出される。

庵の谷遺跡では、早期の押型文土器（捺円文、山形文、複合鋸齒文）が出土しているが、遺構は確認できなかった。なお、水洗選別によりチップが出土しており、かつて居住地であったのが削平されたものと考えられる。

② 弥生時代

筒井遺跡で、後期の土坑、溝が検出されるが、周辺の地形から大規模な集落は想定できない。

庵の谷遺跡では、後期（庄内併行期）の墳墓16基と掘立柱建物1棟が検出される。墳墓は木棺墓からなるが、四隅突出型墳丘墓の影響を受けたと考えられるような墓も検出された。供獻土器が出土したものもある。また、管玉が1点木棺墓から出土している。

③ 古墳時代

小田池遺跡で、竪穴住居跡4棟が検出された。住居内、及び上層包含層からは土師器のほか、少量の須恵器が出土しており、TK73型式に比定できるものである。住居跡には柱穴がないものがあり、大陸造りとの関連を考える必要があるが、規模が小さいため特殊な建物であっただけなのかもしれない。

大寺山古墳群では、2基の古墳が調査された。大寺山古墳群は尾根上に立地する10基からなる古墳群で、1・2号墳は尾根を階段状に削ることによって築造している。調査により主体部は石棺がそれぞれ1基ずつ検出された。1号墳では玉類（翡翠製勾玉・碧玉または綠色凝灰岩製の管玉・白玉）と、鉄製品（針状鉄製品、刀子、短剣）が副葬されていたが、2号墳では棺内からの出土遺物ではなく、蓋石上から鉄製品（錐鉛先、不明小片）が出土している。築造時期は古墳時代中期前半と考えられる。

④ 奈良時代

窯（小田池窯）を調査した。尾根斜面に立地した高所に位置している。小規模な窯で、灰原の遺存状況が懸かったこともあって、出土遺物は少ない。杯A、杯B蓋、杯B、壺のみが出土しており、規模が小さいことや、床面が1面のみで、また補修のあとも無いことから考えて、操業期間が短く、消費地の需要に合わせて小型器種を捕うことを目的とした窯であった可能性がある。消費地の候補として、眼下に位置する官衙の前田遺跡が考えられる。

⑤ 中世

筒井遺跡で、掘立柱建物と溝が検出される。

以上、各遺跡ごとの調査面積が小さいものの、発掘調査件数が少ない美方郡内において、各時代にわたる一つの例を示すことができた。

第3表 土器一覧表

簡井遺跡

報告番号	実測番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底(脚)径(cm)	出土地区	層位
1	1	弥生	脚付鉢	(9.9)	10.45	5.6	B区 SK04	
2	7	弥生	口縁(底?)	(15.5)	(3.1)	—	B区 SD01	
3	2	弥生	壺	(16.0)	(19.65)	—	B区 SD01	
4	10	土師器	小皿	7.65	1.7	—	C区 SB01	柱穴
5	9	I師器	皿	(10.7)	(3.0)	—	C区 柱穴	
6	13	绳文		2.65	3.4	0.6	B区 クロボク	
7	12	绳文		3.65	3.25	0.8	C区 クロボク	
8	14	绳文		4.3	4.6	0.55	C区 クロボク	
9	4	弥生	甕	(17.7)	(4.3)	—	C区 クロボク	
10	3	弥生	壺	(19.15)	(3.95)	—	B区 クロボク	
11	5	弥生	甕	(19.8)	(5.6)	—	B区 クロボク	
12	8	弥生	鉢	(25.0)	(5.2)	—	B区 クロボク	
13	6	弥生	甕(底部)	—	(6.25)	(4.0)	B区 クロボク	
127	11	弥生	甕 体部				B区 クロボク	

魔の谷遺跡

報告番号	実測番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底(脚)径(cm)	出土地区	層位
14	30	弥生	甕	(14.8)	(6.4)	—	SX13	墓壇最上部
15	31	弥生	甕	19.4	(6.8)	—	SX13	墓壇最上部
						—	SX13周辺	クロボク
16	29	赤土	口縁(底?)	(19.6)	(3.7)	—	SX13	墓壇最上部
17	32	赤土	甕	(17.8)	(29.3)	—	SX14	墓壇最上部
						—	SX14周辺	クロボク
18	37	弥生	壺	14.1	25.4	(4.3)	SX14	墓壇最上部
						—	SX14周辺	クロボク
19	35	弥生	脚付壺	8.6	(11.15)	—	SX14	墓壇最上部
						—	SX14周辺	クロボク
20	34	弥生	脚	—	(8.9)	15.4	SX14	墓壇最上部
						—	SX14周辺	クロボク
21	36	弥生	壺	18.2	26.2	3.7	SX13	墓壇最上部
						—	SX13周辺	クロボク
22	33	弥生	甕	(19.0)	(3.2)	—	SX14	墓壇最上部
						—	SX14周辺	クロボク
23	25	弥生	口縁(脚台?)	(21.8)	(1.8)	—	SX14	墓壇最上部
						—	SX14周辺	クロボク
24	42	弥生	甕 口縁	(16.7)	(4.2)	—	SX07	墓坑

報告 番号	実測 番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	高底(脚)径 (cm)	出土地区	層位
25	43	弥生	甕 口縁	(15.0)	(2.2)	—	SX08	基壇
26	44		土器品	3.8	1.5	1.25	SX08	墓壙
27	28	弥生	甕	(19.4)	28.2	—	SX15 周邊	堆上
28	39	弥生	器台		(6.3)	—	SD01	
29	38	弥生	口縁(蓋?)	(17.2)	(3.2)	—	SD01	
30	40	弥生	甕	(17.8)	(3.6)	—	SD01	
31	41	弥生	蓋	(10.5)	(5.3)	—	SB01 柱穴	
32	54	縄文		2.6	2.1	0.7	SX06	棺内(水洗選別)
33	55	縄文		2.9	3.6	0.9	SX07	棺内(水洗選別)
34	58	縄文		2.3	2.4	0.6	SX08	棺内(水洗選別)
35	53	縄文	口縁	3.5	2.5	0.8	SX06	棺内(水洗選別)
36	57	縄文		2.8	3.9	0.6	SX08	棺内(水洗選別)
37	56	縄文		3.45	3.0	0.8	SX07	墓壙
38	48	縄文	口縁	2.9	3.4	0.8		クロボク
39	59	縄文		2.9	3.15	0.9	SX08	棺内(水洗選別)
40	45	縄文		4.85	4.95	0.8		クロボク クロボク
41	49	縄文		7.45	5.2	0.8	SX15	
42	50	縄文		4.3	3.1	0.8	SX15	
43	47	縄文		5.05	5.6	0.7		クロボク
44	46	縄文		2.8	3.3	0.6		クロボク
45	51	縄文	口縁	5.5	5.45	0.7	SX14 SD01	棺内(水洗選別)
46	52	縄文		4.45	3.1	0.8	SX06	棺内(水洗選別)
47	27	弥生	高杯	—	(6.6)	—		クロボク最上部
48	26	弥生	甕		(2.9)	(18.1)		クロボク最上部
49	22	弥生	甕	—	(9.2)	—		クロボク
50	21	須恵器	口縁	(10.25)	(3.1)	—		クロボク
51	23	須恵器	高杯	—	(5.1)	(7.2)		クロボク最上部

小田池遺跡

報告 番号	実測 番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	高底(脚)径 (cm)	出土地区	層位
52	167	土師器	甕	(16.2)	(8.6)	—	SH01	
53	164	土師器	甕	(11.2)	(7.0)	—	SH01	上層・下層
54	166	土師器	高杯	(17.0)	(7.5)	—	SII01	下層

報告書号	実測番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	高脚径 (cm)	出土地区	層位
55	165	土師器	高壺	—	(8.5)	(11.0)	SH01	上層
56	172	土師器	甕	(16.2)	(9.7)	—	SH04	
57	171	土師器	高壺	(16.4)	(6.8)	—	SH04	
58	173	須恵器	甕	—	(2.0)	—	SH04	
59	159	土師器	壺	(17.6)	(16.2)	—	SH05	上層(褐色粘板岩混じり)
60	162	土師器	壺	(17.8)	(6.4)	—	SH05	黒色層(下層)
61	160	土師器	甕	14.6	(11.2)	—	SH05	上層(褐色粘板岩混じり)
62	161	土師器	甕	(14.2)	(8.5)	—	SH05	黒色層(下層)
63	154	土師器	壺	(21.5)	(5.4)	—	SH05	上層(褐色粘板岩混じり)
64	163	土師器	甕	—	(3.5)	—	SH05	黒色層(下層)
65	155	土師器	高壺	—	(2.5)	—	SH05	上層(褐色粘板岩混じり)
66	156	土師器	高壺	—	(1.8)	—	SH05	上層(褐色粘板岩混じり)
67	157	土師器	高壺	—	(6.3)	—	SH05	上層(褐色粘板岩混じり)
68	158	土師器	高壺	—	(5.0)	—	SH05	上層(褐色粘板岩混じり)
69	152	土師器	甕	(11.6)	14.5	—	SK01	
70	113	土師器	甕	(13.1)	(7.2)	—	調査区南西部谷上方	褐色粘板岩混じり
71	118	土師器	壺	(15.9)	(4.6)	—	谷部下方断ち割り付近	
72	103	土師器	甕	(14.8)	(4.06)	—	2・レンチ東半	包含層
73	169	土師器	甕	(16.4)	(5.3)	—	SH103	
74	102	土師器	甕	(16.0)	(5.0)	—	2・レンチ	
75	107	土師器	甕	(18.8)	(5.7)	—	調査区南西部谷二方	褐色粘板岩混じり
76	106	土師器	壺	(16.5)	(5.7)	—	谷中央、土坑跡落ち込み	褐色粘板岩混じり上層
77	150	土師器	甕	(16.2)	(5.6)	—	神説2トレング北側	褐色粘板岩混じり
78	148	土師器	甕	(18.3)	(5.5)	—	神説2トレング北側	褐色粘板岩混じり
79	168	土師器	甕	(18.6)	(5.2)	—	谷中央	褐色粘板岩混じり
80	122	土師器	甕	—	(10.0)	—	Ka.2秋北側	
81	153	土師器	壺	(13.5)	(19.0)	—	谷中央	
82	111	土師器	壺	(20.5)	(6.0)	—	調査区南西部谷上方	褐色粘板岩混じり
83	146	土師器	壺	(18.3)	(5.2)	—	神説2トレング北側	褐色粘板岩混じり
84	121	土師器	壺	10.7	8.5	—	谷部下方断ち割り付近	
85	112	土師器	高壺	—	(4.9)	—	調査区南西部谷上方	褐色粘板岩混じり
86	105	土師器	高壺	—	(4.2)	—	谷中央、土坑跡落ち込み	褐色粘板岩混じり上層
87	104	土師器	高壺	—	(2.4)	—	谷中央、土坑跡落ち込み	褐色粘板岩混じり上層
88	170	土師器	高壺	—	(1.6)	—	谷中央	褐色粘板岩混じり上層
89	120	土師器	高壺	—	(10.7)	—	谷部下方断ち割り付近	
90	119	土師器	高壺	—	(9.8)	(9.7)	谷部下方断ち割り付近	

報告 番号	実測 番号	種 別	器 種	口 径 (cm)	巻 (cm)	高 度(脚) 備 (cm)	出土地区	層 位
91	116	土師器	高环	—	(8.5)	—	谷部下方面断ち割り付近	
92	110	土師器	高环	—	(7.2)	—	調査区南西部谷上方	褐色粘板岩混じり
93	114	土師器	高环	—	(8.5)	—	谷部下方面断ち割り付近	
94	147	土師器	高环	—	(7.8)	—	確認2トレンチ北側	褐色粘板岩混じり
95	151	土石器	高环	—	(6.1)	—	確認2トレンチ西北側	褐色粘板岩混じり
96	115	土師器	高环	—	(7.2)	—	谷部下方面断ち割り付近	
97	145	土師器	高环	—	(8.6)	(12.5)	機械掘削時(縫隙2トレンチ付近)	
98	109	土師器	高环	—	(7.7)	(9.3)	調査区南西部谷上方	褐色粘板岩混じり
99	108	土師器	高环	—	(7.7)	(11.2)	調査区南西部谷上方	褐色粘板岩混じり
100	117	土石器	高环	—	(2.6)	(12.2)	谷部下方面断ち割り付近	
101	149	須恵器	环身	(9.6)	(4.4)	—	確認2トレンチ北側	褐色粘板岩混じり
102	101	須恵器	縁	—	(3.5)	—	2トレンチ東半円形落ち込み底上	鉄合層
103	143	須恵器	坏A	(11.4)	4.2	(8.2)	室12区	
104	129	須恵器	坏A	(12.6)	4.0	(7.5)	室5区	床面直上層中
105	123	須恵器	坏A	(12.4)	3.5	(8.1)	室(5・6)・(7・8)区間アゼ	窓壁小片層
106	124	須恵器	坏A	(12.1)	4.1	(8.4)	室(5・6)・(7・8)区間アゼ、7・8区菱コ	窓壁小片層
107	127	須恵器	坏A	13.0	4.1	8.6	室2区、12区	床上
108	140	須恵器	坏A	(12.9)	3.7	(7.9)	室10区灰原、12区灰原	
109	125	須恵器	坏A	(13.5)	3.9	(9.2)	室(5・6)・(7・8)区間アゼ、焚コ7・8区	
110	142	須恵器	坏A	(13.5)	3.3	(8.0)	室12区	
111	128	須恵器	坏A	(14.0)	4.7	(10.6)	室2区、7区	床上
112	135	須恵器	坏A	(13.5)	4.0	(8.5)	室8区焚口、7区灰原	
113	134	須恵器	坏A	(14.1)	3.7	(9.0)	室7区焚口	
114	130	須恵器	坏A	(14.3)	3.9	(8.6)	室5区、7区	床面直上層中
115	136	須恵器	坏A	(15.6)	3.4	(9.0)	室8区焚口、7区灰原	
116	139	須恵器	坏B蓋	—	(1.3)	—	室8区焚口	
117	126	須恵器	坏B蓋	(16.1)	(2.7)	—	室2区、7区	床上
118	133	須恵器	坏B蓋	(15.8)	(2.6)	—	室7区灰原	
119	138	須恵器	坏B蓋	(15.9)	(2.3)	—	室5区、8区	
120	141	須恵器	坏B蓋	(17.6)	(1.8)	—	室7区灰原、12区灰原	
121	137	須恵器	坏B	(14.9)	4.3	(10.5)	室5区、(5・6)・(7・8)区間アゼ、8区	床面直上層中
122	132	須恵器	坏B	(14.2)	4.2	(10.1)	室7区灰原	
123	131	須恵器	縁	—	(8.7)	(14.7)	室7区灰原	
124	81	須恵器	縁	—	(4.0)	—	分布調査No.2地点(前田遺跡)	
125	144	須恵器	縁	—	(1.4)	(6.8)	分布調査No.3地点	
126	82	青磁	—	—	—	—	分布調査No.2地点(前田遺跡)	

第4表 玉一覧表

庵の谷遺跡

報告番号	実測番号	器種	出土地区	長さ (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重さ (g)
J1	管玉	管玉	SX11 3区	0.6	0.4	0.2	0.1

大寺山古墳群

報告番号	実測番号	器種	出土地区	長さ (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重さ (g)
J2	勾玉1	勾玉	1号墳石棺内	2.1	1.45	0.08	4.2
J3	勾玉2	勾玉	1号墳石棺内	2.5	1.65	0.1	5.87
J4	玉1	臼玉	1号墳石棺内(水洗選別)	0.3	0.4	0.15	0.04
J5	玉2	白玉	1号墳石棺内(水洗選別)	0.25	0.35	0.15	0.03
J6	玉3	白玉	1号墳石棺内(水洗選別)	0.35	0.4	0.2	0.06
J7	玉4	白玉	1号墳石棺内(水洗選別)	0.2	0.35	0.2	0.02
J8	玉5	白玉	1号墳石棺内(水洗選別)	0.3	0.4	0.15	0.04
J9	玉6	白玉	1号墳石棺内(水洗選別)	0.35	0.4	0.15	0.04
J10	玉7	白玉	1号墳石棺内(水洗選別)	0.35	0.3	0.2	0.04
J11	玉8	白玉	1号墳石棺内(水洗選別)	0.25	0.35	0.15	0.02
J12	玉9	臼玉	1号墳石棺内(水洗選別)	0.25	0.4	0.15	0.04
J13	管玉11	管玉	1号墳石棺内	2.15	0.5	0.25	0.91
J14	管玉8	管玉	1号墳石棺内	2.9	0.5	0.2	1.0
J15	管玉9	管玉	1号墳石棺内	3.3	0.5	0.2	1.42
J16	管玉10	管玉	1号墳石棺内	3.45	0.5	0.2	1.02
J17	管玉6	管玉	1号墳石棺内	(2.05) (0.9)	0.5	0.2	0.35
J18	管玉3	管玉	1号墳石棺内	(3.5)	0.5	0.15	0.53
J19	管玉5	管玉	1号墳石棺内	2.9	0.4	0.2	0.36
J20	管玉1	管玉	1号墳石棺内	(2.7)	0.5	0.2	0.38
J21	管玉4	管玉	1号墳石棺内	2.5	0.45	0.2	0.29
J22	管玉2	管玉	1号墳石棺内	(2.0)	0.4	0.2	0.24
J23	管玉14	管玉	1号墳石棺内	(1.75)	0.45	0.1	0.2
J24	管玉12	管玉	1号墳石棺内	(1.7)	0.45	0.2	0.15
J25	管玉13	管玉	1号墳石棺内	(1.55)	0.45	0.15	0.14
J26	管玉7	管玉	1号墳石棺内	(1.15)	0.45	0.15	0.1

第5表 石器一覧表

庵の谷遺跡

報告番号	実測番号	石 材	種 別	器 種	出土地区	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
S1	S4	流紋岩	打製	石鏃	B区 クロボク	2.10	1.30	0.40	0.60
S2	S3	安山岩	打製	石鏃	A区 クロボク	4.05	1.95	0.55	9.70
S3	S2	珪質頁岩	打製	楔形石匙	A区 クロボク	2.80	5.05	0.85	2.90
S4	S16	サヌカイト	打製	楔形石器	C区 クロボク	4.10	6.10	0.57	14.20
S5	S1	—	磨製	扁平片刃石斧	B区 クロボク	6.00	3.00	0.75	24.90
S6	S10	安山岩	打製	削器	B区 クロボク	7.00	3.75	0.80	25.40
S7	S6	安山岩	打製	削器	B区 クロボク	6.00	4.30	1.10	24.80
S8	S22	頁岩	打製	剥片	C区 SK01	6.35	4.85	1.00	27.30
S9	S21	安山岩	打製	剥片	C区 クロボク	6.95	3.60	0.50	13.70
S10	S24	—	凹石	B区 クロボク	6.15	5.30	3.55	145.80	
S11	S18	安山岩?	凹石	C区 黒ボク	8.40	7.30	3.70	291.20	
S12	S19	—	凹石	C区 黒ボク	7.70	6.55	4.60	263.70	
S13	S46	—	凹石	C区 SK02	11.25	10.30	6.05	935.60	
S14	S2	—	砾石	B区 SD01	9.20	7.00	3.20	329.3	
S15	6	安山岩	打製	凹基式石鏟	分布調査No.19地点	1.70	1.40	0.30	0.6
S16	5	サヌカイト?	打製	楔形石器	分布調査No.16地点	4.05	3.75	1.20	20.5

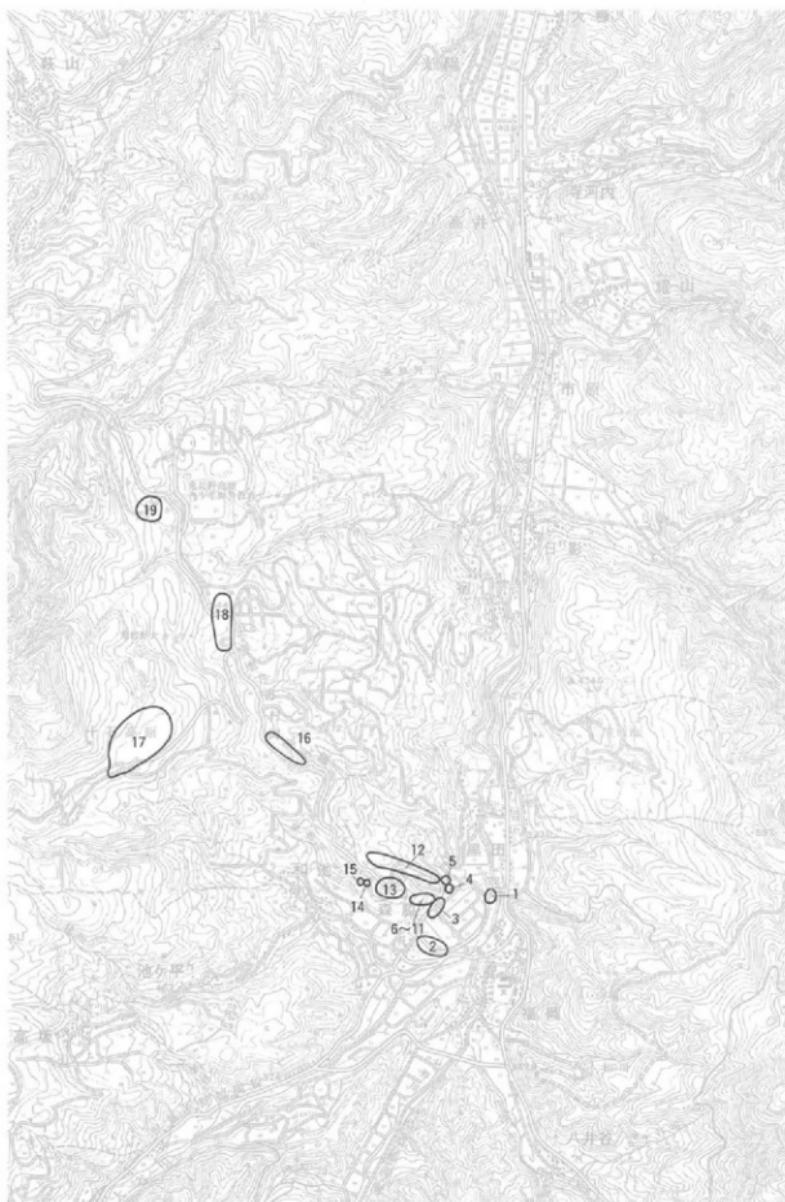
第6表 鉄器一覧表

大寺山古墳群

報告番号	実測番号	種 別	器 種	出土地区	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)
T1	処2	鉄器	針状鉄製品	1号墳 石棺内	2.10	0.30	0.15
T2	処9①	鉄器	針状鉄製品	1号墳 石棺内	3.20	0.35	0.15
T3	処1	鉄器	刀子	1号墳 石棺内	10.80	1.90	0.30
T4	処3	鉄器	短剣	1号墳 石棺内	37.50	3.00	1.00
T5	処4	鉄器	短剣	1号墳 石棺内	32.40	4.00	1.40
T6	処5	鉄器	鍔鋸の刀	2号墳 石棺蓋上部	8.40	10.00	0.40

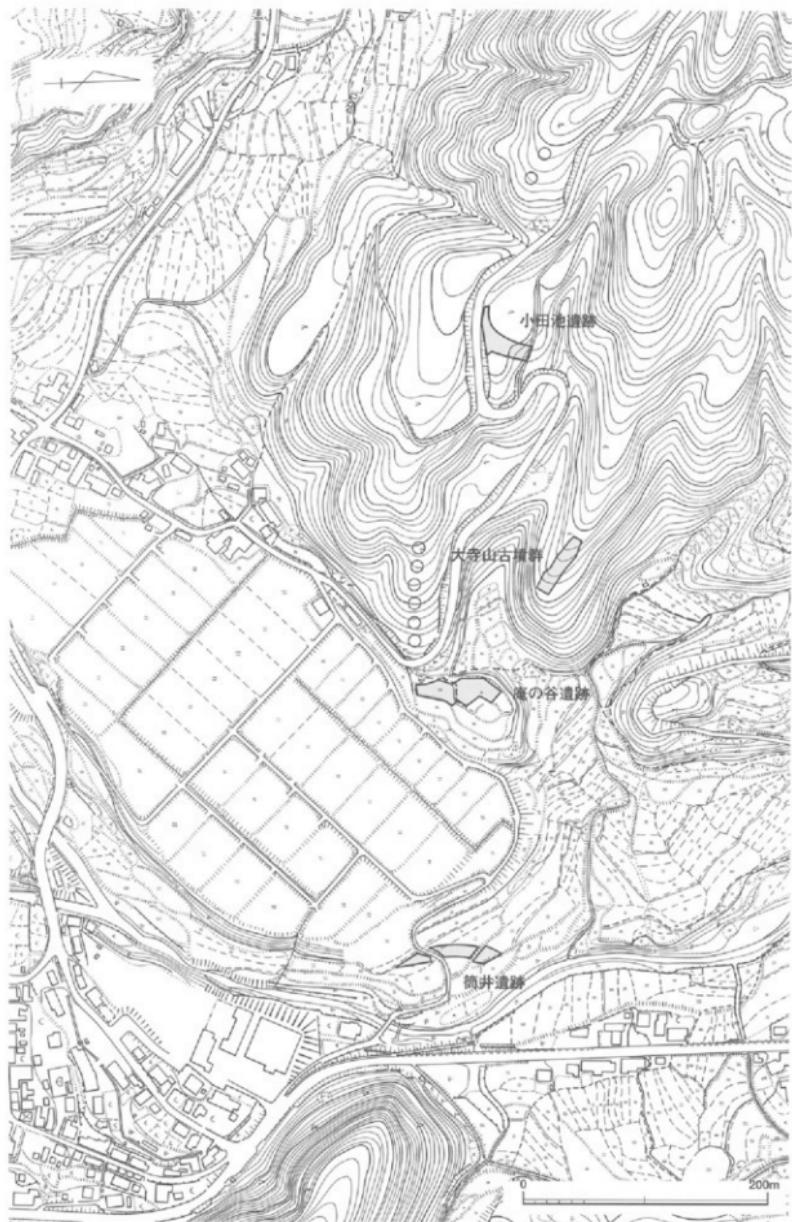
図 版

図版1 分布調査成果図

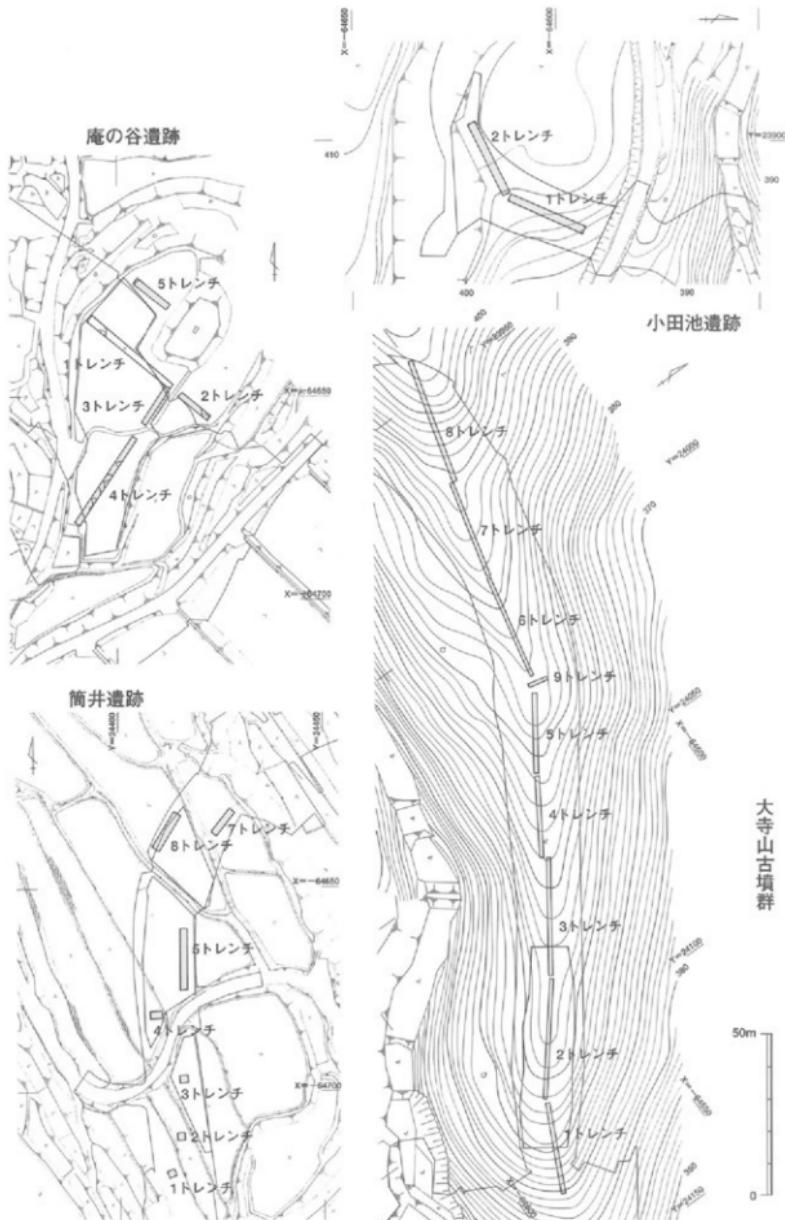


S = 1 / 25,000

図版2 発掘調査位置図

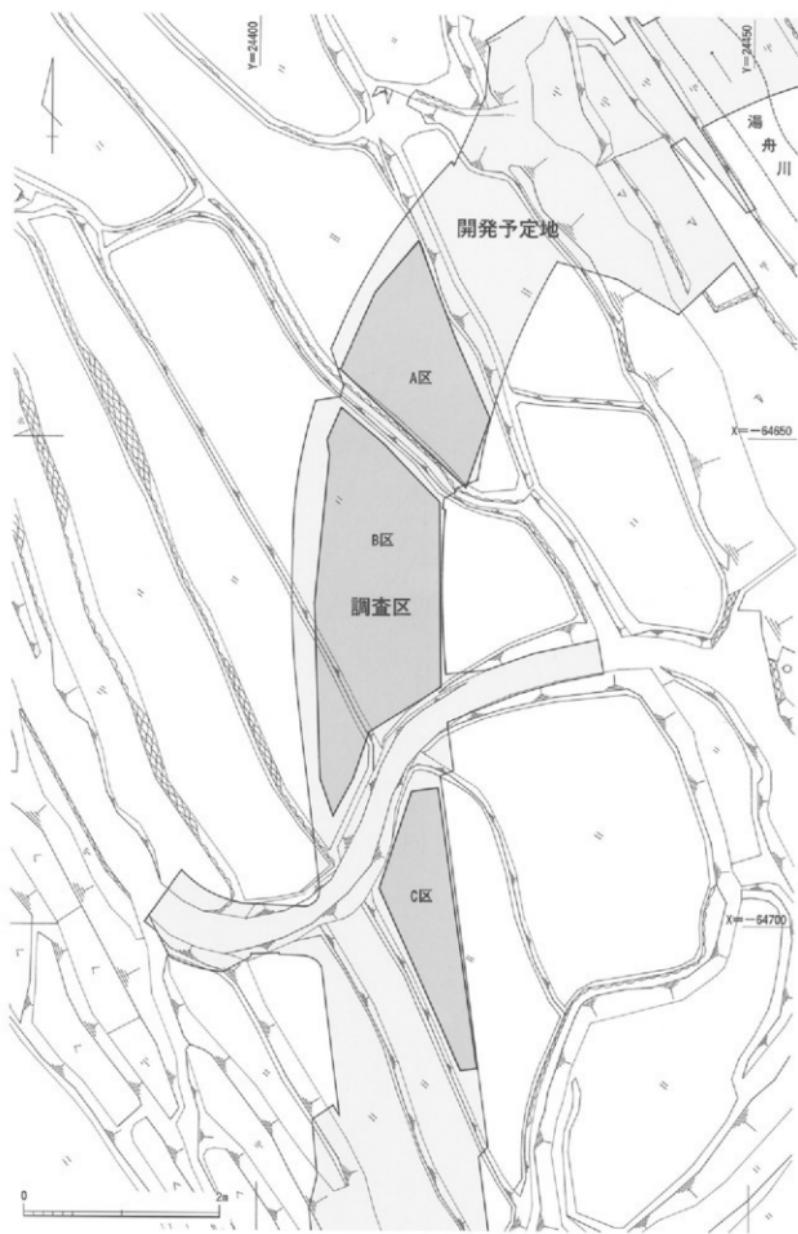


図版3 確認トレント配置図



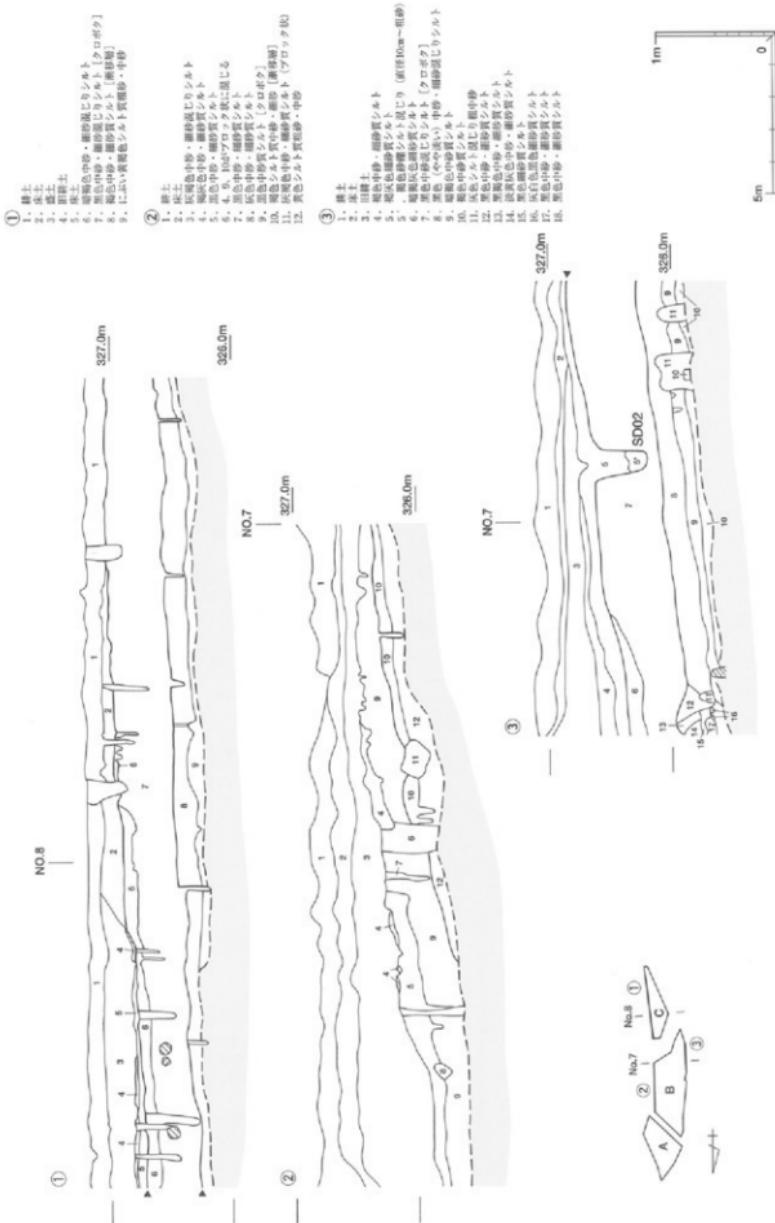
図版4 調査区位置図

筒井遺跡



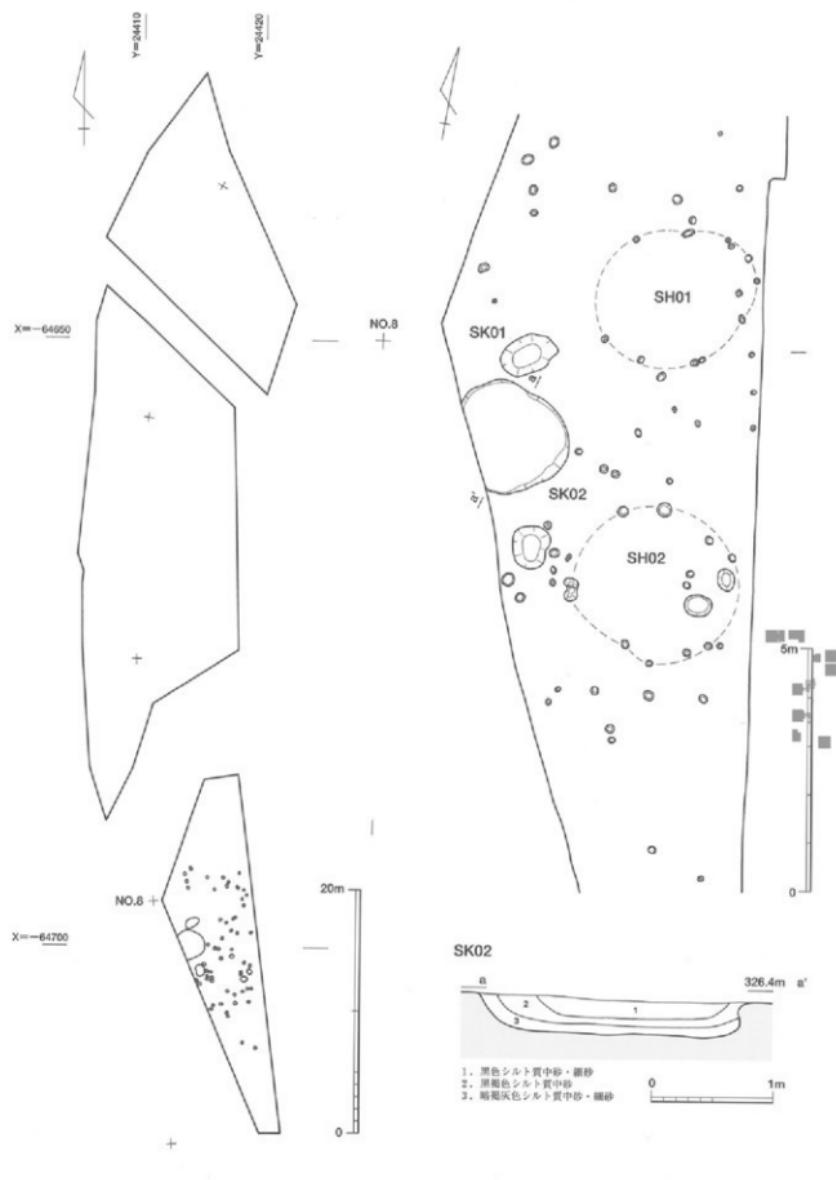
図版5 土層断面図

筒井遺跡



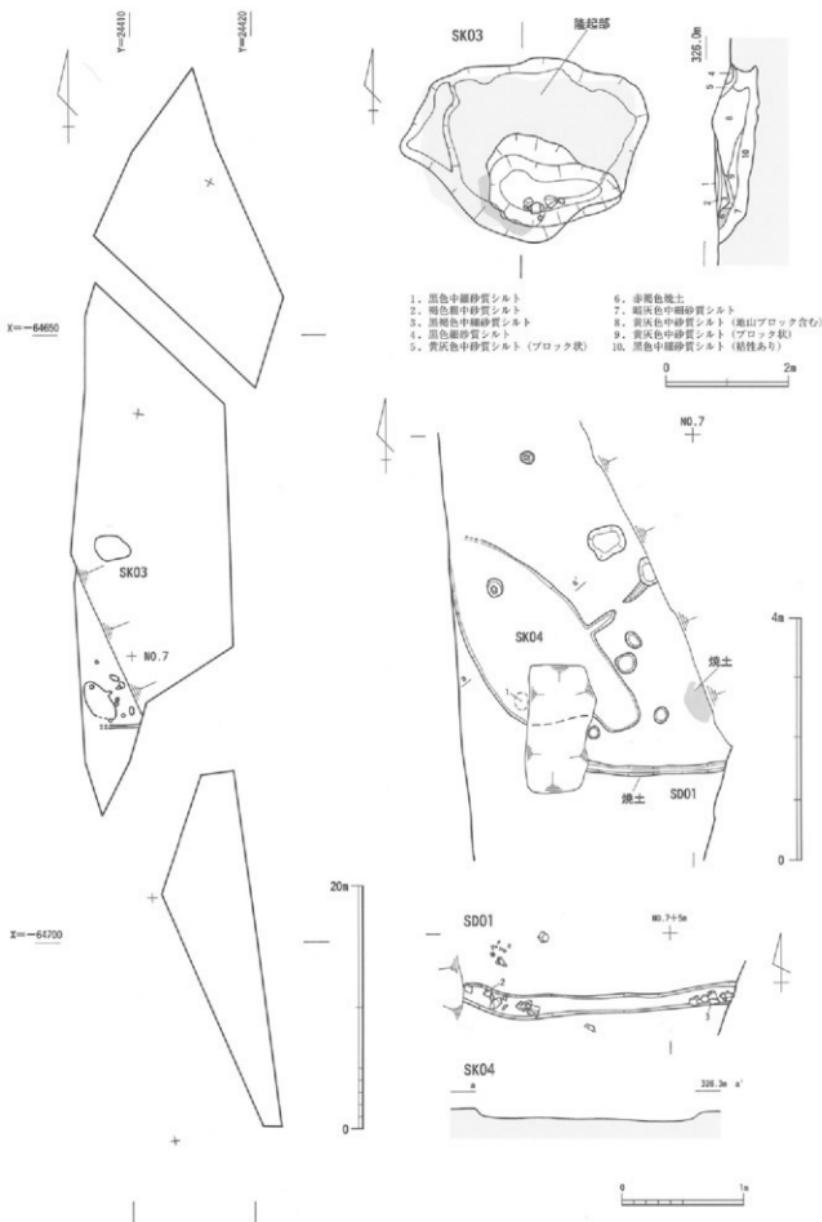
図版6 繩文時代の遺構

筒井遺跡



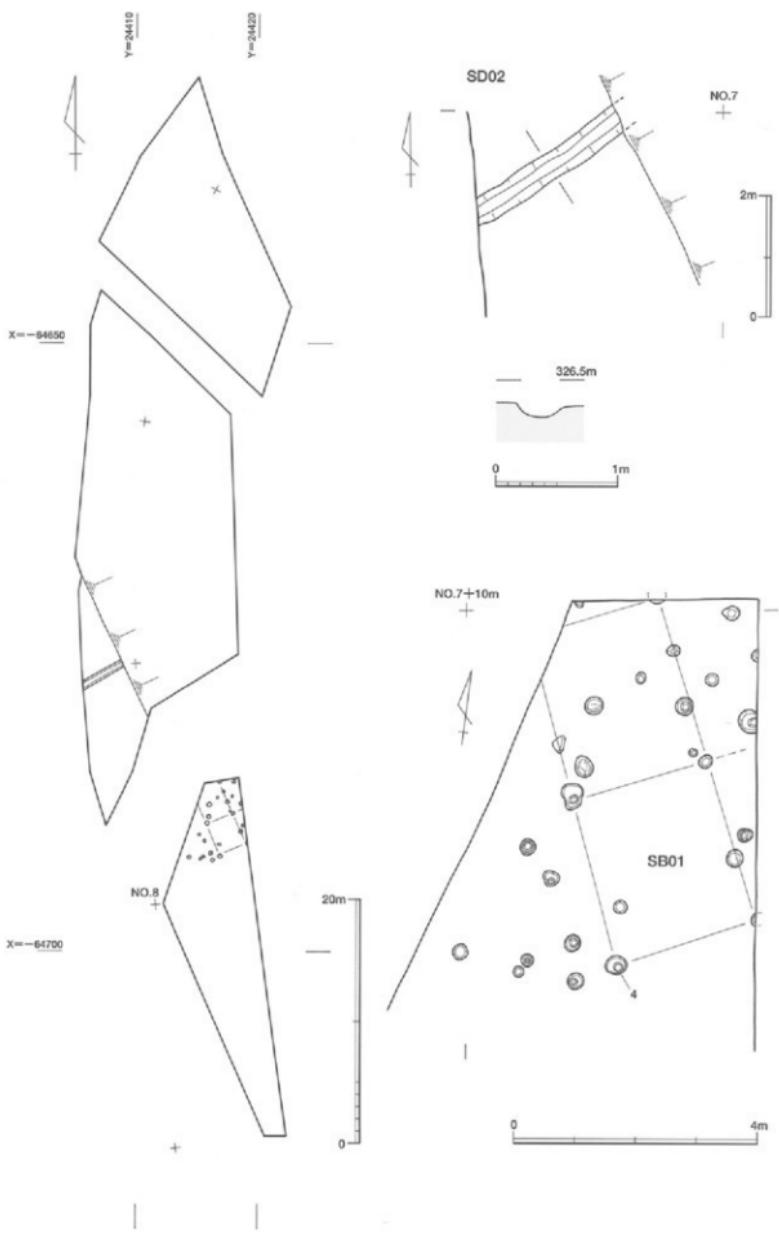
図版7 弥生時代の遺構

筒井遺跡

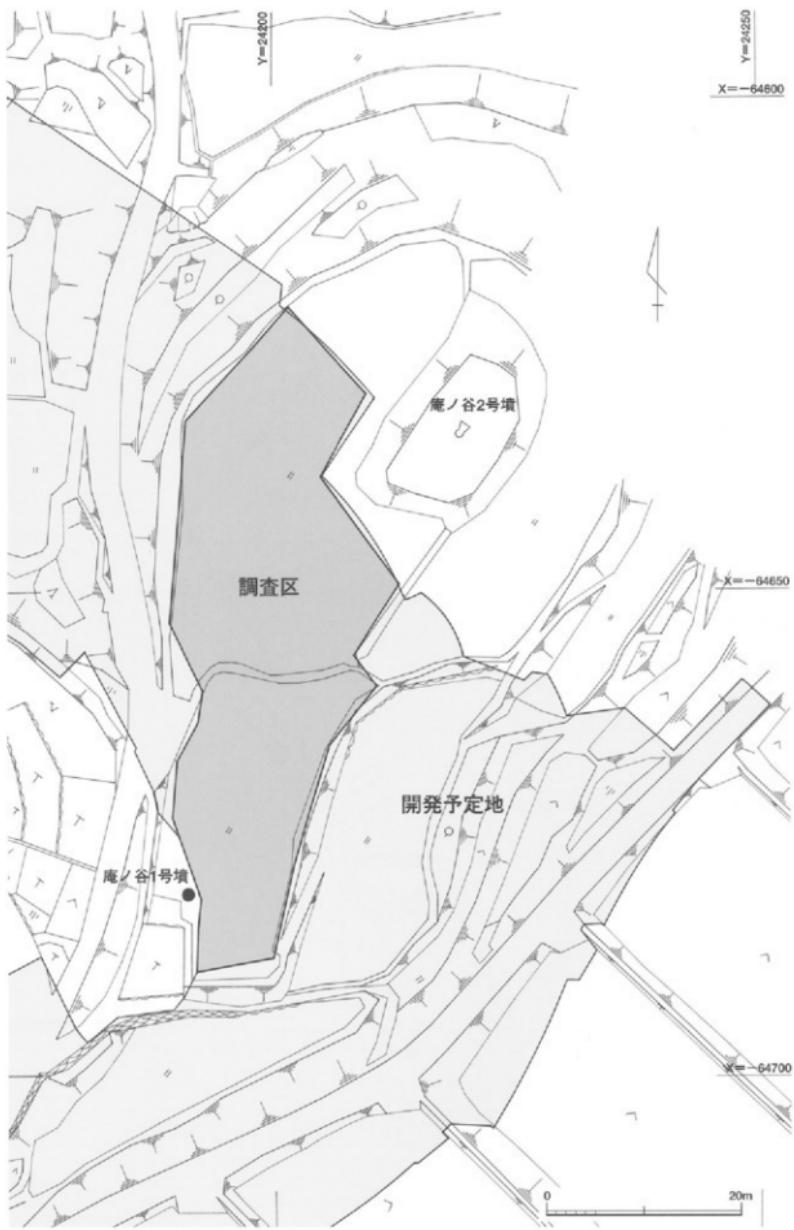


図版8 中世の遺構

筒井遺跡



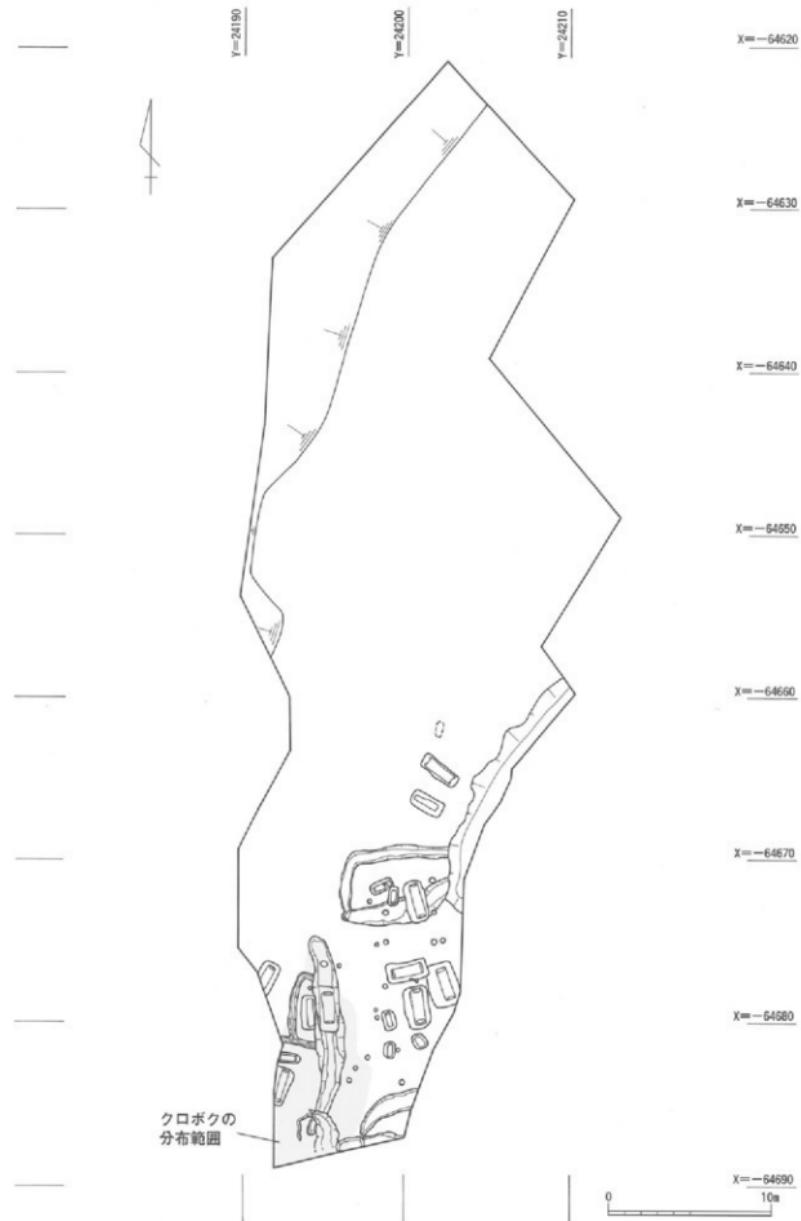
図版9 調査区位置図



庵の谷遺跡

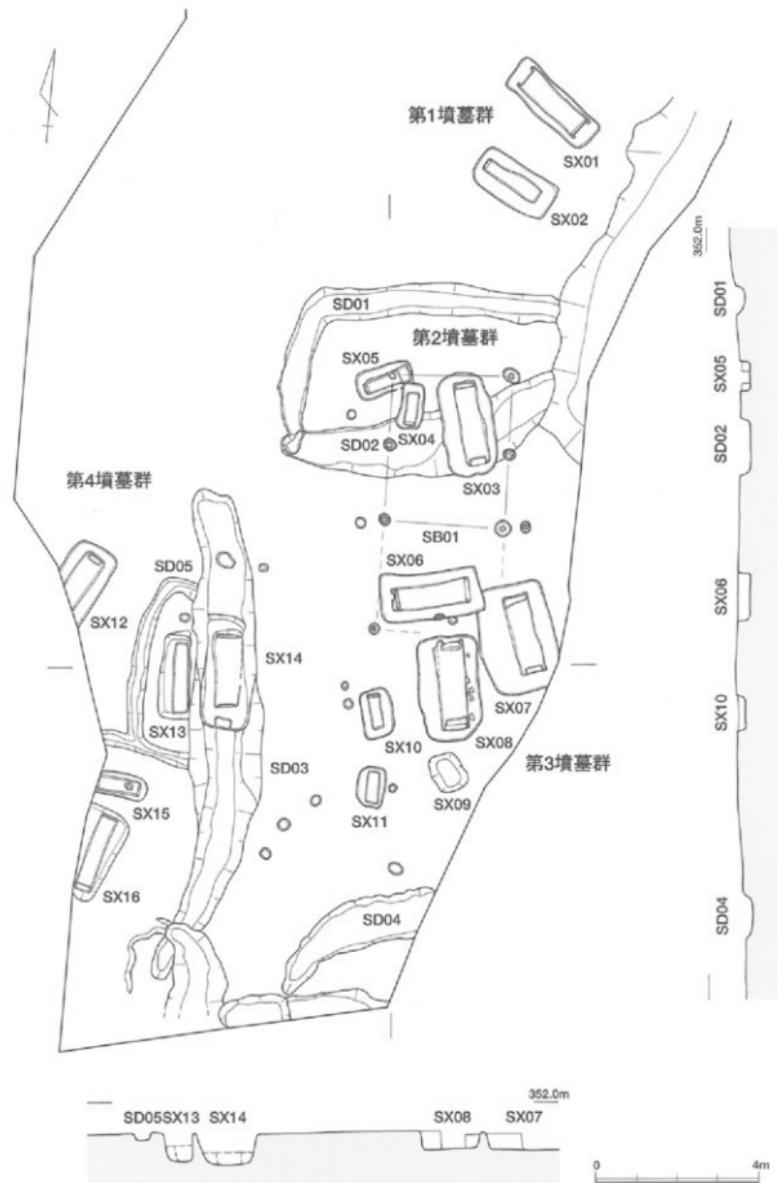
図版10 遺構配置図(1)

庵の谷遺跡



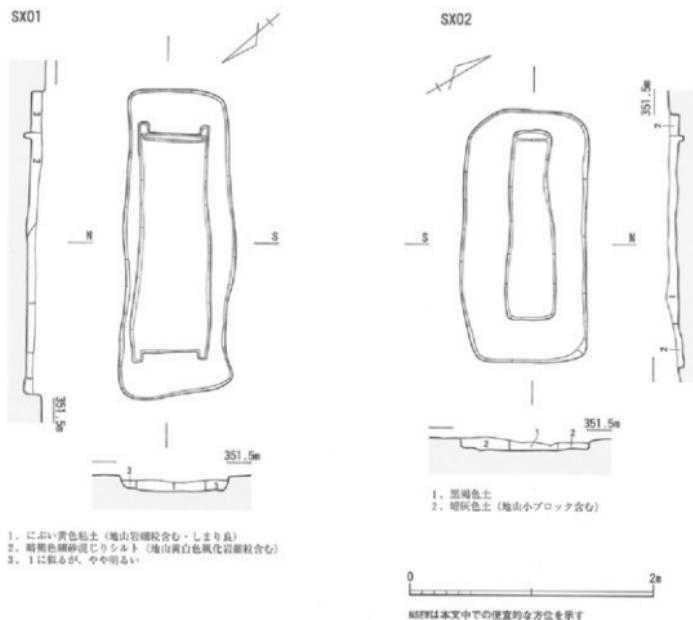
図版11 遺構配置図(2)

庵の谷遺跡



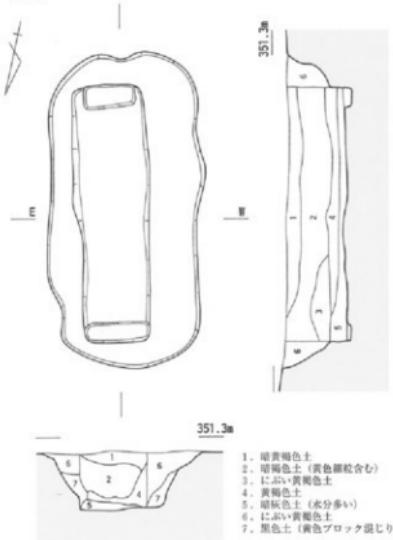
図版12 第1墳墓群 (SX01・02)

庵の谷遺跡

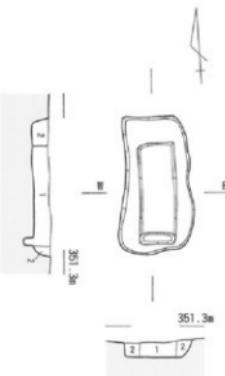


図版13 第2墳墓群 (SX03~05)

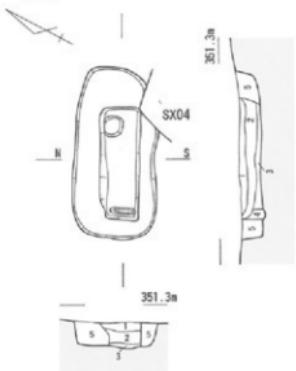
SX03



SX04

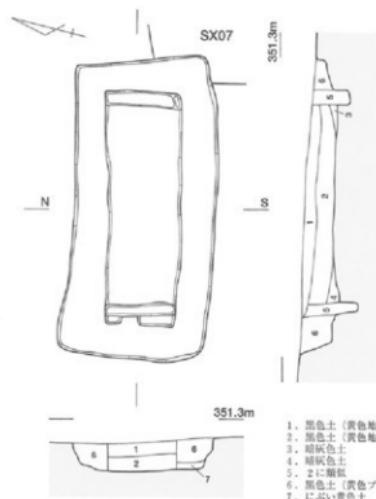


SX05

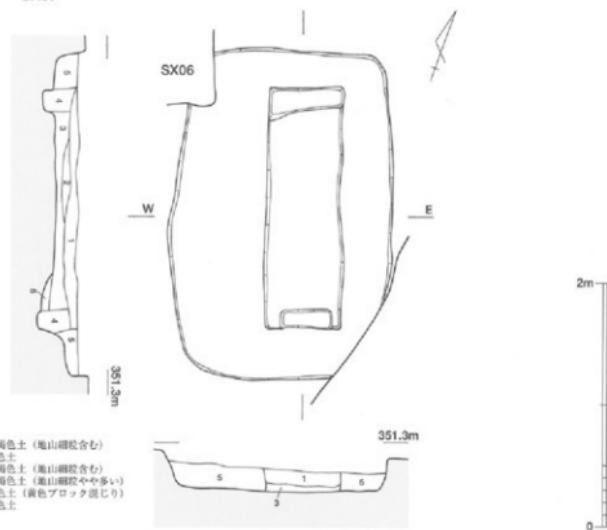


図版14 第3墳墓群 (SX06・07)

SX06



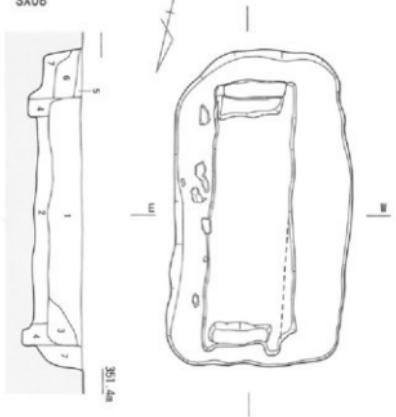
SX07



図版15 第3墳墓群 (SX08~11)

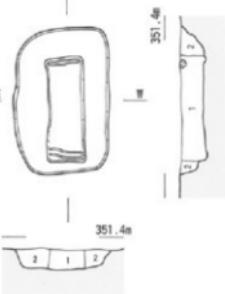
庵の谷遺跡

SX08



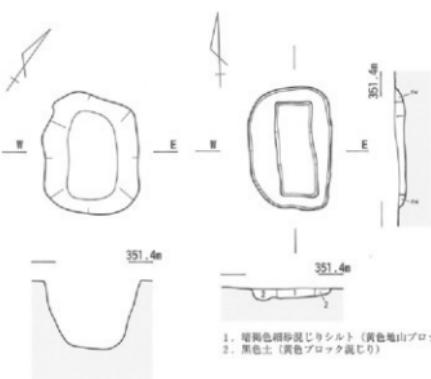
1. 黒褐色土 (地山細粒含む)
2. 駿河色土
3. 駿河色土 (地山黄色ブロック多い)
4. 黒色土
5. 黒褐色土
6. 黄褐色土
7. 黑褐色土 (黄色ブロック混じり)
8. 黒色土 (黄色ブロック混じり)
9. 黄色土 (黑色ブロック混じり)

SX10



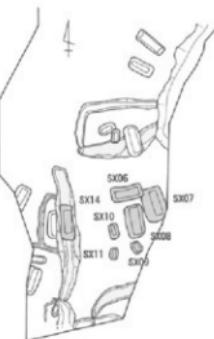
1. 黒褐色土 (黄色地山細粒含む)
2. 黒色土 (黄色ブロック混じり)

SX09



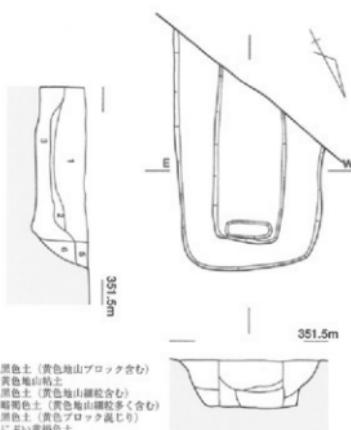
1. 駿河色細粒混じりシルト (黄色地山ブロック含む)
2. 黒色土 (黄色ブロック混じり)

SX11



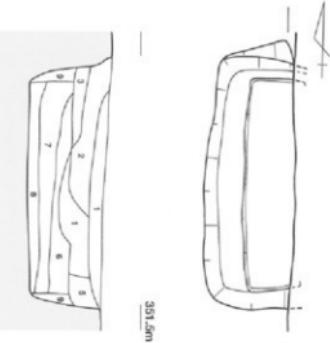
図版16 第3墳墓群(SX14)・第4墳墓群(SX12・13)

SX12



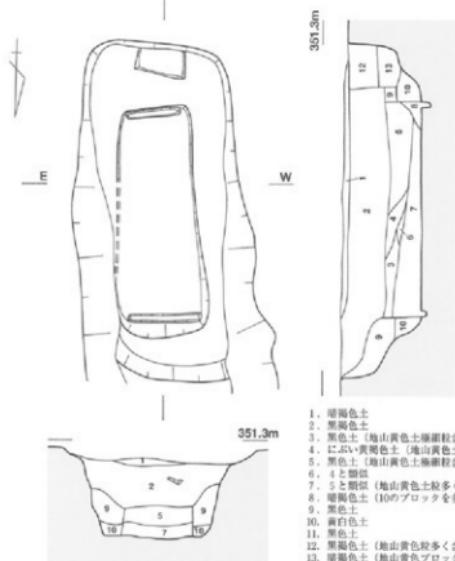
1. 黒色土（黄色地山ブロック含む）
2. 黄色地山粘土
3. 黑色土（黄色地山縫合含む）
4. 明褐色土（黄色地山縫合多く含む）
5. 黑色土（黄色ブロック混じり）
6. にい黄褐色土

SX13



1. 黒色土（地山小ブロック混じり）
2. 地山ブロック灰
3. 黑色土（地山ブロック混じり）
4. 黑色ブロック・地山ブロック
5. 地山ブロック（黑色土混じり）
6. 地山ブロック（黑色土混じり・黒色土多し）
7. 地山ブロック（黒色土混じり）
8. 明褐色中砂混じりシルト
9. 地山ブロック（黑色土粒混じり）

SX14

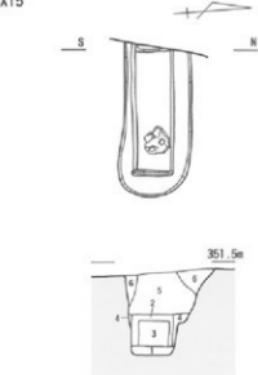


1. 暗褐色土
2. 黒褐色土
3. 黒褐色土（地山黄色土縫合含む）
4. にい黄色土（地山黄色土縫合多く含む）
5. 黑色土（地山黄色土縫合含む）
6. 4と隣接
7. 5と隣接（地山黄色土縫合多く含む）
8. 暗褐色土（10のブロックを多く含む）
9. 黑色土
10. 黄白色土
11. 黄褐色土
12. 黄褐色土（地山黄色土縫合多く含む）
13. 暗褐色土（地山黄色土縫合多く含む）
14. 黄白色土（しまり具）
15. 黑色土（地山黄色土縫合多く含む）
16. 黑色土

0 2m

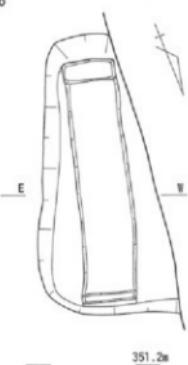
図版17 第4墳墓群 (SX15・16)

SX15

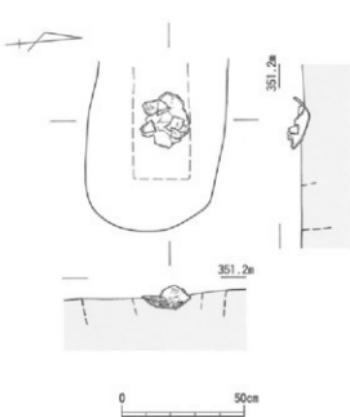


1. 淡褐色土
2. 黒褐色土 (地山面粒混じり)
3. 黒褐色～暗褐色土
4. 黑褐色～暗褐色土
5. 地山ブロック (黒色土ブロック混じり)
6. 褐色土 (地山面粒を少重含む)

SX16

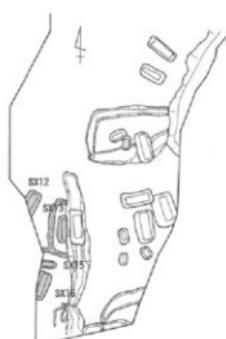


1. 黒色土 (黄色ブロック含む)
2. 黄色土ブロック・黑色土ブロック
3. 黄色土ブロック・黑色土ブロック
4. 黑色土 (黄色ブロック含む)
5. 黄色土ブロック・黑色土ブロック
6. 黑色土 (黄色ブロック少しある)
7. 6. 8類似 (やや褐色)
8. 黄褐色土 (黑色土ブロックわずかに含む)
9. 黑色土・黑色土
10. にじみ 黄褐色土
11. 黑色土
12. 暗褐色土
13. にじみ 黄褐色土



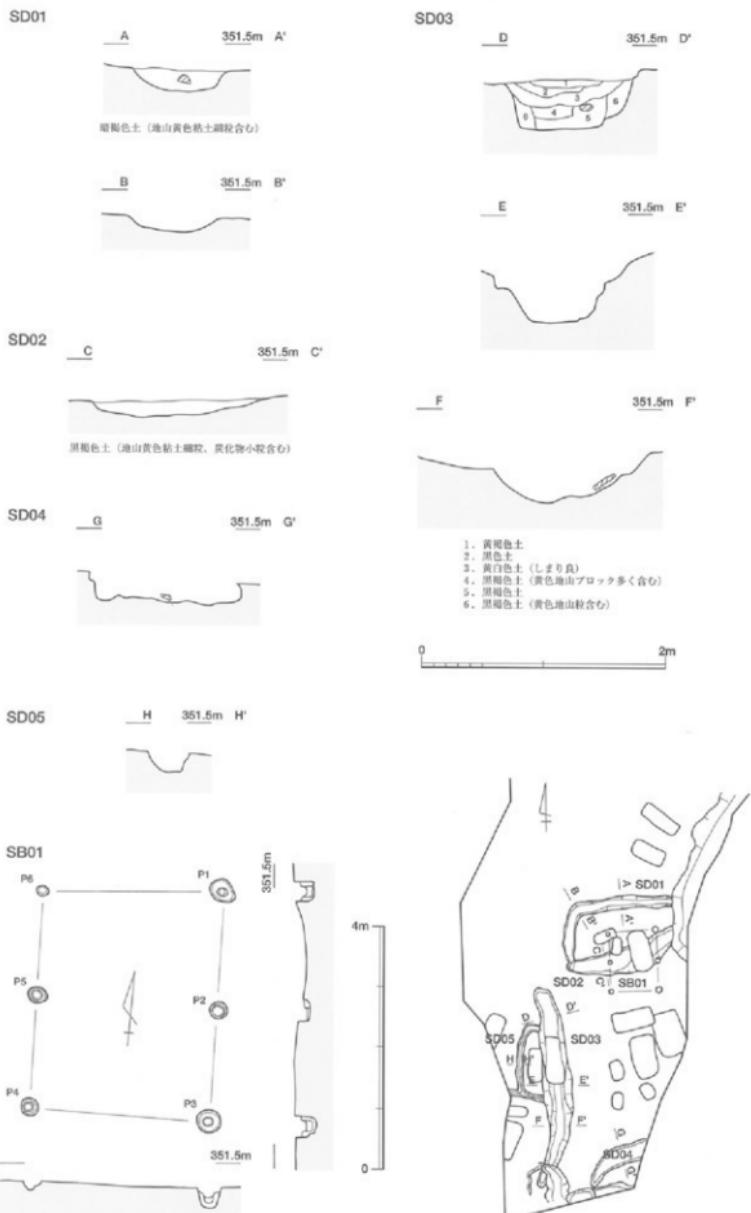
0 50cm

0 2m

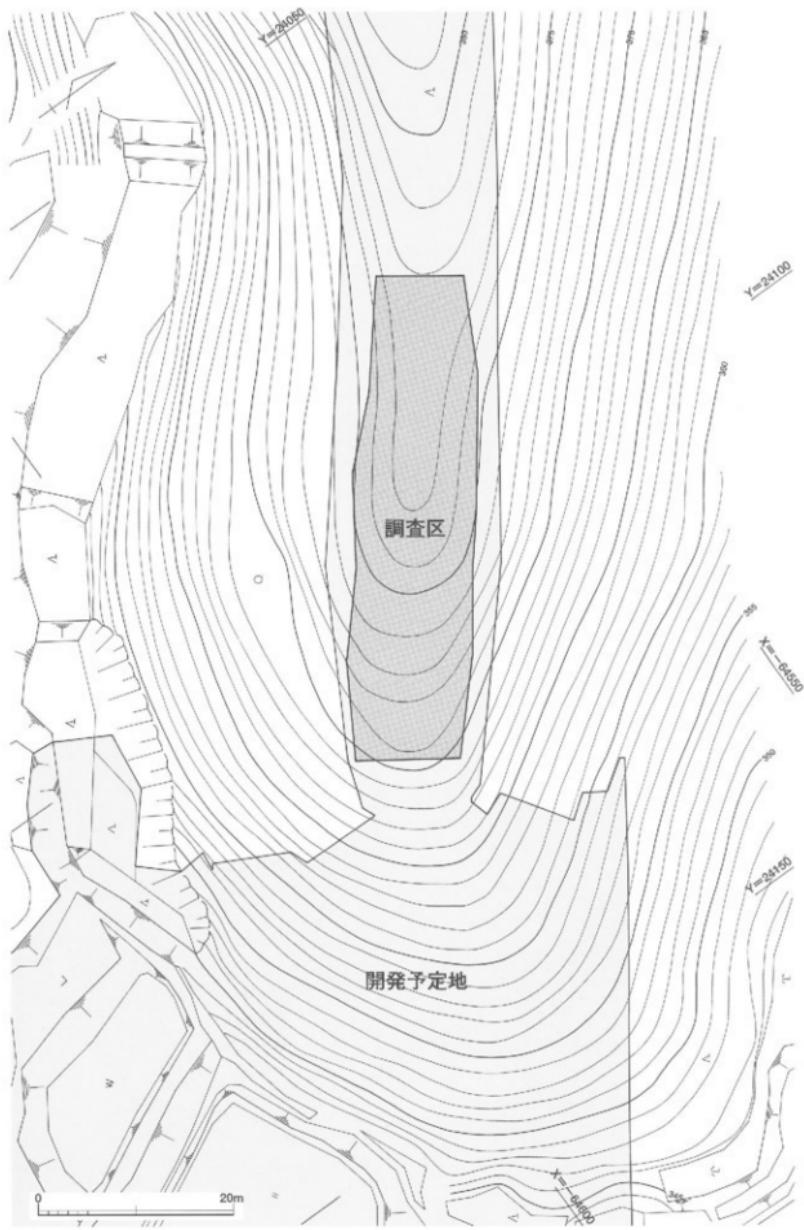


図版18 溝・堀立柱建物跡

庵の谷遺跡



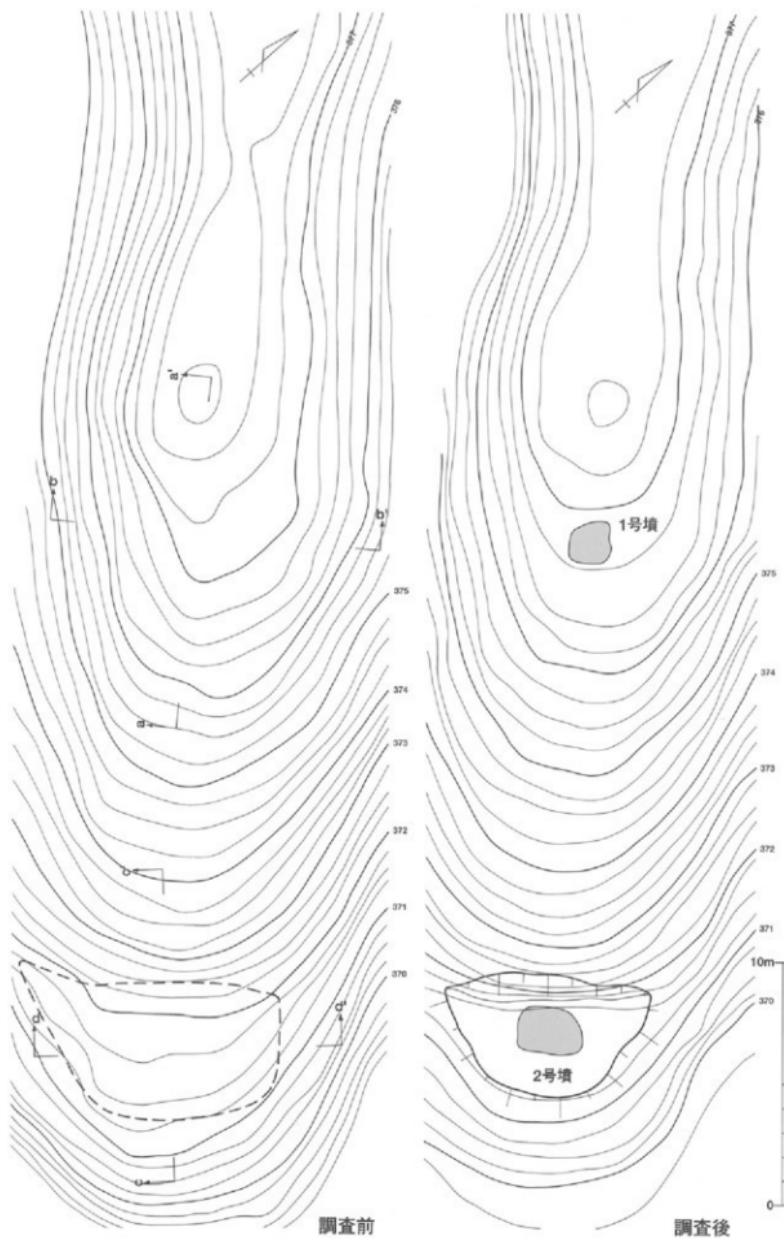
図版19 調査区位置図



大寺山古墳群

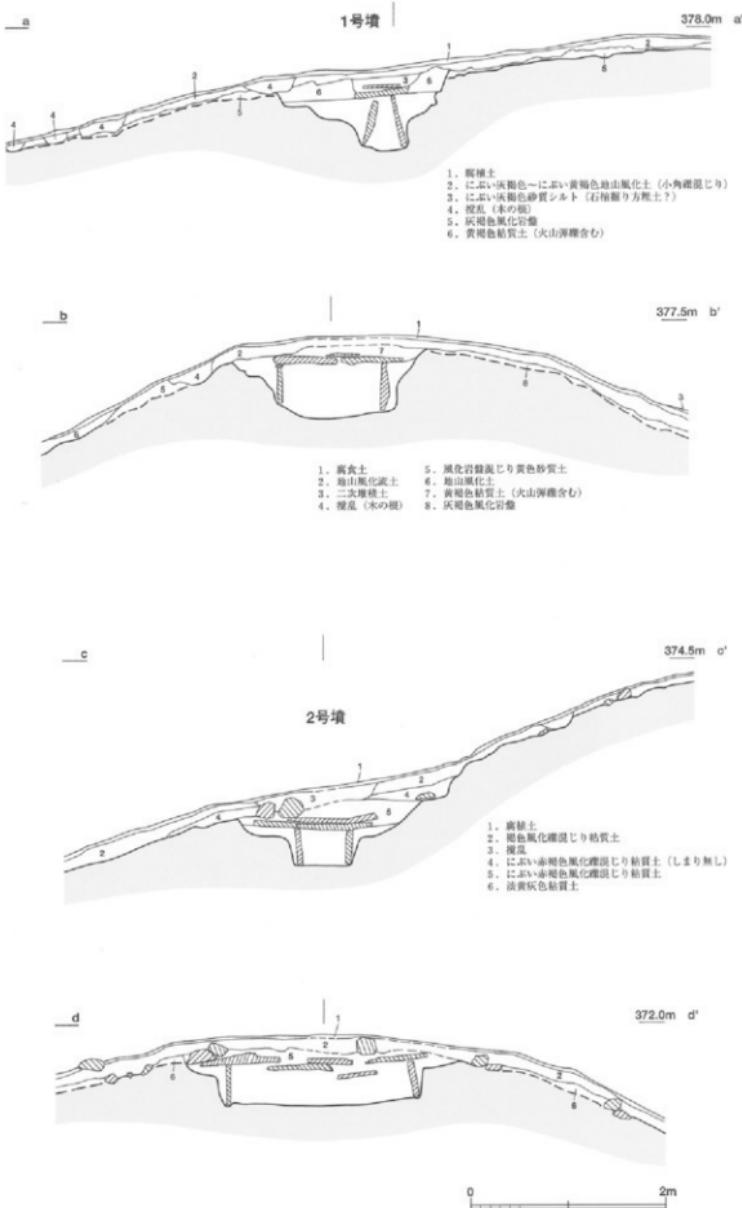
図版20 地形測量図

大寺山古墳群



図版21 墳丘断面図

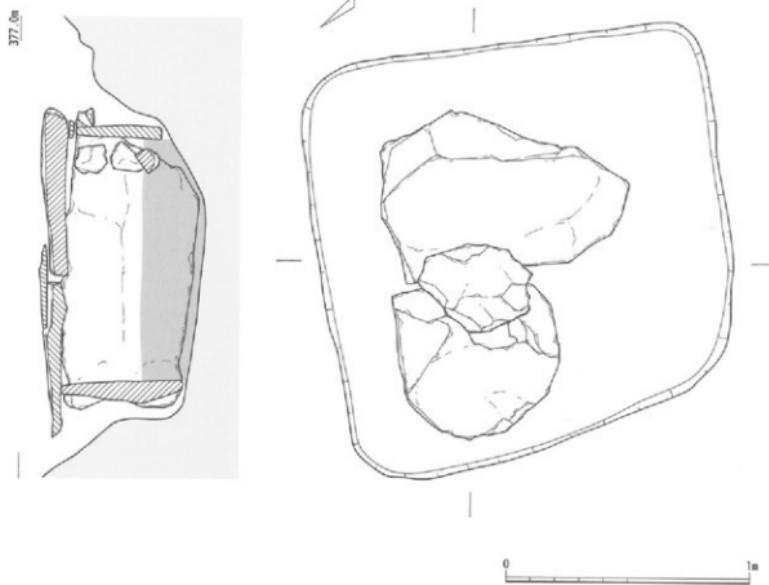
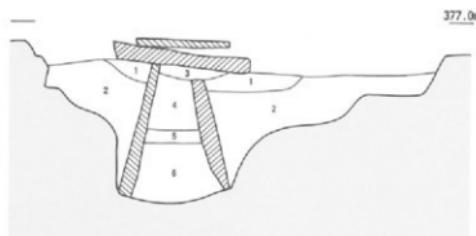
大寺山古墳群

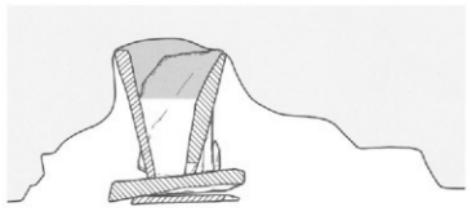
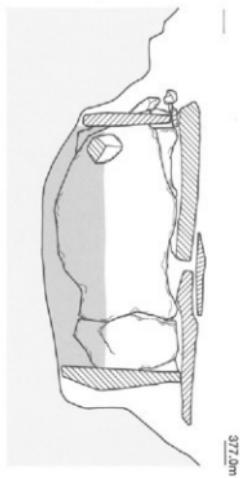
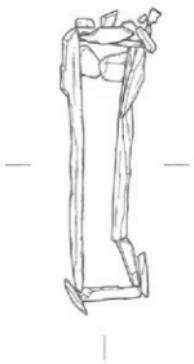
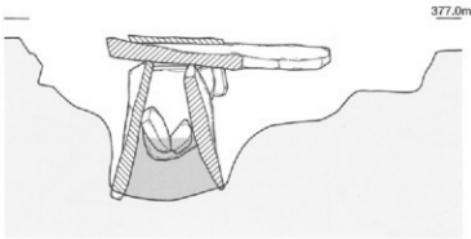


図版22 1号墳石棺(1)

大寺山古墳群

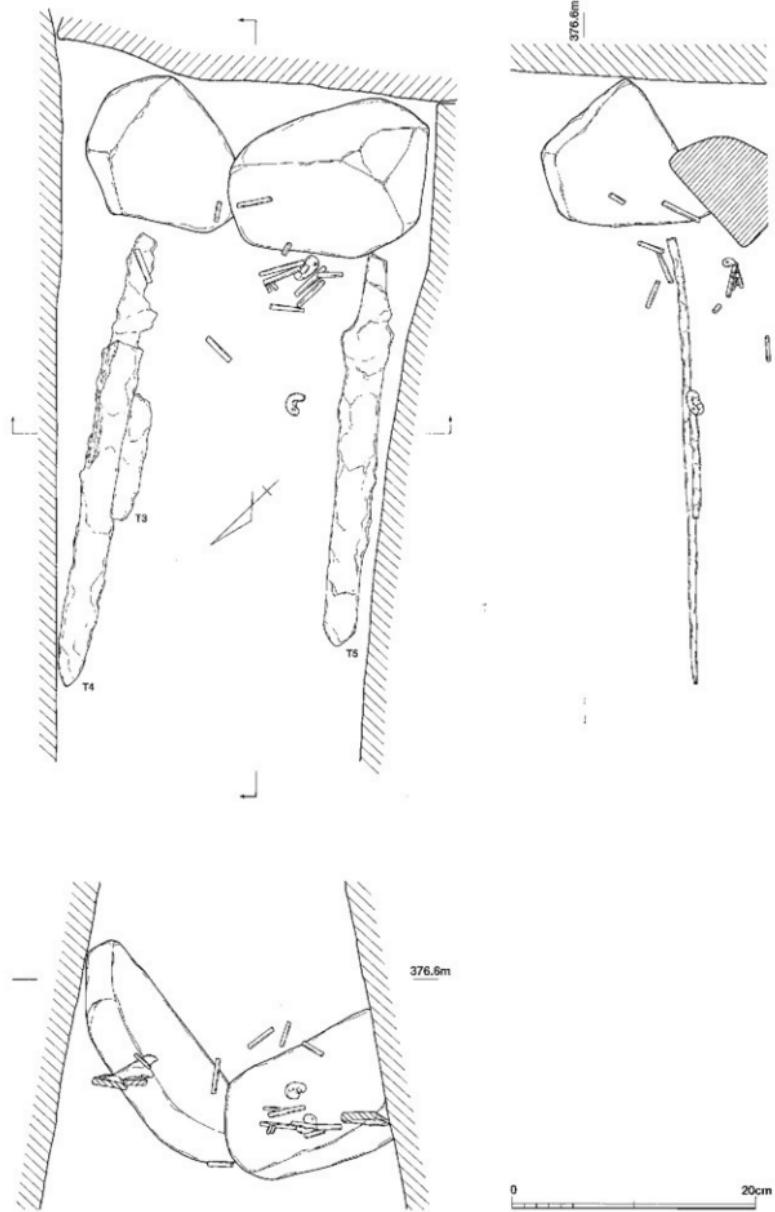
1. 黒褐色砂質土 (埴輪砂～中間含む)
2. 黑褐色砂質土 (埴輪砂～1より、しまりがある)
3. 黑褐色砂質土 (埴輪砂)
4. 棕色砂質土
5. 棕色砂質土 (4より、しまりがあり、やや白っぽい)
6. 棕色砂質土 (しまりあり)

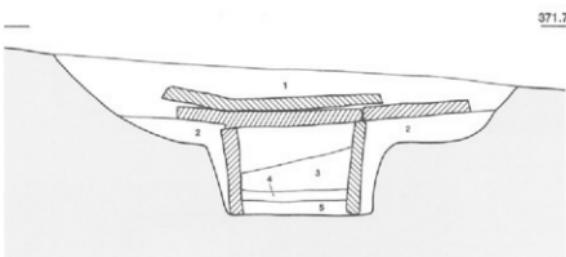
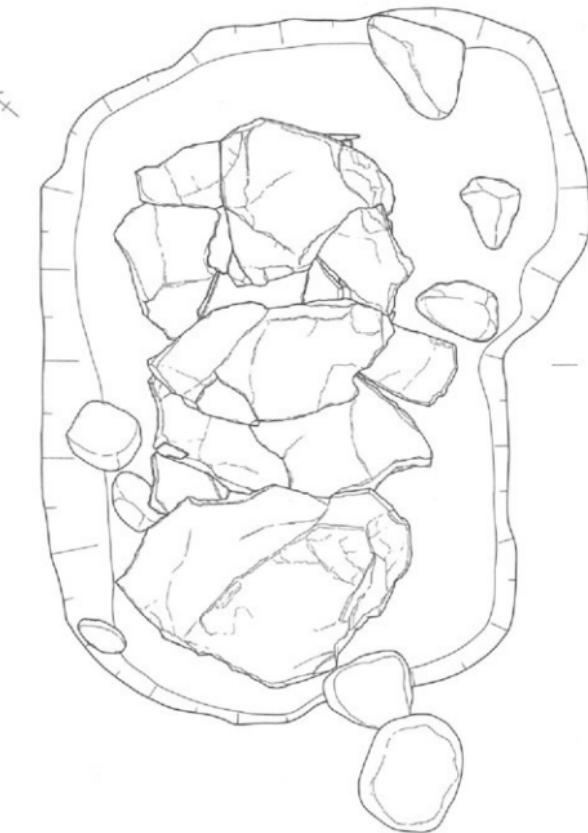




図版24 1号墳石棺内遺物出土状況

大寺山古墳群





1. にぶい赤褐色粘質土 (直徑1~10cmの龜山風化鱗片を多く含む)

2. 非變色粘質土

3. にぶい暗青褐色シルト質土 (粒状化し、しまり無し)

4. 黄褐色粘質土 (やせしまりあり 風化鱗片含む)

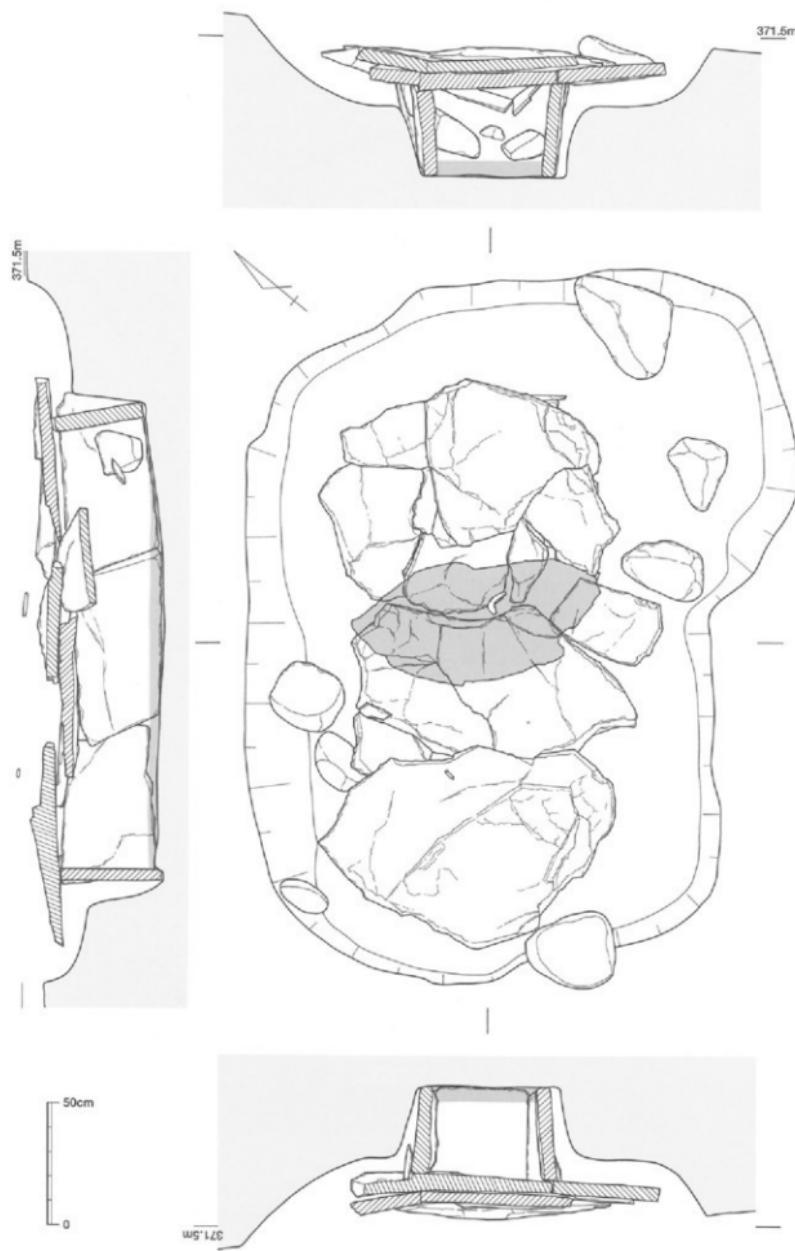
5. 黄褐色粘質土 (しまりあり)

0

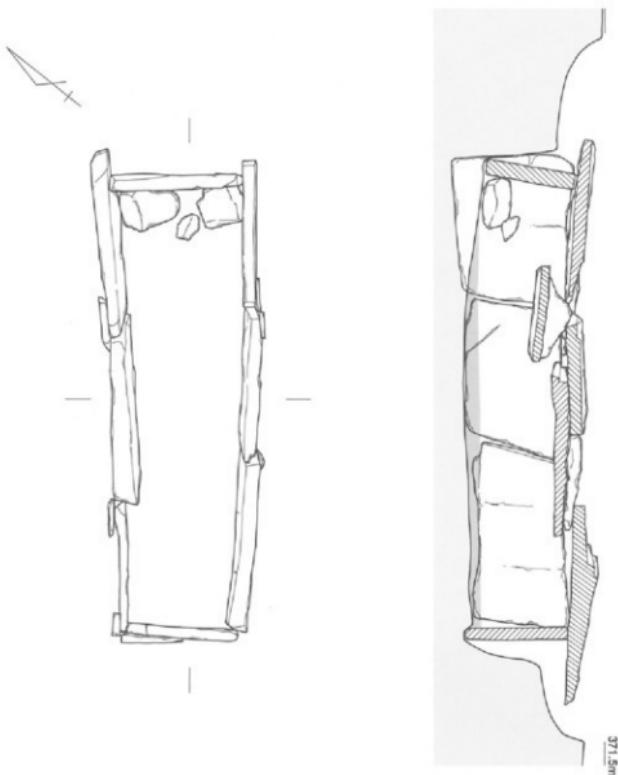
1m

図版26 2号墳石棺(2)

大寺山古墳群



図版27 2号墳石棺(3)

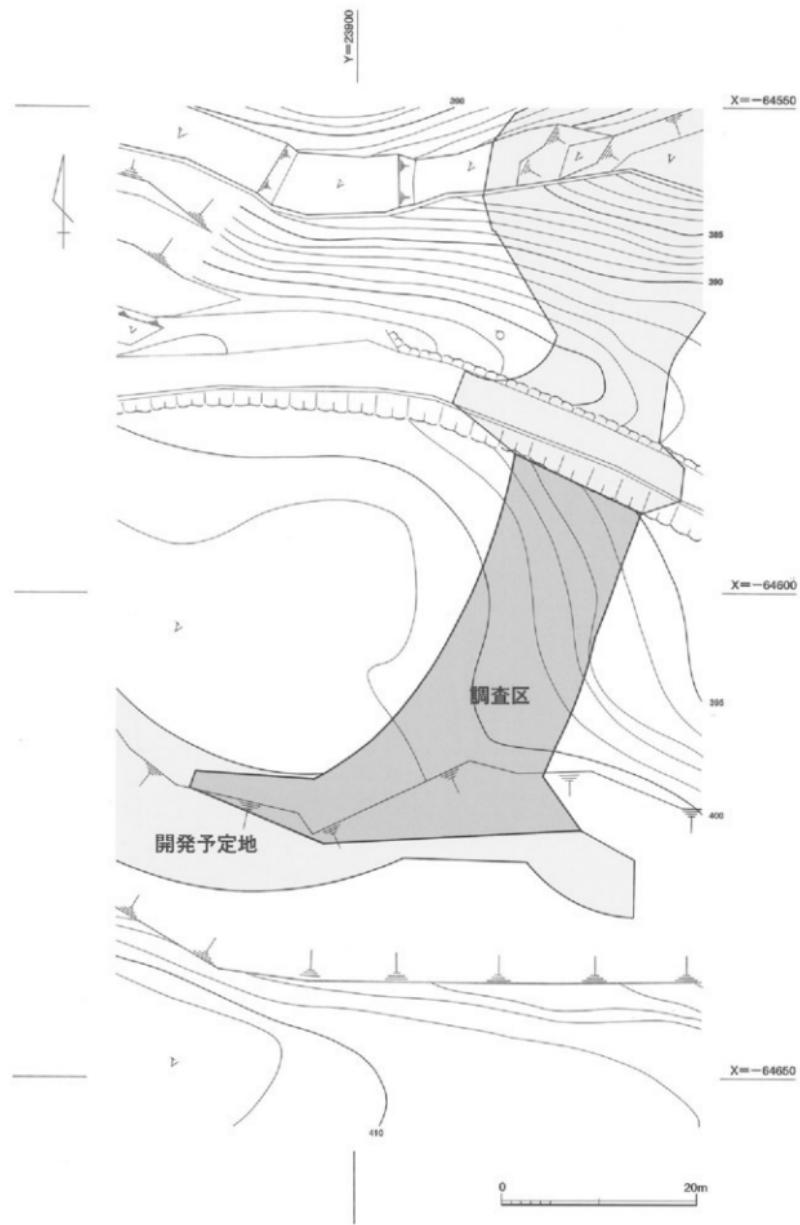


大寺山古墳群

0 1m

図版28 調査区位置図

小田池遺跡



図版29 遺構配置図

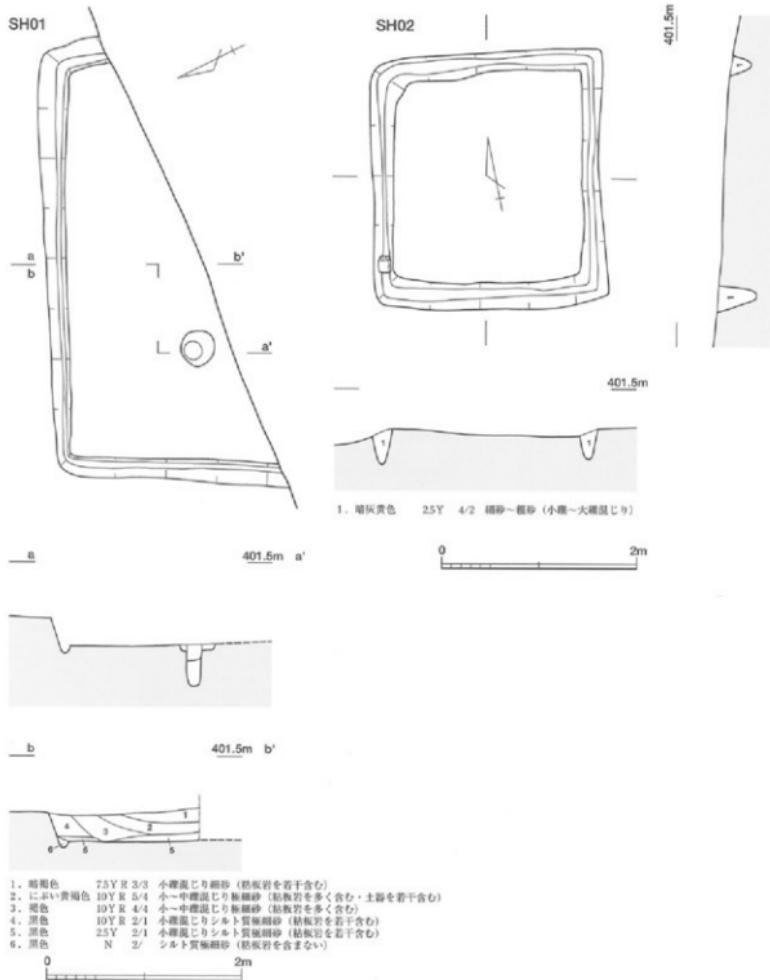


図版30 土層断面図(1)

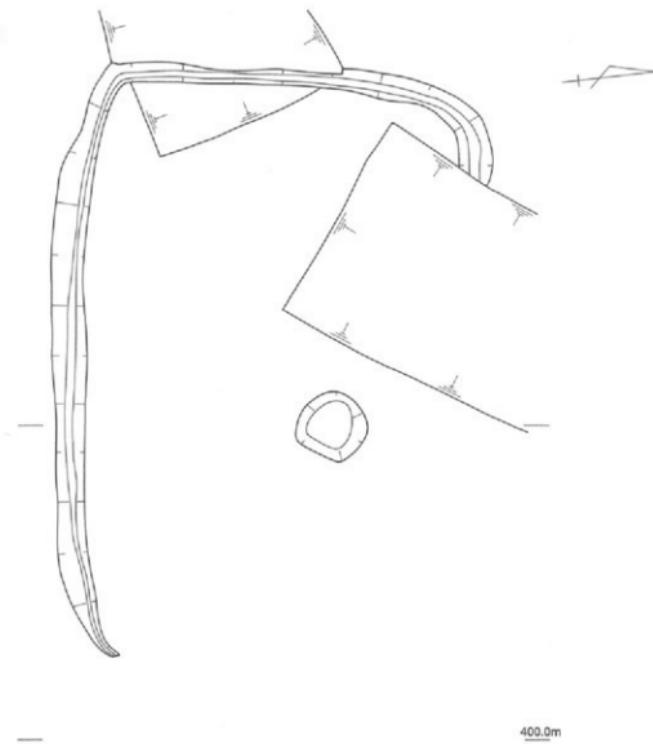


図版31 土層断面図(2)





SH04



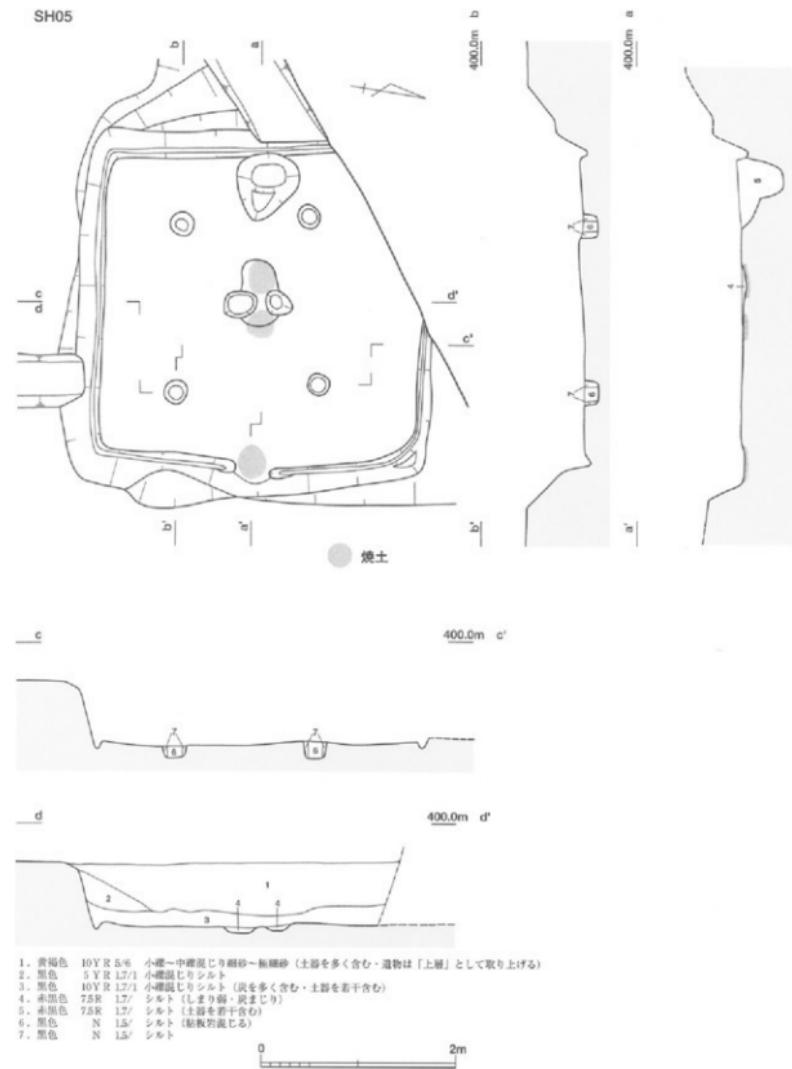
小田池遺跡

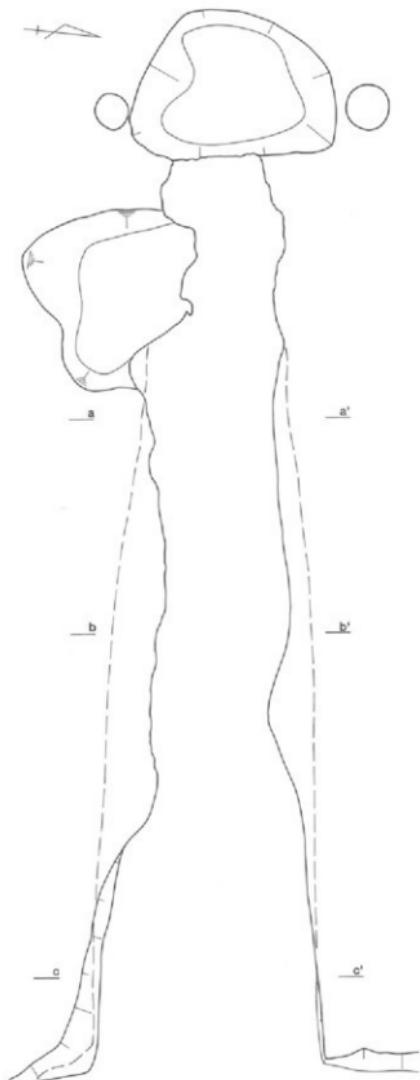


1. 黒褐色 75R 17/ シルト (クサレ岩を含む)
 2. 褐褐色 75Y R 3/3 シルト (クサレ岩を含む)

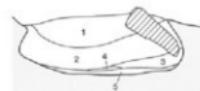


小田池遺跡



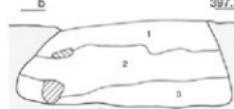


398.2m a'



1. 明赤褐色 25Y R 5/6 シルト質粘土砂（窯壁小片混じる）
 2. にぶい赤褐色 10Y R 5/4 シルト質粘土砂（窯壁小片多い）
 3. にぶい黄褐色 5Y R 5/4 粘土～砂岩帶
 4. 黄褐色 25Y 5/4 砂岩（窯壁小片がほどんど）
 5. オリーブ褐色 5Y 3/1 粘土質シルト（武が多い）

397.7m b'



1. 明褐色 75Y R 5/8 粘土質砂質シルト（粘性）
 2. にぶい黄褐色 10Y R 5/4 シルト質粘土砂（しまり面・バヤバサ・窯壁多い）
 3. 赤褐色 25Y R 4/6 粘土～砂岩 壁化（窯壁片若干乱じる）

396.9m c'

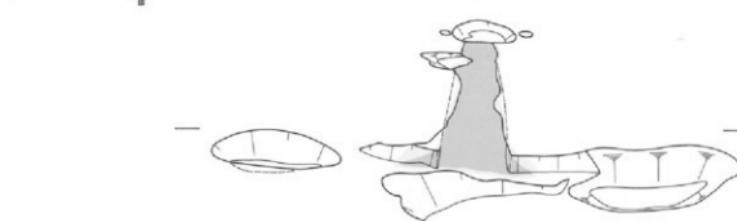
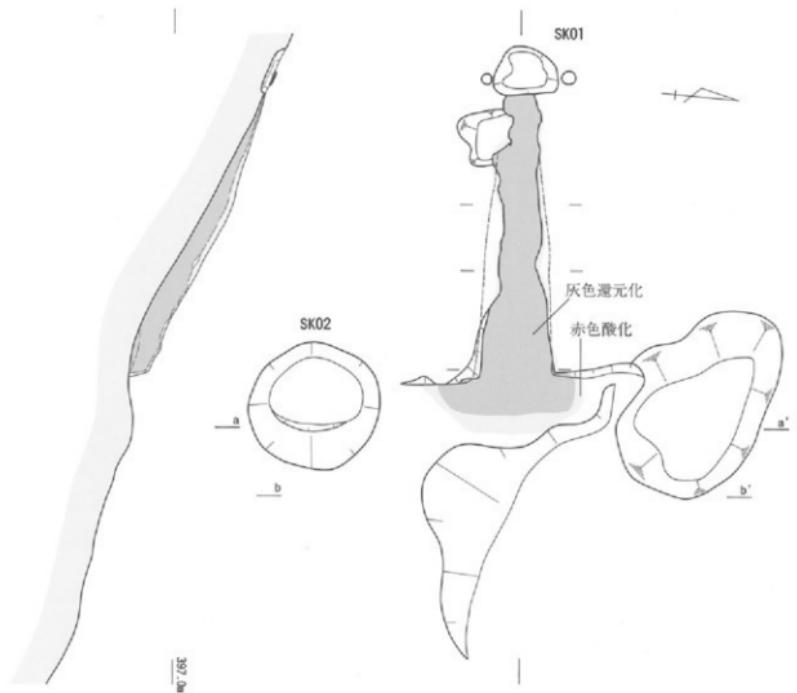


1. 明黄色 10Y R 6/6 シルト質粘土砂
 2. にぶい黄褐色 10Y R 5/4 シルト質粘土砂（窯壁片を含む）
 3. にぶい黄褐色 10Y R 5/3 粘土～シルト質粘土砂（窯壁片を多く含む）
 4. 黄褐色 10Y R 5/1 砂岩～粘土（しまり強）
 5. 黄褐色 10Y R 5/1 砂岩～粘土（しまり強）
 6. 明黄色 10Y R 7/1 砂岩混粘土砂

0 1m

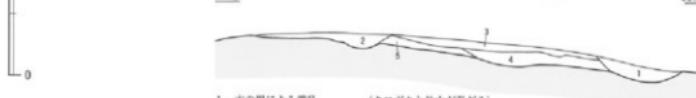
図版36 小田池窯 全体図(1)

小田池遺跡

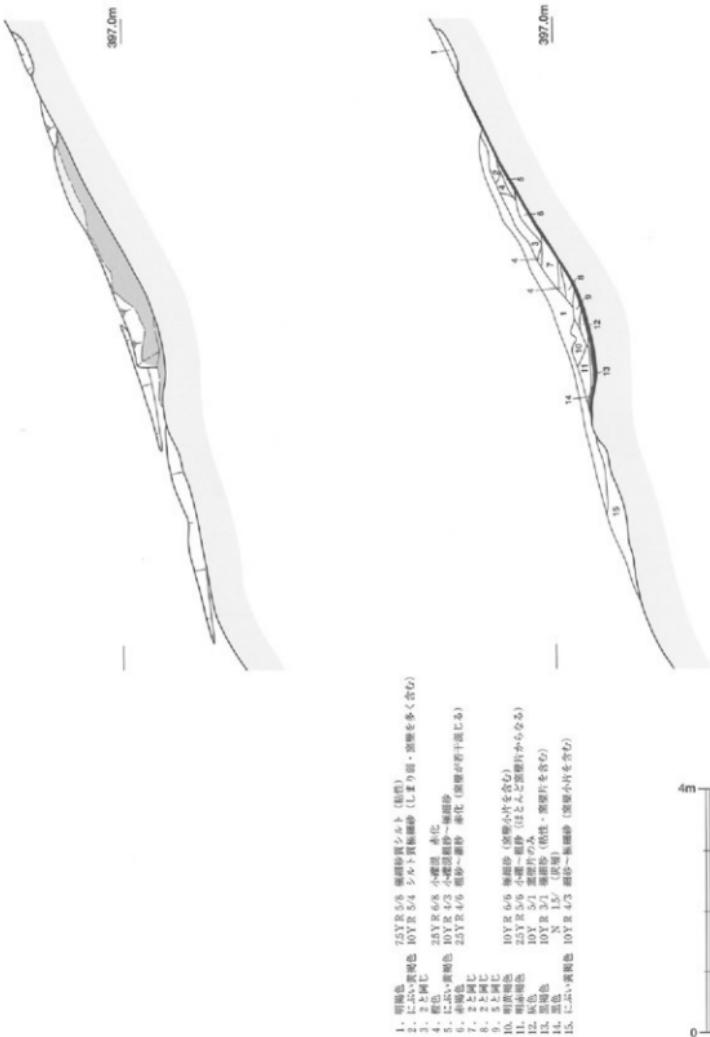


1. 黒色 7.5Y R 4/6 滅細砂 (黒壁片を若干含む)
 2. オリーブ黒色 5Y 3/1 粗砂～細砂 (灰・黒壁片多い・土器含む)
 3. にごり黄褐色 10Y R 4/2 シルト質粗細砂 (灰・黒壁片混じる)
 4. 黒色 N 1.5/1 黄褐色

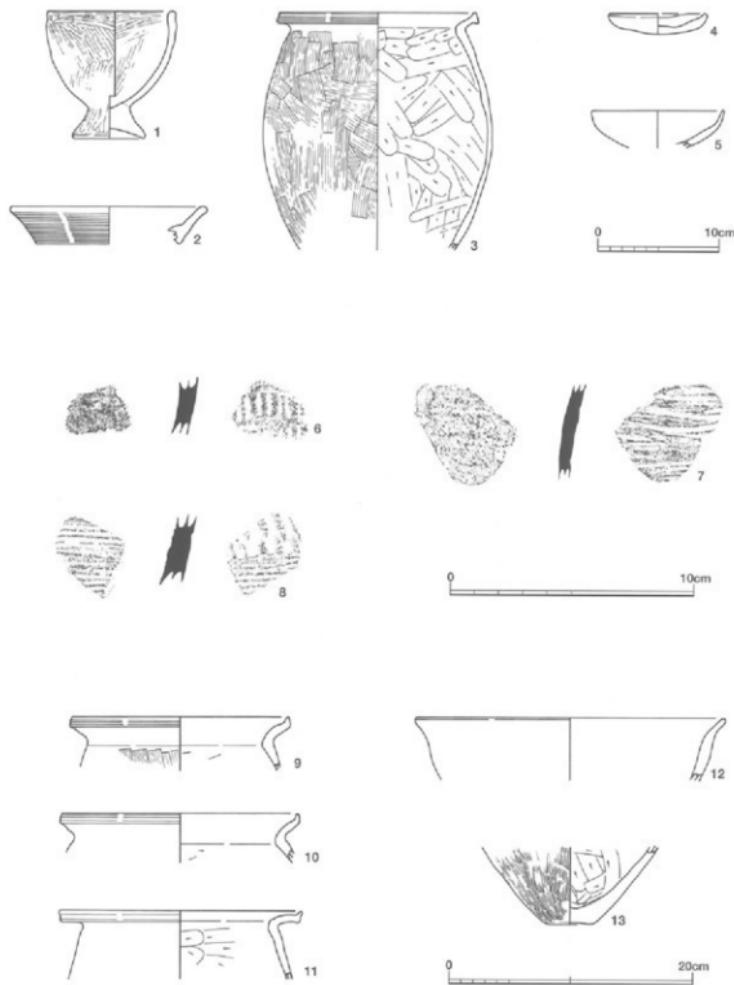
5. 棕色 7.5Y R 6/6 滅細砂 (黒り底)
 6. 棕色 7.5Y R 4/3 滅粗砂 (灰・黒壁片混じる)
 7. 4と同上



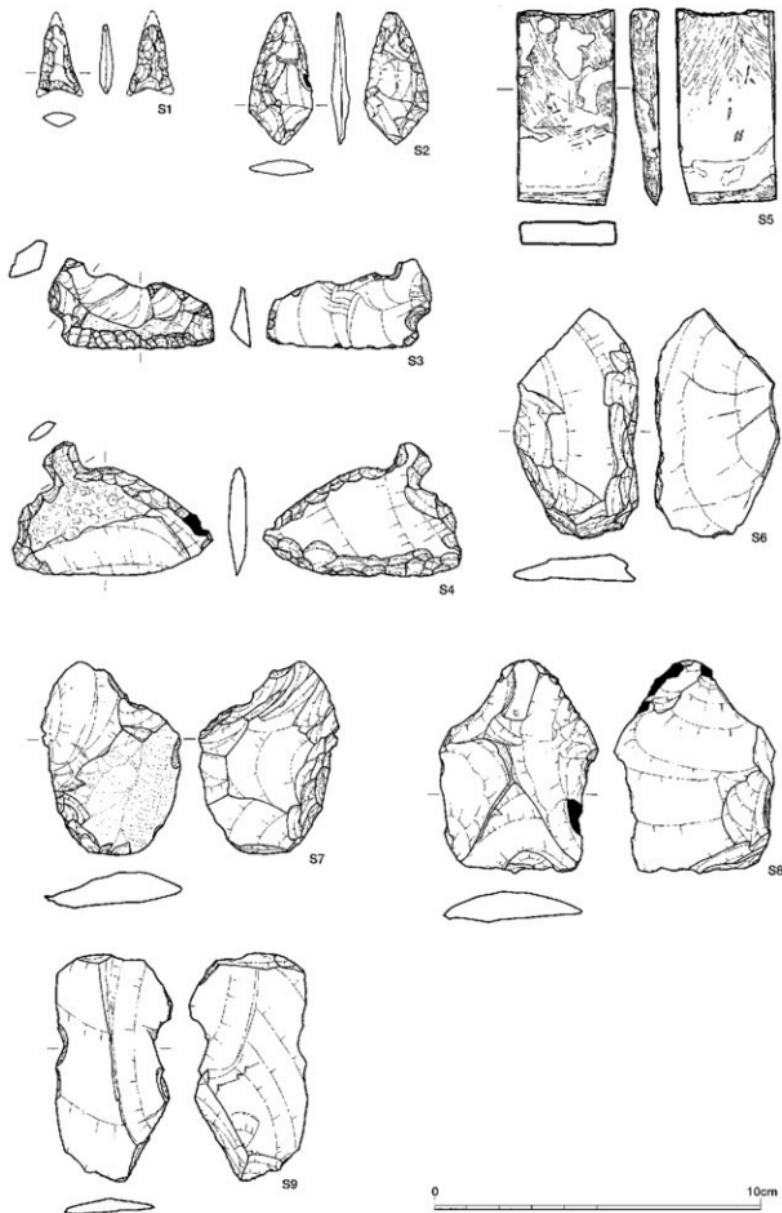
1. 木の根による掘孔 (クロボクと地山が混ざる)
 2. オリーブ黒色 7.5Y 3/1 粗砂～細砂 (灰・黒壁片多い・土器含む)
 3. 黒色 7.5Y R 4/6 滅細砂 (黒壁片を若干含む)
 4. 2と同じ
 5. 棕色 7.5Y R 6/8 地山? シルト質粗細砂



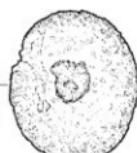
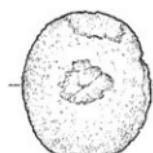
図版38 筒井遺跡 出土土器



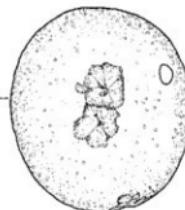
図版39 筒井遺跡 出土石器(1)



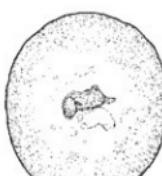
図版40 筒井遺跡 出土石器(2)



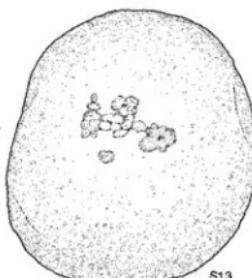
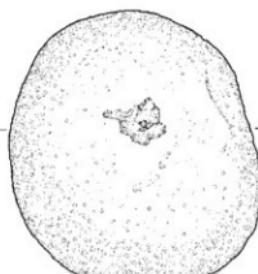
S10



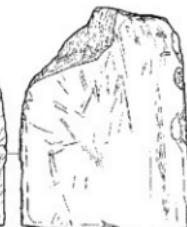
S11



S12



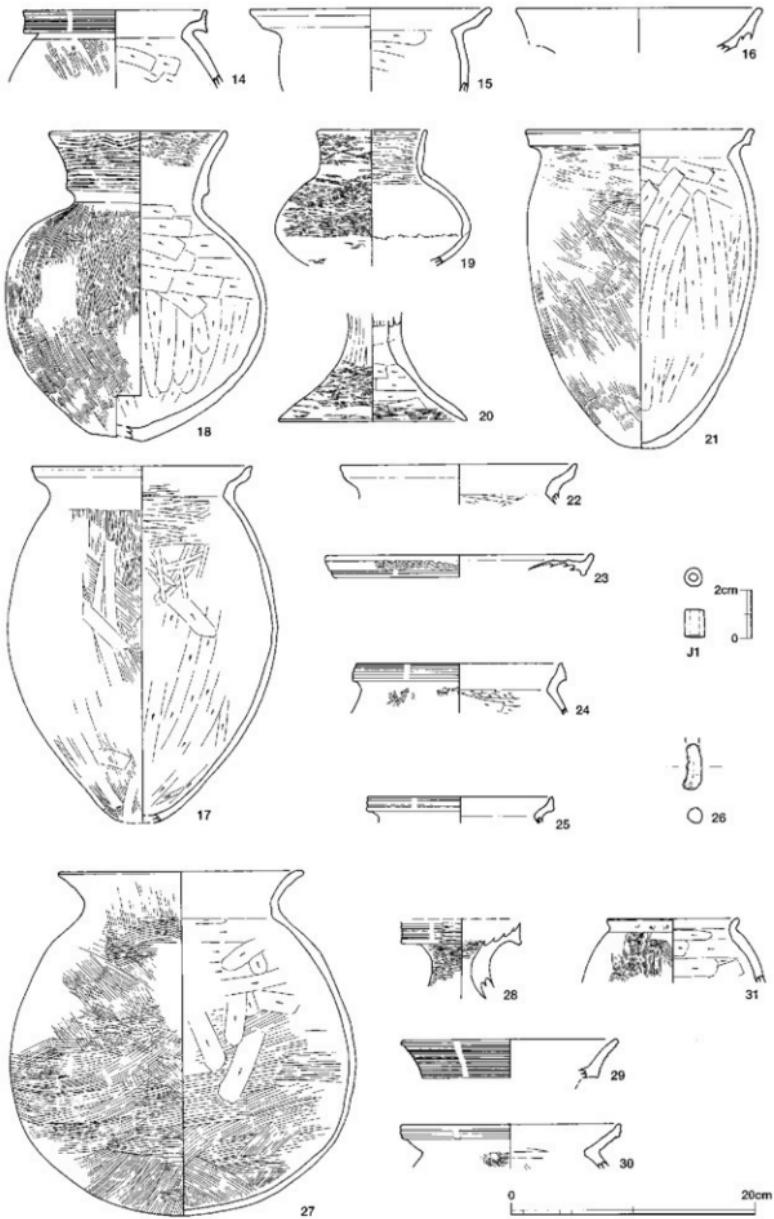
S13



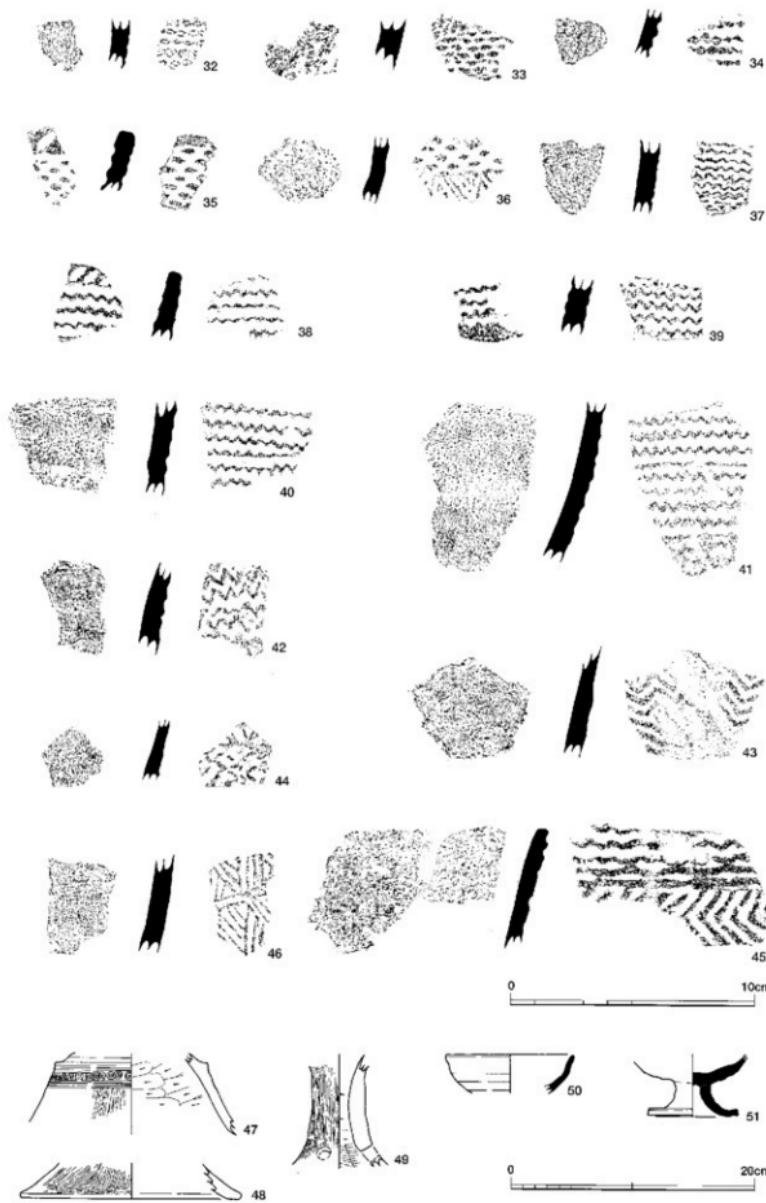
S14



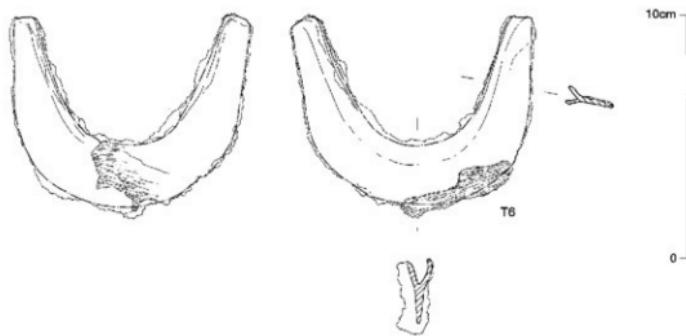
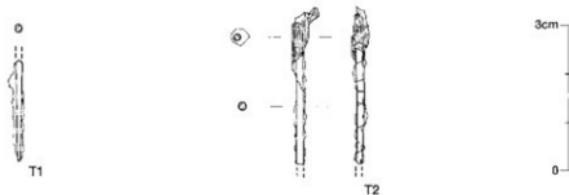
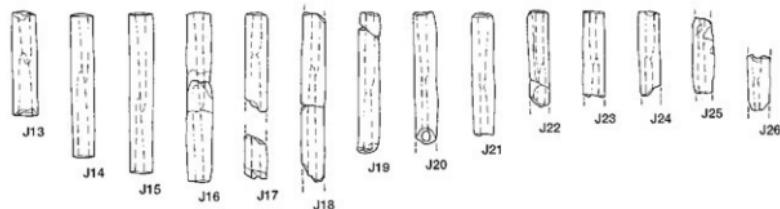
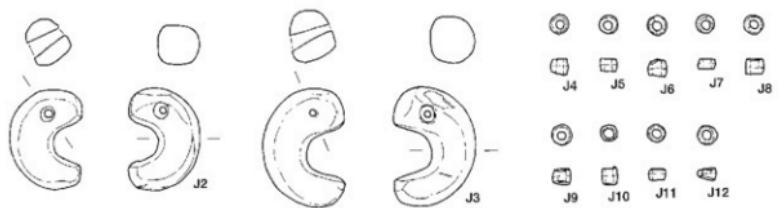
図版41 廬の谷遺跡 出土土器・玉



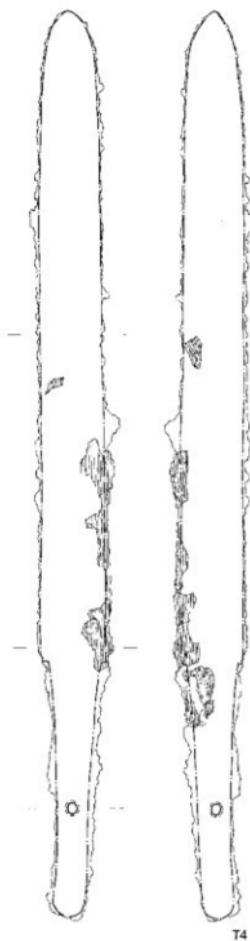
図版42 庵の谷遺跡 出土土器



図版43 大寺山古墳群 出土玉類・鉄器



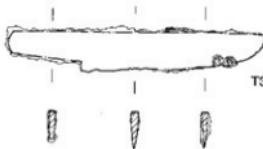
図版44 大寺山古墳群 出土鉄器



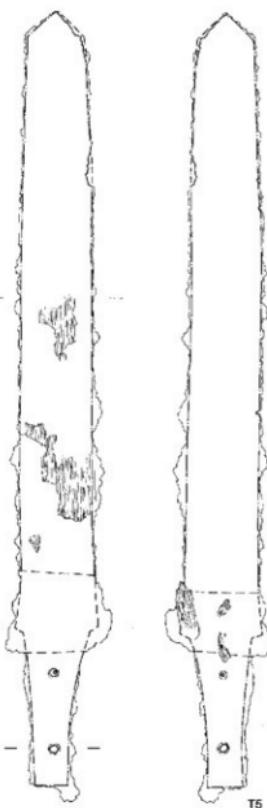
T4



□-□



T3



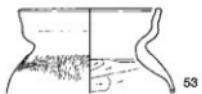
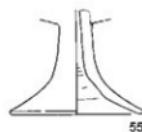
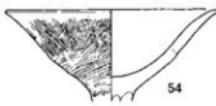
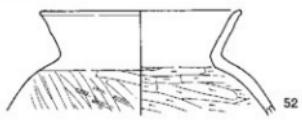
T5



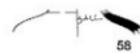
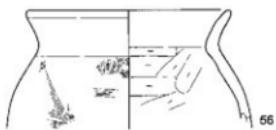
□-□

10cm
0

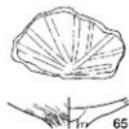
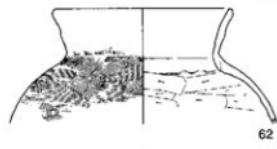
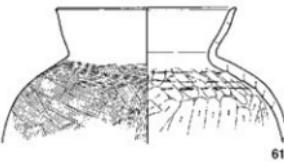
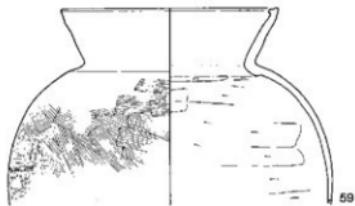
SH01



SH04



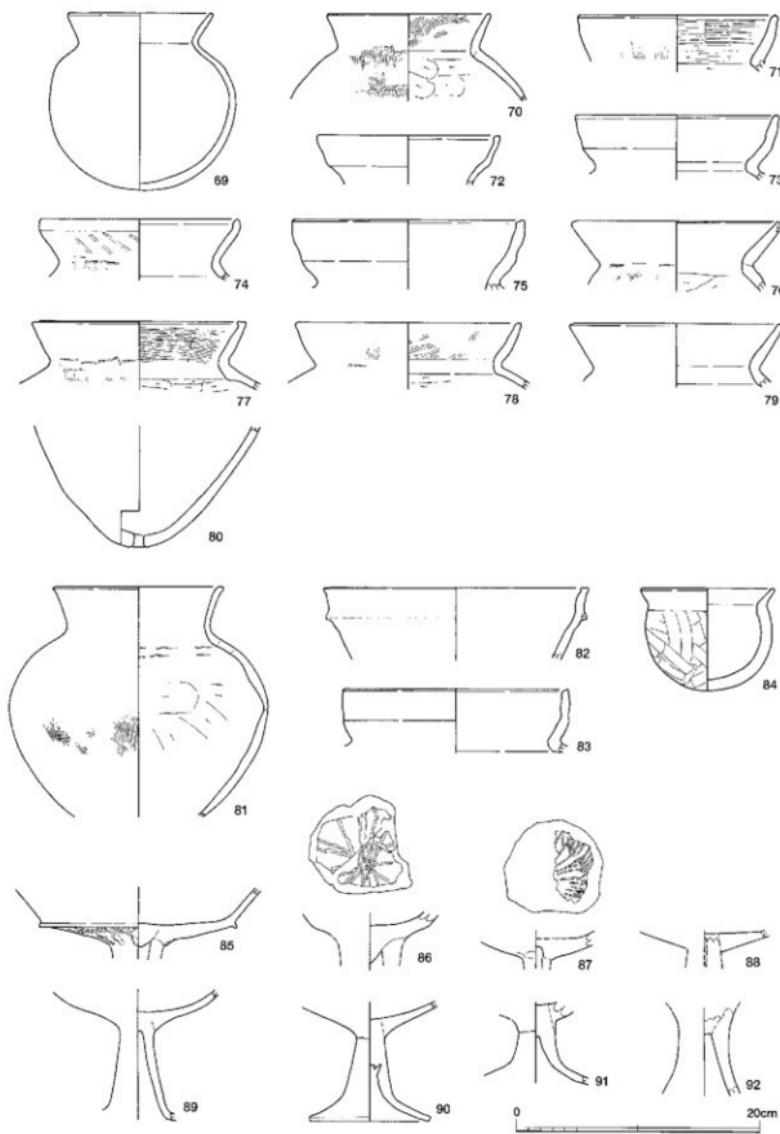
SH05



0 20cm

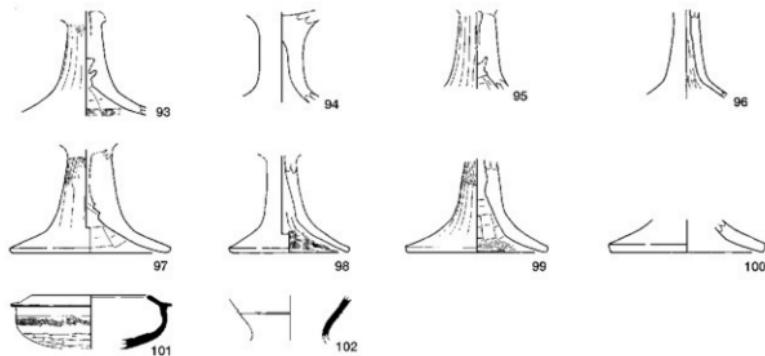
図版46 小田池遺跡 出土土器(2)

包含層

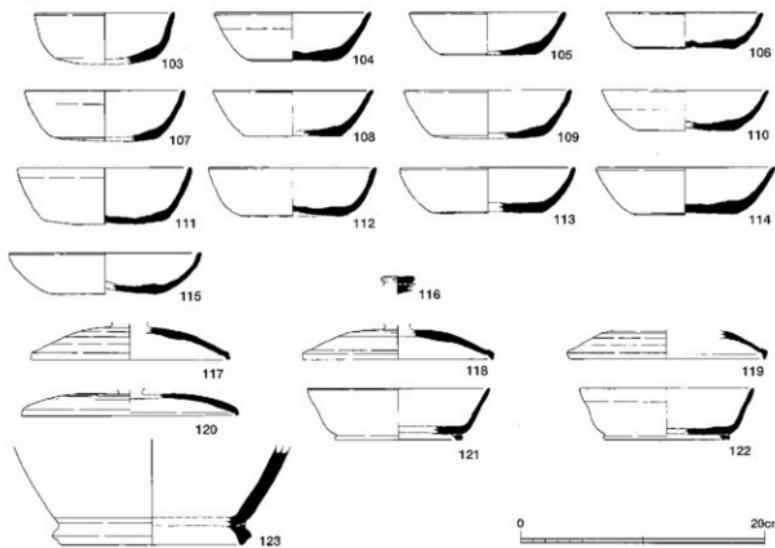


図版47 小田池遺跡 出土土器(3)

包含層



小田池窯



写 真 図 版



1. 遠景（南から）



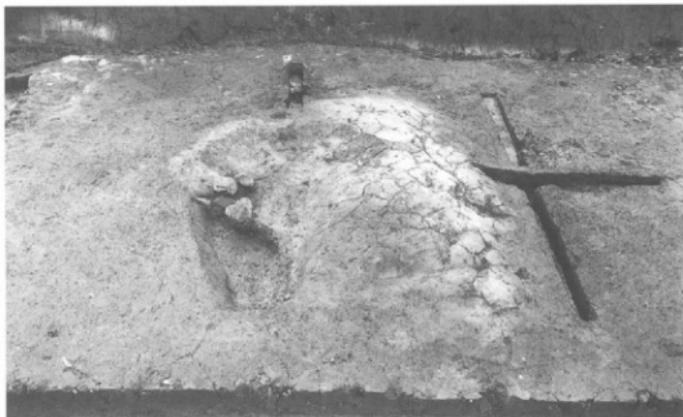
2. 遠景（南東から）



1. B区 全景（北東から）



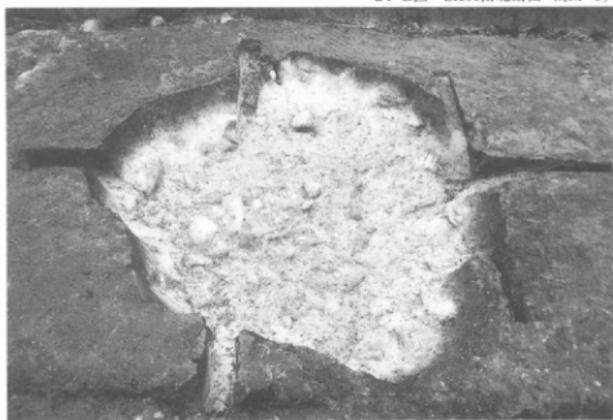
2. A区 全景（南東から）



1. B区 SK01検出状況（東から）



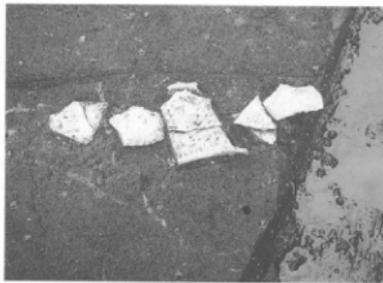
2. B区 SK01南北断面（東から）



3. B区 SK01完掘状況（東から）



1. B区 弥生時代遺構面全景（東から）



2. B区 SD01弥生土器出土状況（南から）



3. B区 焼土断面（東から）



4. B区 SD02断面（東から）



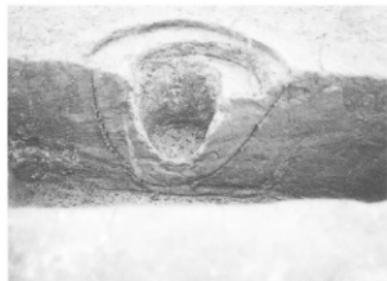
5. B区 東壁



1. C区 中世遺構面全景



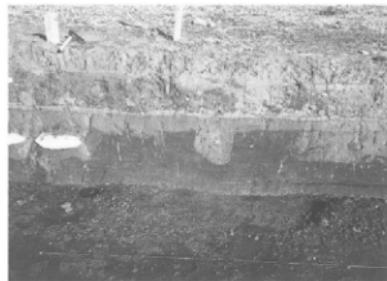
2. C区 SB01柱穴土器器皿出土状況



3. C区 柱穴断面



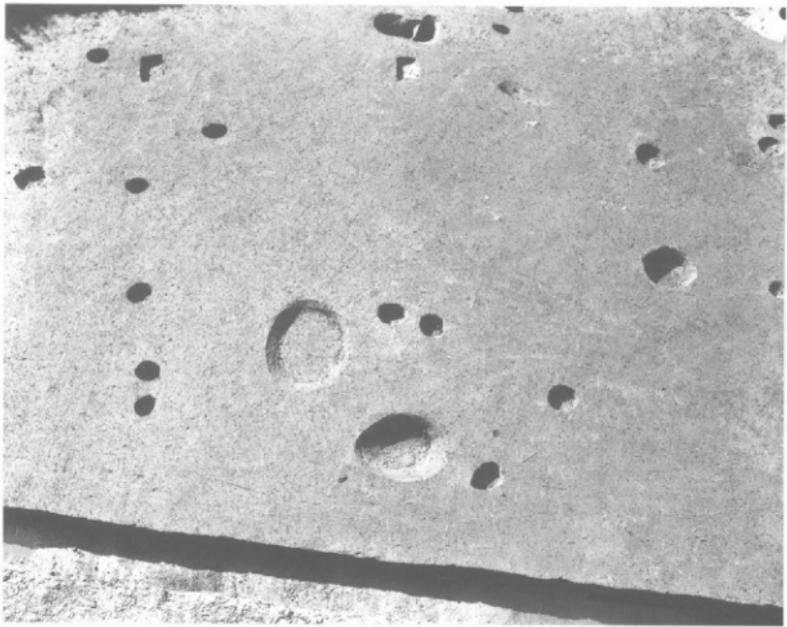
4. C区 東壁（北西から）



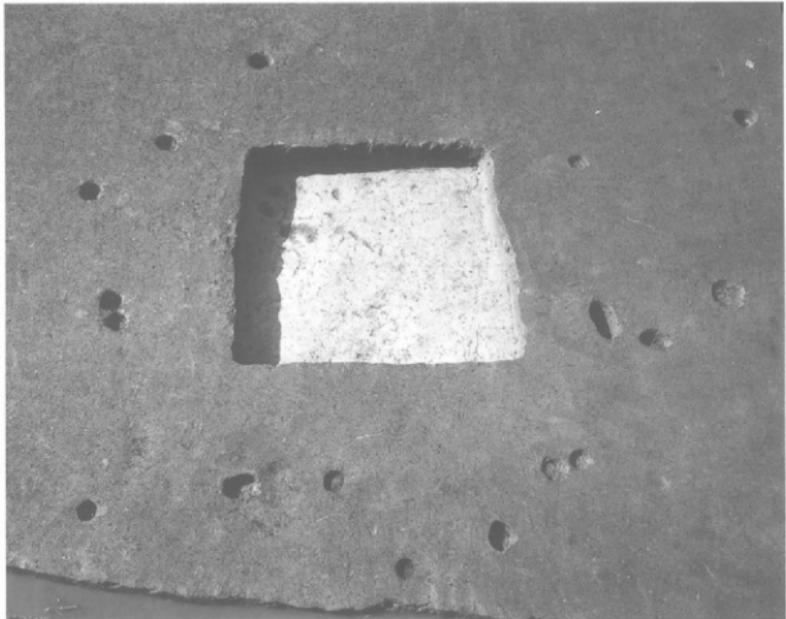
5. C区 東壁部分（西から）



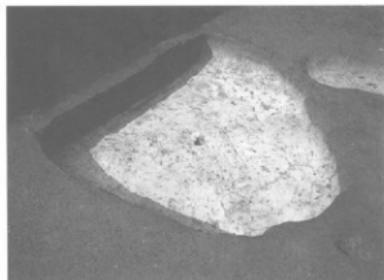
1. C区 神文時代遺構面全景（北から）



2. C区 SH02（東から）



1. C区 SH01 (東から)



2. C区 SK02完掘状況 (南東から)



3. C区 SK02断面 (南東から)



4. C区 ピット断面



5. C区 ピット断面



1. 墳墓群検出状況（北から）



2. 墳墓群全景（北から）



1. 第2墳墓群検出状況（北から）



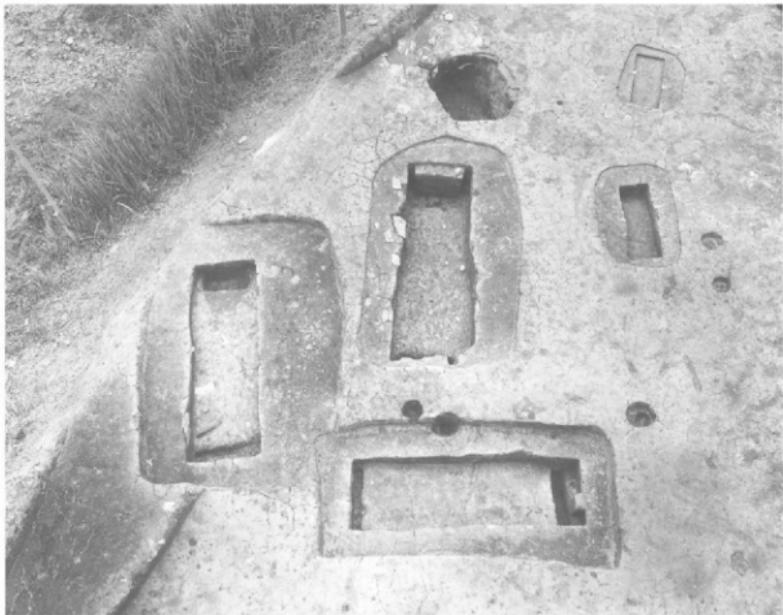
2. 第2墳墓群全景（北から）



1. 第2墳墓群検出状況（西から）



2. 第2墳墓群全景（西から）



1. 第3墳墓群全景（北から）



2. 第3墳墓群全景（西から）



1. 第4 墓群全景（北東から）



2. 第4 墓群全景（北から）



3. 第4 墓群全景（西から）



1. 第4墳墓群周辺調査状況（南東から）



2. 第4墳墓群周辺調査状況（北西から）



3. 第4墳墓群周辺調査状況（南東から）



4. 第4墳墓群周辺調査状況（南から）



5. 第4墳墓群周辺調査状況（東から）



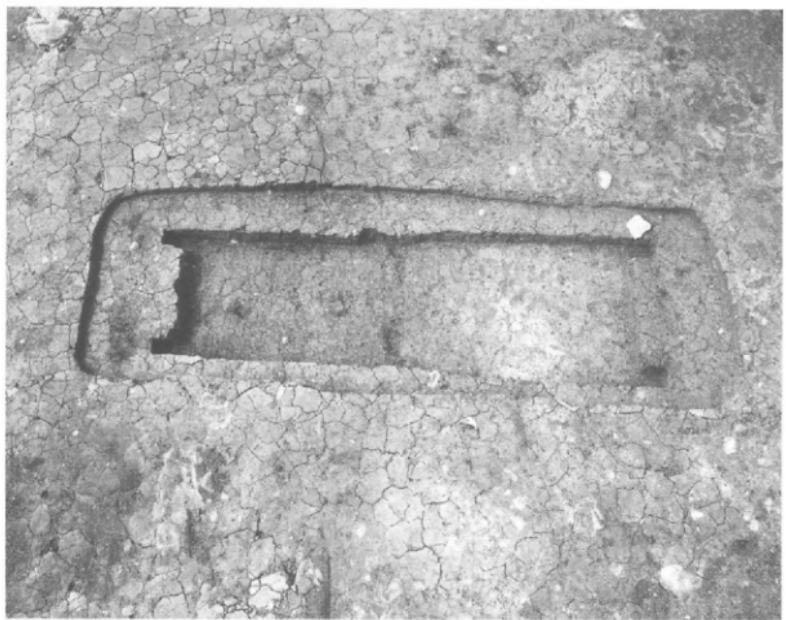
6. 第4墳墓群周辺調査状況（東から）



1. 第1墳墓群 SX01木棺検出状況（北西から）



2. 第1墳墓群 SX01（北西から）



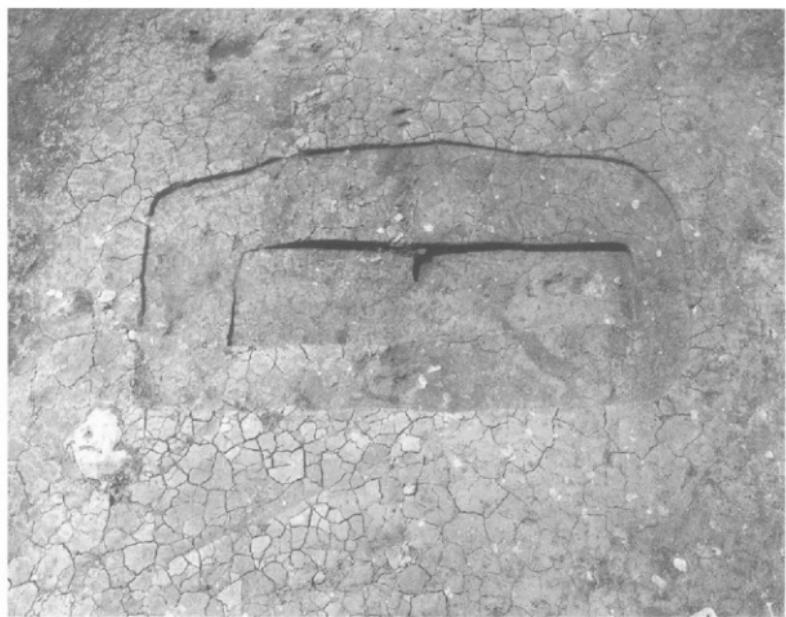
3. 第1墳墓群 SX01（北東から）



1. 第1墳墓群 SX02木棺検出状況（北東から）



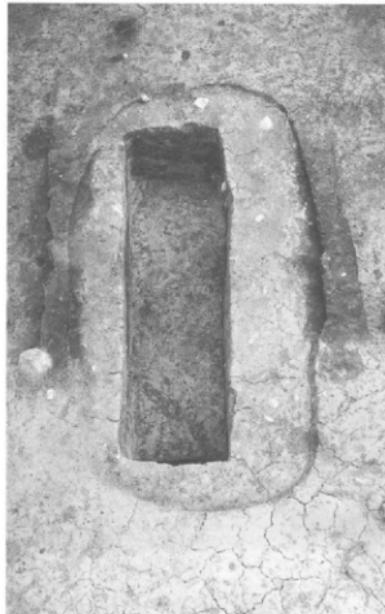
2. 第1墳墓群 SX02（南西から）



3. 第1墳墓群 SX02（北西から）



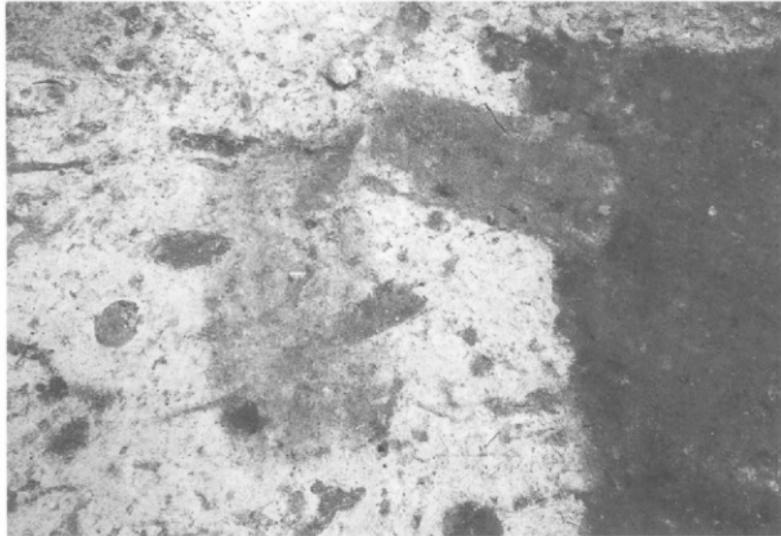
1. 第2墳墓群 SX03木棺検出状況（北から）



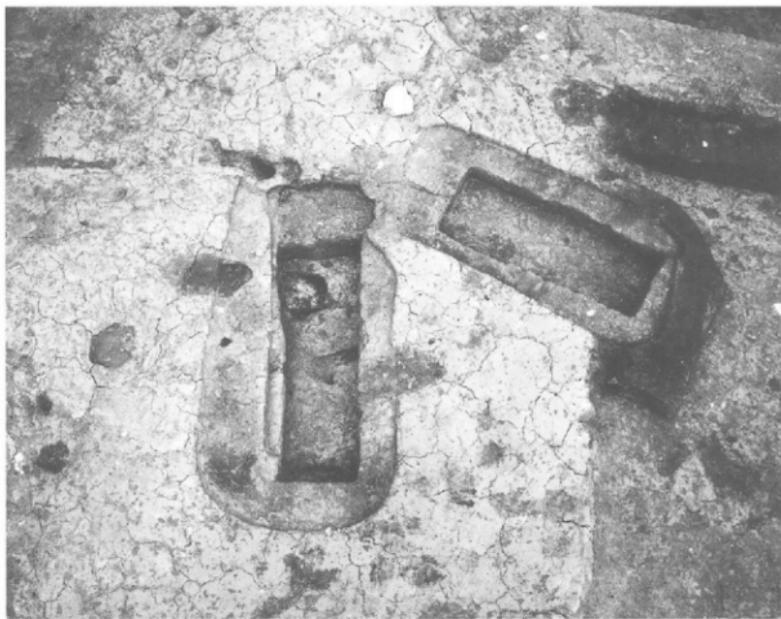
2. 第2墳墓群 SX03（北から）



3. 第2墳墓群 SX03（西から）



1. 第2 墓群 SX04、SX05木棺検出状況（西から）



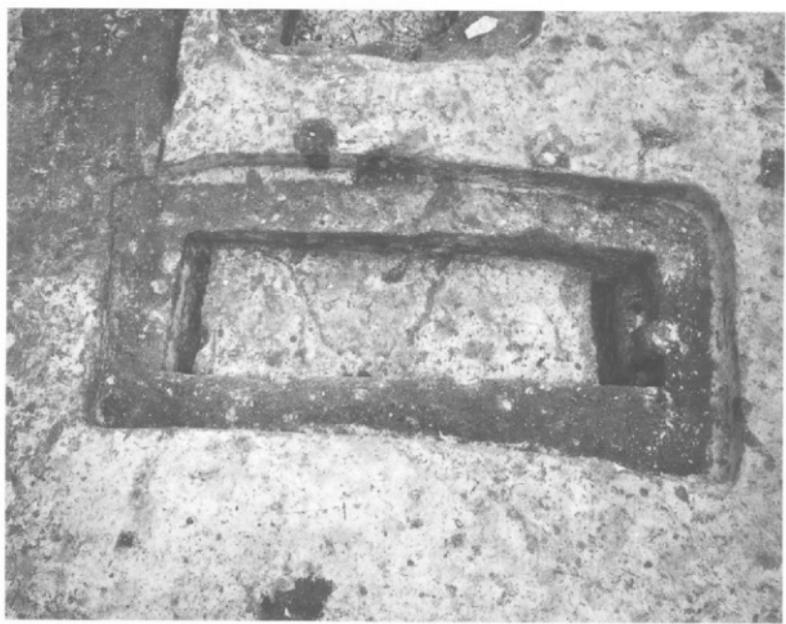
2. 第2 墓群 SX04、SX05（西から）



1. 第3墳墓群 SX06木棺検出状況（西から）



2. 第3墳墓群 SX06（西から）



3. 第3墳墓群 SX06（北から）



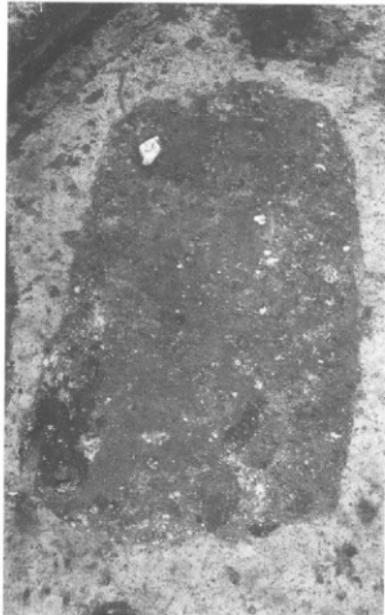
1. 第3墳墓群 SX07木棺検出状況（西から）



2. 第3墳墓群 SX07（北から）



3. 第3墳墓群 SX07（西から）



1. 第3墳墓群 SX08木棺検出状況（北から）



2. 第3墳墓群 SX08 (北から)



3. 第3墳墓群 SX08 (西から)



1. SX03棺内横断面（北から）



2. SX03棺内縦断面北半（西から）



3. SX04棺内横断面（南から）



4. SX05棺内横断面（西から）



5. SX06棺内縦断面（南から）



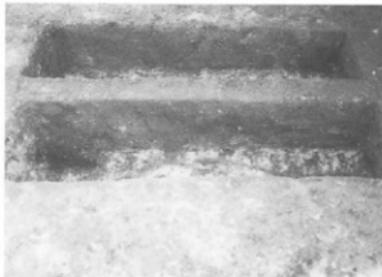
6. SX06棺内横断面（西から）



7. SX06棺内縦断面西側小口板（南から）



8. SX06棺内縦断面東側小口板（南から）



1. SX07棺内縦断面北半（西から）



2. SX07棺内縦断面南半（西から）



3. SX07棺内横断面（南から）



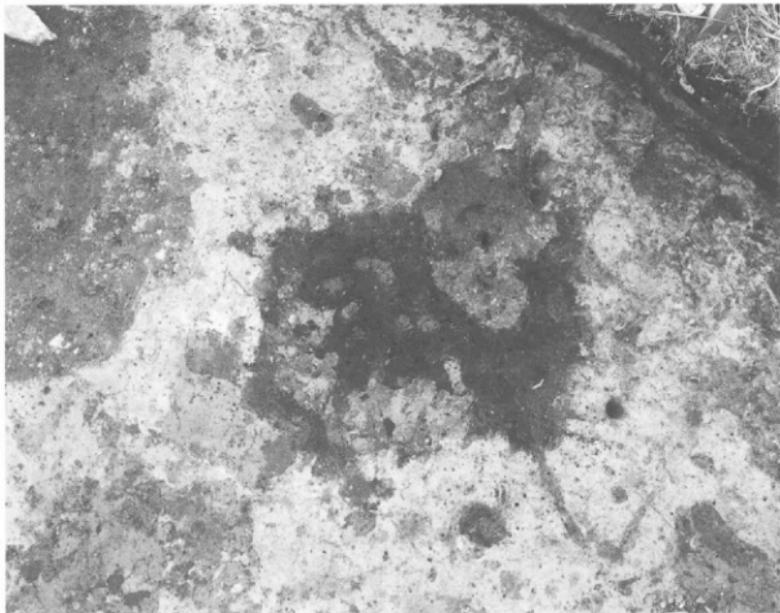
4. SX08棺内横断面（北から）



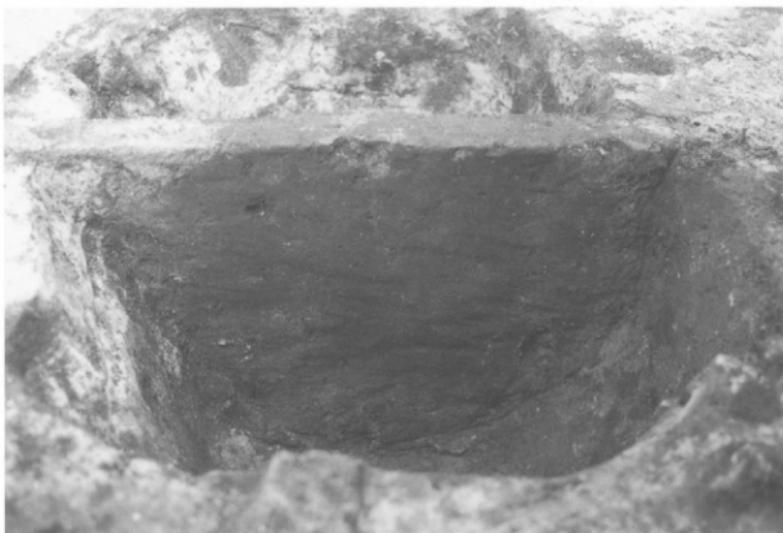
5. SX08棺内縦断面南半（東から）



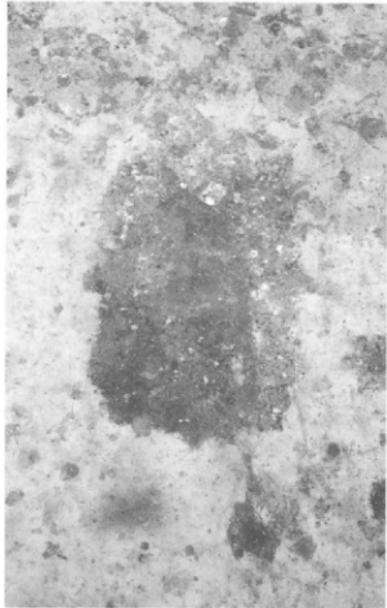
6. SX08棺内縦断面北半（東から）



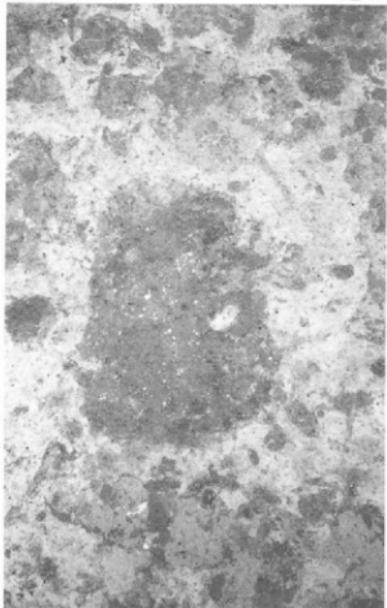
1. 第3墳墓群 SX09検出状況（西から）



2. 第3墳墓群 SX09断面（南から）



1. 第3墳墓群 SX10検出状況（北から）



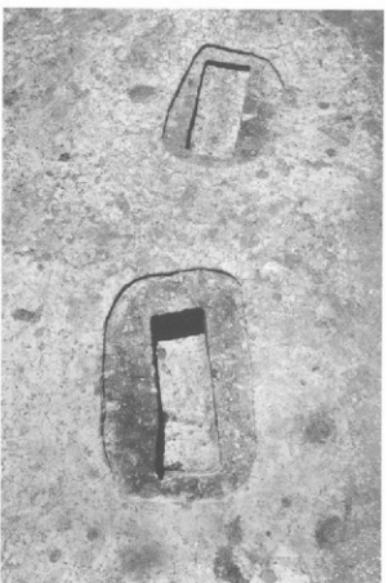
2. 第3墳墓群 SX11検出状況（北から）



3. SX10棺内横断面（北から）



4. SX11棺内横断面（南から）



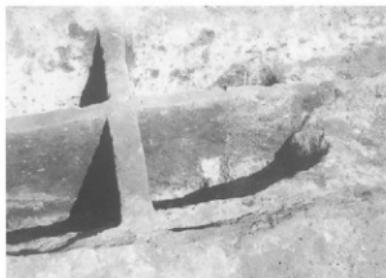
5. 第3墳墓群 SX10、SX11（北から）



1. 第3墳墓群 SX14 (西から)



2. 第3墳墓群 SX14縦断面北半 (北西から)



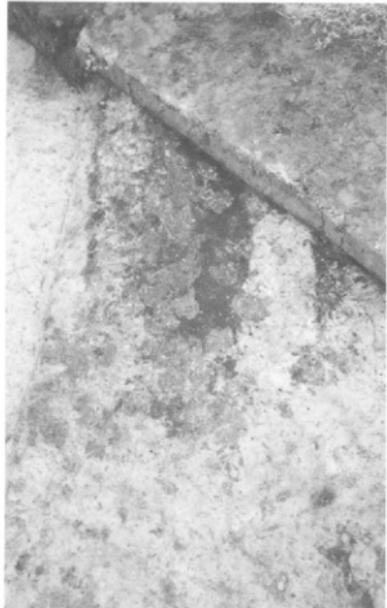
3. 第3墳墓群 SX14縦断面南半 (西から)



4. 第3墳墓群 SX14縦断面北端 (西から)



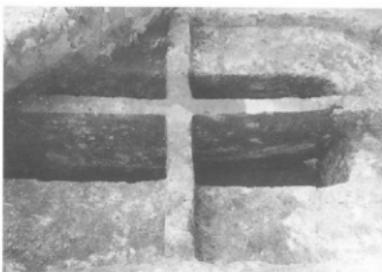
5. 第3墳墓群 SX14横断面 (南から)



1. 第4墳墓群 SX12木棺検出状況（北から）



2. 第4墳墓群 SX12（北から）



3. 第4墳墓群 SX12棺内縦断面（東から）



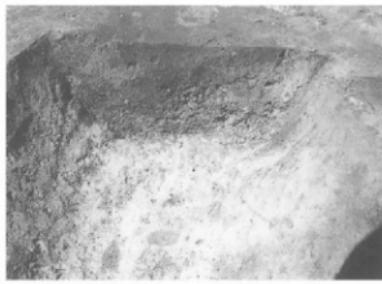
4. 第4墳墓群 SX12棺内横断面（北から）



1. 第4墳墓群 SX13 (西から)



2. 第4墳墓群 SX13棺内横断面 (北から)



3. SD05断面 (南から)



4. 第4墳墓群 SX13 (北から)



1. 第4墳墓群 SX15（東から）



2. 第4墳墓群 SX15供獻土器出土状況（西から）



3. 第4墳墓群 SX15供獻土器出土状況（東から）



1. 第4 墳墓群 SX16横断面（北から）



2. 第4 墳墓群 SX16（東から）



1. SD01断面（西から）



2. SD01断面（南西から）



3. SD02断面（西から）



4. SD03断面（西から）



5. SD03断面Dライン（北から）



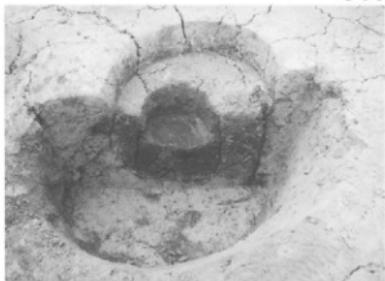
6. SD03断面Dライン（南から）



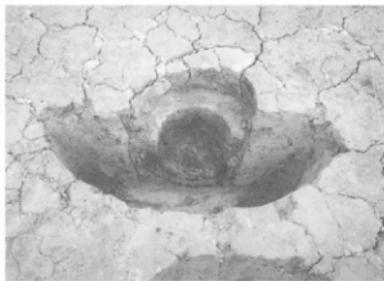
7. SD03断面Eライン（南から）



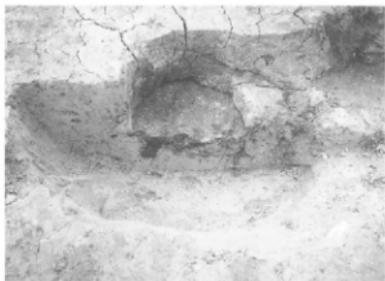
8. SD03断面Fライン（南から）



1. SB01柱穴断面（東から）



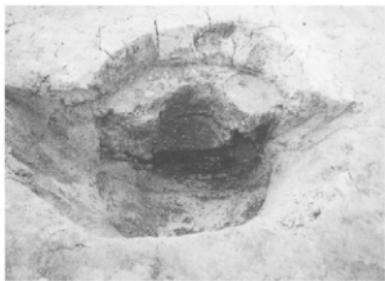
2. SB01柱穴断面（東から）



3. SB01柱穴断面（東から）



4. SB01柱穴断面（東から）



5. SB01柱穴断面（東から）



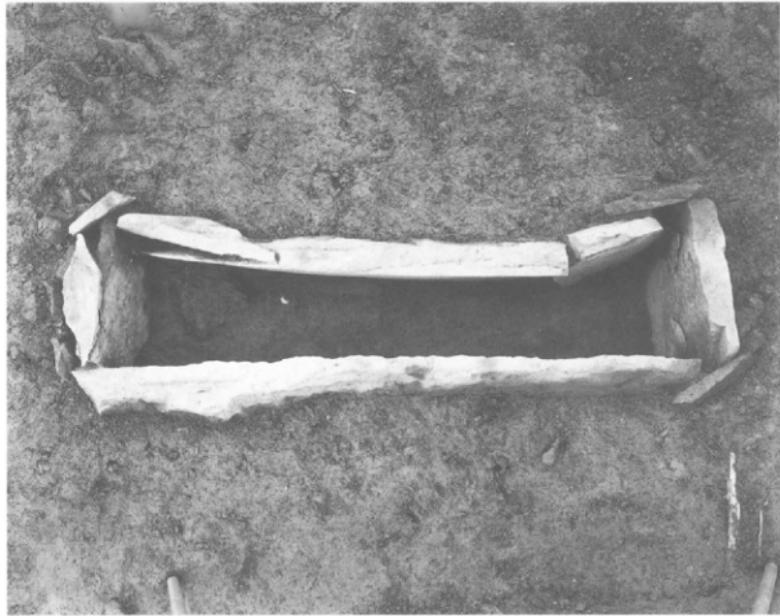
1. 1号墳 石棺検出状況（北東から）



2. 1号墳 石棺内横断面（南東から）



3. 1号墳 全景（南東から）



1. 1号墳 石棺（北東から）



2. 1号墳 棺内遺物出土状況（北西から）



1. 2号墳 全景（北西から）



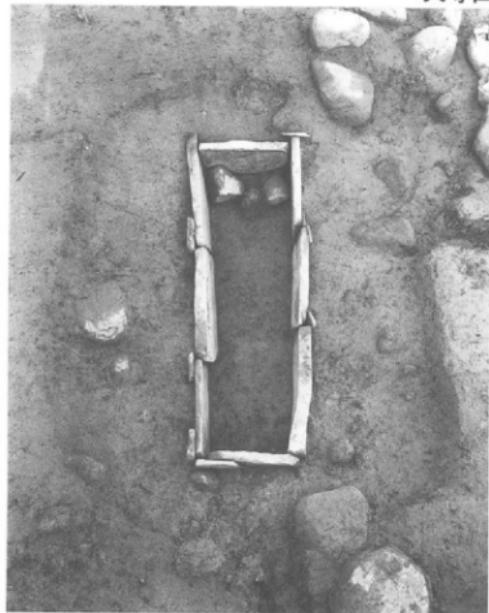
2. 2号墳 全景（北西から）



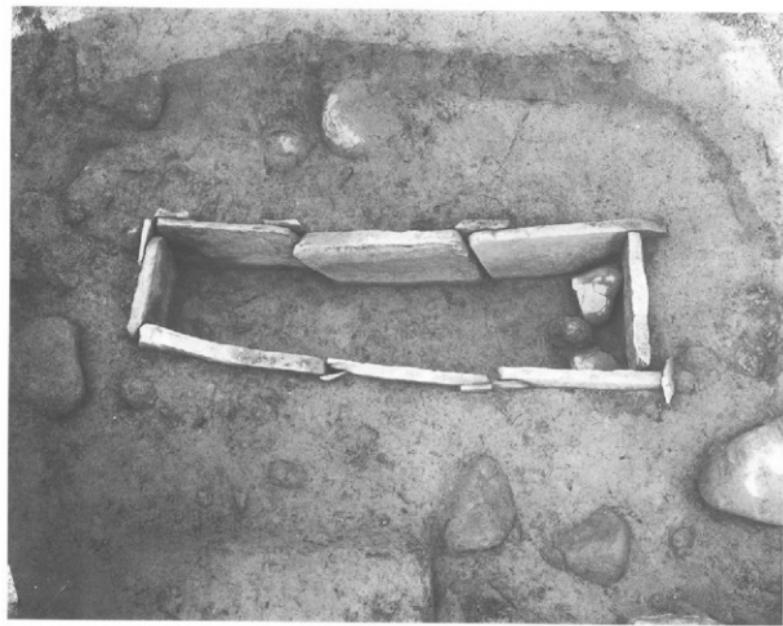
1. 2号墳 石棺検出状況（南西から）



2. 2号墳 石棺検出状況（南東から）



1. 2号墳 石棺内（南西から）



2. 2号墳 石棺内（南東から）



1. 2号墳 石棺上土層断面（南東から）



2. 2号墳 石棺上鐵器出土状況（南東から）



3. 2号墳 石棺蓋石（北から）



4. 2号墳 石棺内断面（南西から）

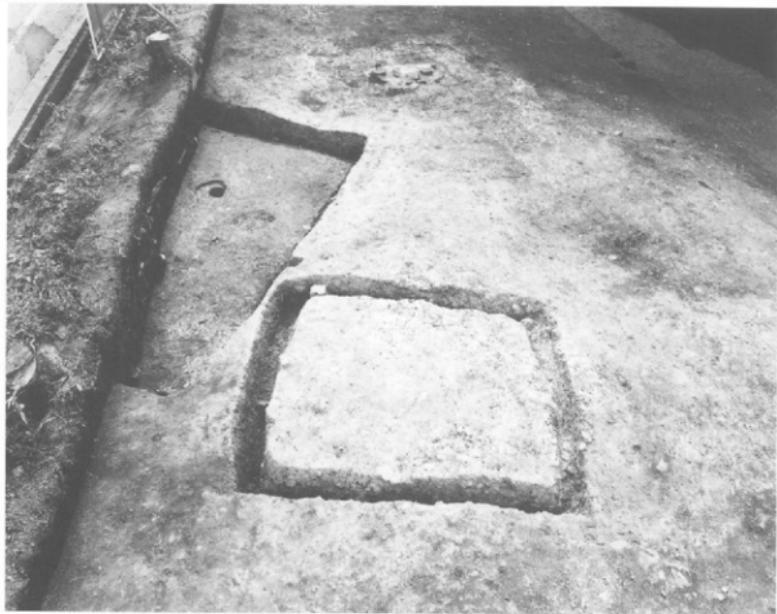
5. 2号墳 石棺蓋石除去直後（南西から）



6. 2号墳 石棺内の石枕と人骨（南西から）



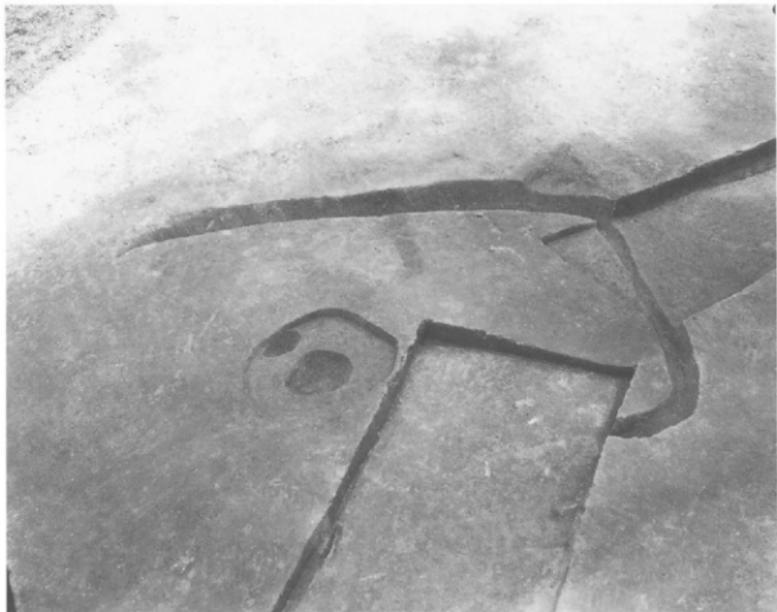
7. 2号墳 石棺内の石枕（南西から）



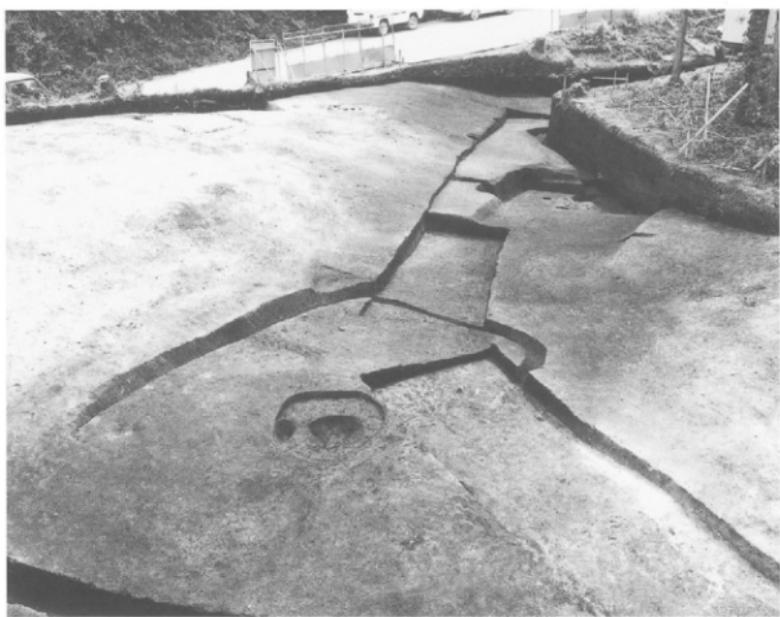
1. SH01・02 (東から)



2. SH01・02 (西から)



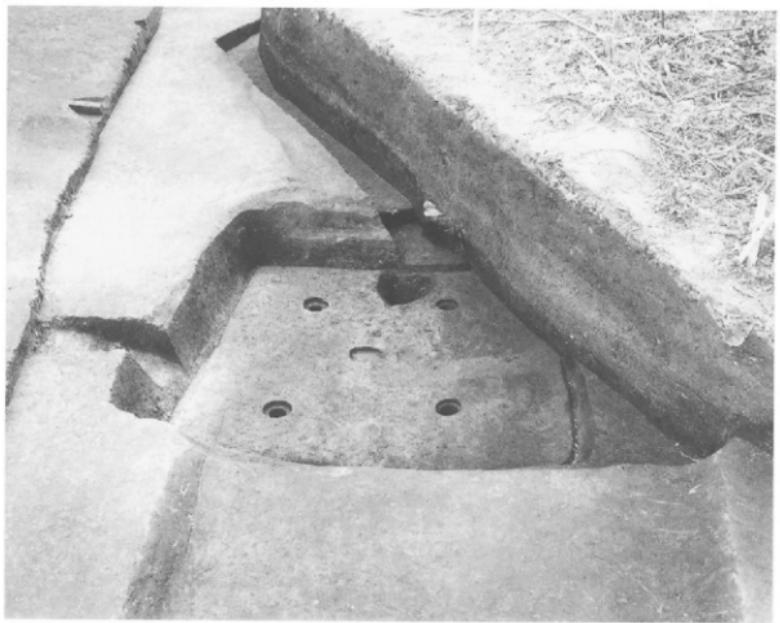
1. SH04 (北から)



2. SH04 (北東から)



1. SH05 (南から)



2. SH05 (東から)



1. SH05埋土断面（南東から）



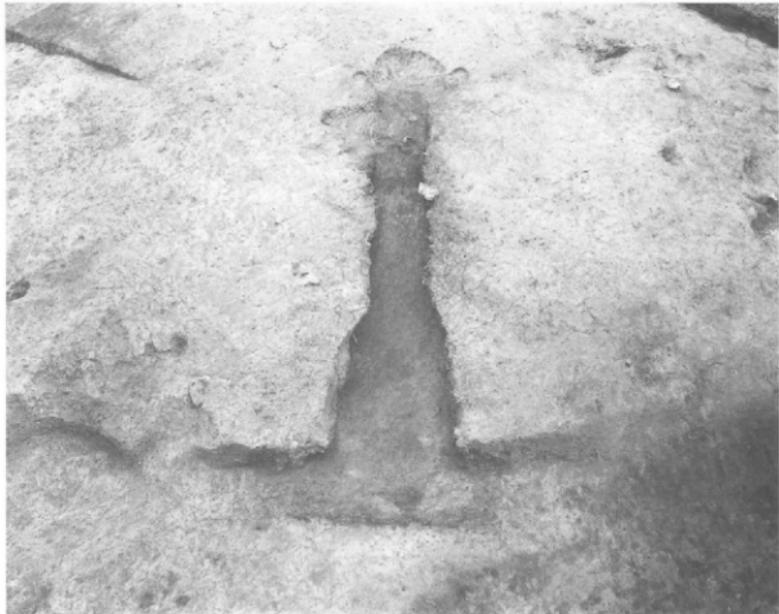
2. SH05埋土断面（東から）



1. 小田池窯検出状況（東から）



2. 小田池窯検出状況（西から）



1. 小田池窯完掘状況（東から）



2. 小田池窯完掘状況（東から）



1. 小田池窯窯体内埋土断面（東から）



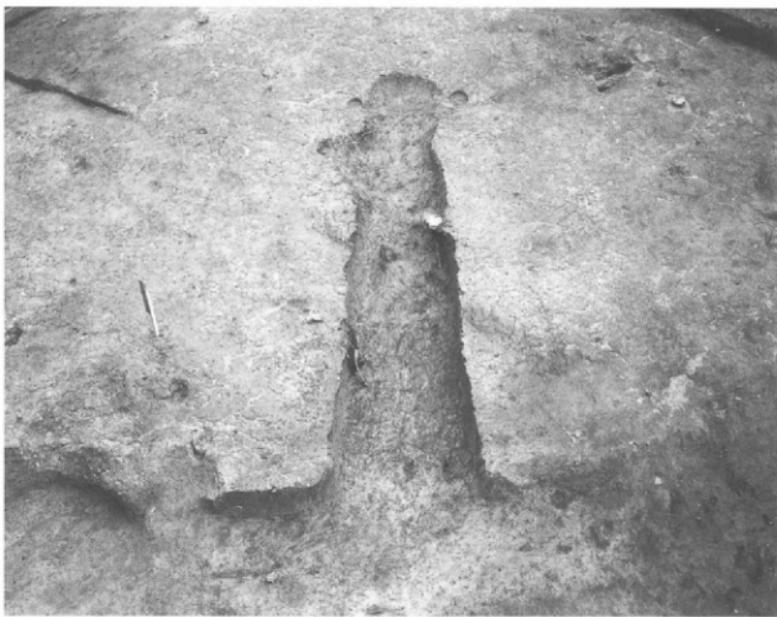
2. 小田池窯窯体内埋土断面（東から）



3. 小田池窯窯体内埋土断面（東から）



1. 小田池窯窯壁除去後（西から）



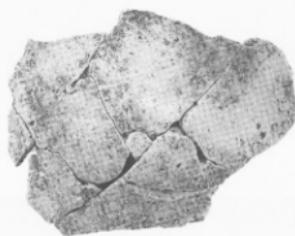
2. 小田池窯窯壁除去後（東から）



1



3



127

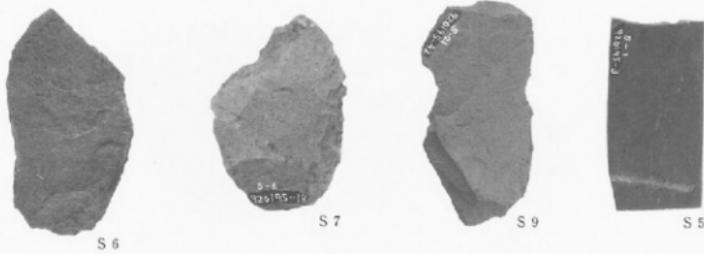


4



5







S10



S11



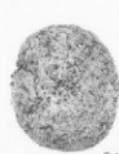
S12



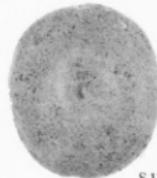
S13



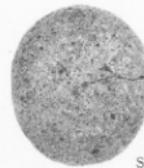
S14



S10



S11



S12



S13



S14



15



22



17



19



20



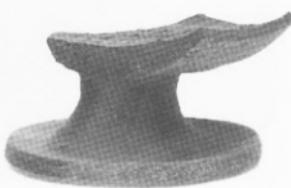
21



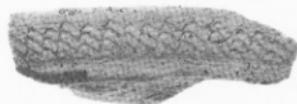
18



27



51



23



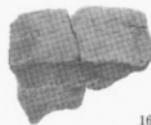
26



14



24



16



25



29



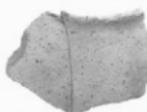
28



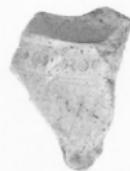
30



29



31



47



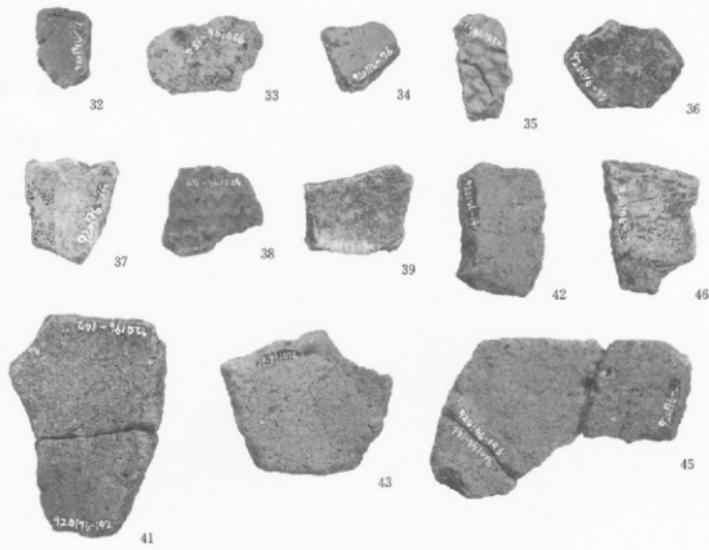
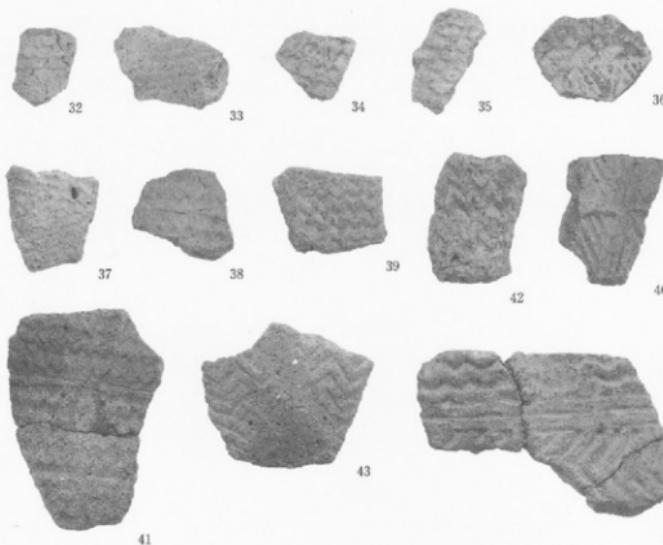
48

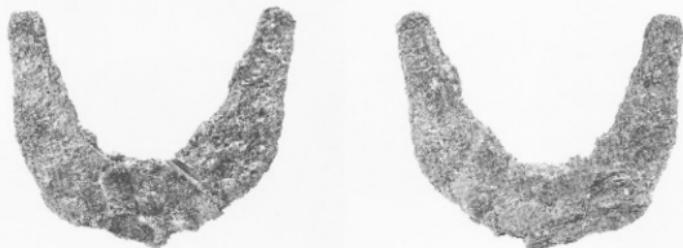
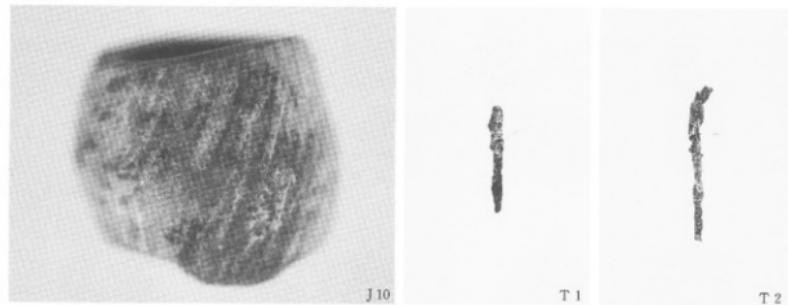
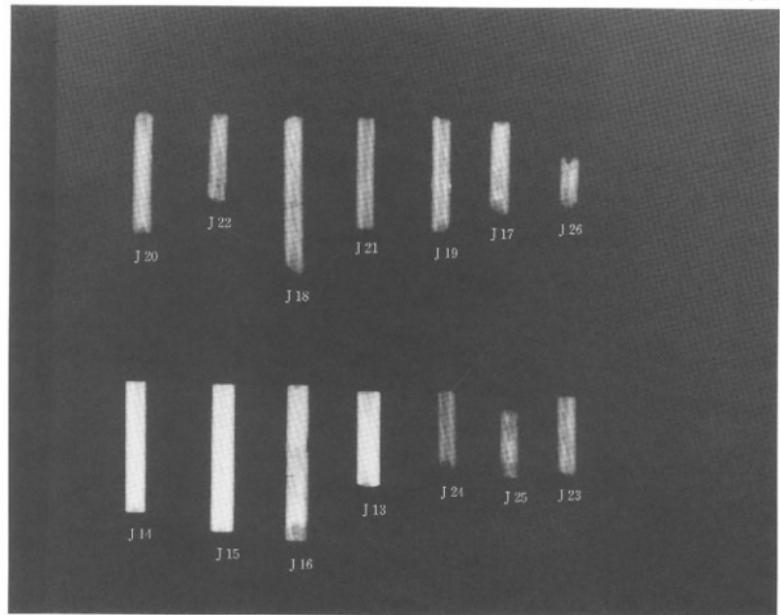


49



50





T 6



T 4



T 5



T 3

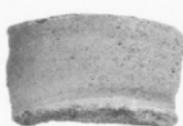


T 5





54



79



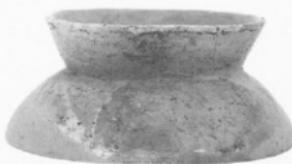
73



55



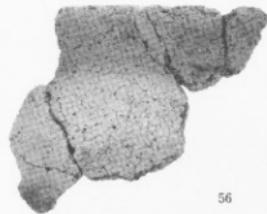
88



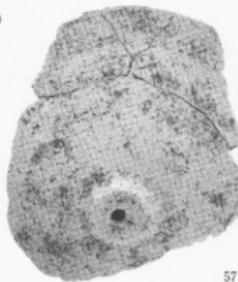
52



53



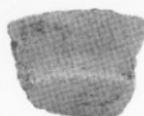
56



57



58



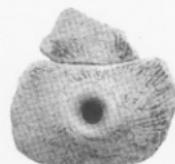
64



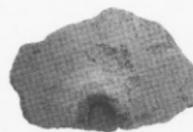
62



60



66



65



67



68



63



59



61



69



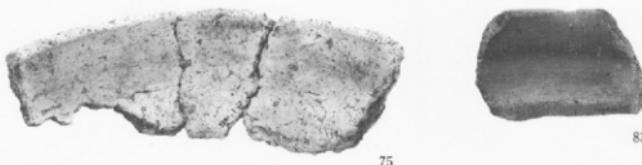
81



80

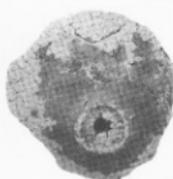


84





85



87



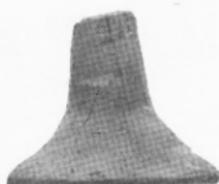
86



89



91



99



92



94



95



96



90



93



98



101



102



107



114



111



121



112



122



105



106



104



110



109



103



116



118



117



119



123

報告書抄録

ふりがな	つついいせき・あんのたにいせき・おおでらやまこふんぐん・こでんちいせき
書名	筒井遺跡・庵の谷遺跡・大寺山古墳群・小田池遺跡
副書名	一般県道村岡竹野線道路改良工事に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第267冊
編著者名	中村 弘・藤田 淳
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
所在地	兵庫県神戸市兵庫区荒田町2-1-5
発行年月日	2004年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	発掘調査番号					
筒井遺跡	美方郡村岡町 福岡字筒井	28581	920195	35° 25'12"	134° 35'58"	19920831 ～1030	753m ²	一般県道 村岡竹野 線道路改 良工事
庵の谷遺跡	美方郡村岡町 森脇字小瀬道		920196	35° 25'11"	134° 35'49"	19920728 ～0903	968m ²	
大寺山古墳群	美方郡村岡町 黒田字なめた		920285	35° 25'16"	134° 35'42"	19921102 ～1221	588m ²	
小田池遺跡	美方郡村岡町 森脇字小出池		930019	35° 25'16"	134° 35'39"	19930506 ～0630	652m ²	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
筒井遺跡	集落跡	縄文時代	住居跡状遺構2基	縄文土器、石器	
		弥生時代 後期	土壙、溝	弥生土器	
		中世	掘立柱建物跡1棟	土師器	
庵の谷遺跡	墳墓・集落跡	弥生時代 後期末	箱式木棺直葬墓15基、 土築墓1基、 掘立柱建物跡1棟	縄文土器、弥生土器、須 恵器	四隅突出型埴丘墓 に類するものあり
大寺山古墳群	古墳	古墳時代中期	石棺2基	勾玉、臼玉、管玉、針状 鉄製品、短剣、刀子、鍔 鍼の刃先	
小田池遺跡	集落・窯	古墳・奈良	堅穴住居址4棟、窯1基	須恵器、土師器	須恵器には初期須 恵器を含む

緯度、経度は平成14年4月1日施行の測量法改正による世界測地系に基づく値

兵庫県文化財調査報告 第267冊

美方郡村岡町所在

**筒井遺跡・庵の谷遺跡
大寺山古墳群・小田池遺跡**

2004年3月31日発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5

発行 兵庫県教育委員会
〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10-1

印刷 菱三印刷株式会社
〒652-0803 神戸市兵庫区大開通2丁目2-11